

川柳塔

平成十三年二月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷八八五号



白川協加盟

No. 885

二月号

予告

西尾栞七回忌追悼句会

とき 5月5日(土)

ところ 八尾グランドホテル

麻生路郎・葭乃

句碑建立記念川柳大会

とき 7月8日(日)

ところ 尾道市

句碑公園・公民館

プレ国民文化祭とっとり

とき 10月21日(日)

ところ 鹿野小学校体育館

第7回全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞつてご参加ください。

課題と選者(各題2句・連記)

「道」 西谷 東山 泉 比呂史 共選
「溶ける」 西来 みわ 兵頭まもる 共選
「客」 福岡 竜雄 吉岡 茂緒 共選
「トリック」 濱野 奇童 平井 吾風 共選
「展 望」 本庄 快哉 西出 楓楽 共選
第二次選者 仲川たけし 磯野いさむ 橘高 薫風
齋藤 大雄 吉岡 龍城

参加費 2000円(投句料・「平成柳多留」第7集代)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・社

日本青少年育成協会会長賞・社全日本川柳協

会会長賞・全日本川柳誌上大会賞・秀作賞

締切 平成13年3月10日(土)

発表・表彰 平成13年6月・第25回全日本川柳新湯大会

参加方法 所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費

と共に左記へ(用紙は請求くださいれば送ります)。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210
FAX (06) 6352-2433

ぴちぴちした

川柳を次世代へ

河内 天笑

紅白歌合戦が終ってNHKにゆく年くる年の除夜の鐘が流れ出すと、「さあいよいよだぞ」と急に身が引き締まります。五、六年前までは、一升瓶でしたが、今年は冷酒の二合瓶での年越しです。

二十世紀から二十一世紀へ移る、正に千載一遇のチャンスなので、その瞬間をどのように過ごせば意味深いだろうかかと考えました。

さつきまでお煮しめの匂いがあつた部屋も、今は箸紙などを書いた墨の香りが漂っています。「よっしゃ決まった。その瞬間は歯を磨いていよう！」つまり世紀越えの歯磨きを思いついたのです。11時58分頃から磨き出しました。

歯ぶらしをくわえた僕のまぬけ面をなんて本年最後の一句は洗面の鏡に映

る自分の顔でした。そしていよいよ零時の五秒前から四・三・二・一とカウントダウンに合わせて、今しがた立てた計画通り歯を磨きながらの世紀越えが果たされたのです。とてもすっきりした気分でした。

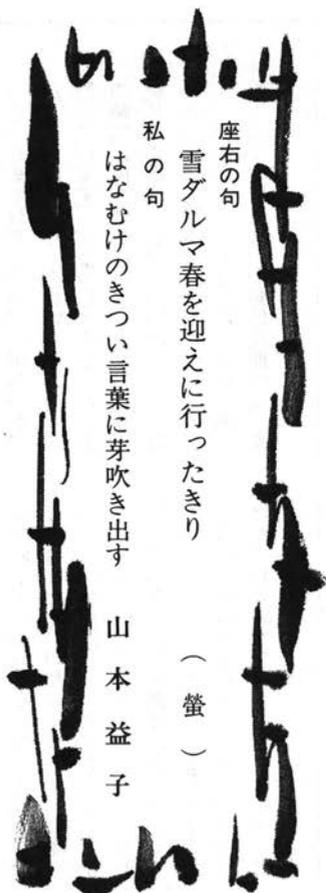
アナログからデジタルへ、インフォメーションテクノロジー（IT情報通信技術）は、日に日に進化を続け、遂に携帯電話の数が一般加入電話のそれを上回るなど、進化のスピードは増していくばかりです。この激変の環境下にあつて私達の携わる川柳の世界はどういう進み方をするのでしょうか。

高齢化の進む現代では、川柳作家の平均年齢もずいぶん高くなつたことは、否めないことです。昭和44年（一九六九年）お正月の堺川柳会で、当時客人として来ておられた故中尾藻介さんが、「いまだ本の川柳人の平均年齢は52歳だそうです。しかし、この会は天笑さんと月子さんが（当時、34歳と28歳）ぐんと平均値を下げてくれています。」（一同拍手喝采）こ

んな一コマのあつたことが懐かしく思い出されます。

いま堺川柳会の常時出席者36名の平均年齢は67歳であります。一つの社会現象としてこれは当然の変化です。熟年層女性の川柳への進出も目ざましい変革と言えるでしょう。そして各地でのカルチャークラス等の充実で川柳は質的にも大いに向上して参りました。然し全体的な質的底下げのみられる反面、作品の平均化も感じられてなりません。その点では、あくの強い作家が多く輩出され、個性の強い作品がどんどん創られるようにと願っています。

こうした地味な努力が、次代へ引き継がれる川柳界のあるべき姿だろうと確信致します。われわれが新鮮で魅力ある、ぴちぴちした作品を創り続ければ、若者達も振り向いてくれるでしょう。そういう川柳界の受け皿を作りながら同時に若者獲得の組織的な働きかけも実行に移し、十年先、十五年先を見据えて進んで参りたいと考えております。



座右の句

雪ダルマ春を迎えに行つたきり

私の句

はなむけのきつい言葉に芽吹き出す

山本 益子

(螢)

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ぴちぴちした川柳を次世代へ……………	河内 天笑 ……(1)
菜園と川柳……………	前 たもつ ……(2)
川柳塔(同人吟)……………	河内天笑選 ……(4)
自選集……………	
水煙抄……………	板尾岳人選 ……(58)
秀句鑑賞「同人吟」……………	小寺花峯 ……(50)
水煙抄……………	金村青湖 ……(87)
愛染帖……………	波多野五楽庵選 ……(84)
川柳の群像 鳥本 泰……………	東野 大八 ……(88)
誹風柳多留二四篇研究 26……………	
■私の川柳 二つの流れ……………	川上 大輪 ……(92)
苗香の花……………	西出楓楽選 ……(94)

菜園と川柳

前 たもつ

一定年後始めた川柳にくらべると、菜園つくりはかれこれ三十年になる。

三十年前、枚方市に移り住んだ。その頃、家の裏の休耕田一枚借り受け、近所の人たちと耕し、一畝、二畝と増やしながら、野菜づくりを始めた。今は十畝ほどで約四十坪くらい作っている。

この間、茄子や胡瓜、大根、じゃがいも、えんどうといった四季の野菜を、有機無農薬栽培を中心に育てる楽しみと、食べる楽しみを味わってきた。

菜園を始めた頃は子育ての真つ最中であり、菜園とわが家の歩みを共にしたと言つてよいだろう。

見たくない桜もあった 五十年
この句は校長になった頃の心境を、退職して川柳をやり出して作つた句である。その頃のが家の菜園は草まみれで、鍬など持つたことのない妻に、近所の人が見かねて手伝ってくれたものだった。

菜園つくりの本当の楽しさを知つたのは、定年になり、ライフワークとして、菜園つく

一路集「語る」……………	梅田宣司選……………(96)
「そろそろ」……………	生嶋ますみ選……………(96)
初歩教室「見る」……………	菊地政勝選……………(97)
■エッセー	吐田公一……………(98)
『五体不満足』を読んで……………	奥山美智子……………(57)
野麦峠越え……………	早川盛夫……………(100)
追悼 高杉鬼遊さん……………	橋高薫風・田中正坊・米田恭昌・八木千代……………(102)
追悼 大坂形水さん……………	藤村の女・藤村亜成……………(106)
一月本社句会……………	各地柳壇(佳句地十選/北野哲男)……………(110)
柳界展望……………	二月各地句会案内……………(114)
■編集後記……………	楓楽・義子……………(132)
	楓楽・義子……………(134)

座右の句

子の鬼も居るだろ甘い豆を混ぜ

(寿馬)

私の句

うまいこと忘年会に風邪治る

妻谷重三

り、川柳、ポランテアに打ち込むようになってからである。作り始めた頃の川柳から、菜園つくりの樂しさが伝わってくる。

青虫に少しキャベツを分けてやる

茄子胡瓜に朝のあいさつして回り

貸農園軍手タースで買ってくる

堤防で集めた草で堆肥を作り、鶏ふんと米

又カを中心に育てたトマト、どんなに甘くおいしいか。農薬を使わず、酢、焼酎、木酢を

混ぜて作った「ストチュウ液」で育てた小松

菜などの新鮮さをたっぷり味わった。

多少虫食いがあっても、安心してお裾分け

でき、喜んでもらえた。

野菜には連作のできないものが多いことを

知った。特にナス科は三、四年さけること。

その他、種の蒔き方、苗の植え方、肥料のやり方、そして土つくりの大切さなど、多くの

ことを学んだ。

この春、転居するため、まだまだ楽しみたい

思いを残して、畑を返す。この数年間で百

句ほど作った「菜園川柳」の中から、いくつ

かあげて終わる。

菜園を回ると朝は動き出す

小さくとも捨てずに植える葱の苗

耕せば土も返事をしてくれる

虫食菜有機栽培無農薬

土に還る証明などはいりません



河内天笑選

西宮市 西口 いわゑ

その日まで夢は無限の宝くじ

この国を変えろドタバタ劇らしい

おしゃべりして時に自分を抜け出そう

熱爛とふんわりいのち長らえる

揺れながらつまずきながら花の駅

たばこ吸うしあわせそうな顔をして

宇部市 平田 実男

きらめいた過去は喋らぬホームレス

矢印の通りに歩く味気なさ

合鍵を渡され戸惑うのは男

船長が舵を取らない日本丸

ご臨終告げるお医者者の無表情

子の嫁に魅力感じてハツとする

富田林市 藤田 泰子

新世紀のらりくらりと参ろうか

侘しさのことは書くまい旅便り

切り口に花の涙を見てしまひ

千円の豆腐が喉にひっかかる

やりくりに一翼担う自家菜園

遺族年金良人の愛は永遠に

竹原市 小島 蘭幸

一月一日やがてこの地に句碑が建つ

面影よ尾道の坂樂しかり

オカリナよ水平線が見えてくる

皿洗う気分転換にはなるな

十九歳バイトが板についてくる

二十一歳挑戦状をいくつ持つ

枚方市 前 たもつ

新世紀とぐるを巻いて見据えたい

極楽はこの世にあった今のいま

鍋料理 日本人の顔で食べ

洋服屋ぼくの股下知っている

石けんも痩せるとやはりみすばらし

こつた煮にわが人生を重ねてみ

八尾市 神原 まさと

精いっぱい唸り老犬威嚇する

糞公害 平和の鳩が疎まれる

産卵に命をかけてのぼる鮭

糖尿と言われ手みやげ出しそびれ

針供養 開戦の日と子は知らず

鬼遊師の葬儀冬の日暖かく

大阪市 板東 倫子

花好きが住む路地裏にある情け

今日はダンス明日はコーラス妻多忙

民主主義の国が選挙で揉めている

インターネットに凝って嫁には行く気なし

医療ミス 医は仁なりは絵空ごと

福祉国あと希うのは不老不死

大阪市 西出 楓 楽

会いたい人に会える気がする街ポルト(ポルトガル紀行)

新世紀用いポルトのワイン買う

ロカ岬快晴 詩囊満ちてこず

リスポンは呑気で不屈 坂の街

中世の風ふとオビドスの石畳

旅八日うどんが恋しすし恋し

堺市 桑原 道夫

何よりも拍手がほしい芒かな

こんじやくを震わせているさびしさよ

おそろしい 真面目な人の鼻の穴

ブランドの少年自虐にして他虐

強壯剤アタッシュケースを持ったまま

恋人のうす桃色の耳の骨

羽曳野市 徳山 みつこ

ITの時代遅れを自慢する

ここは先ず父さんの顔立てておく

病人に世間の風もあててあげ

大鍋の大根べっこう色で冬

三途の川も通行料が高うなる

いいことがあるぞと養虫が揺れる

吹田市 山本 希久子

刹那舞う雪に隠れた師の影よ(鬼遊先生を悼む)

天国の句座ユーモアで盛り上げる

信号を越えたら春が待っている

二度とない今日へ朝寝はしておれぬ

風除けの男がよそ見ばかりする

木枯しを春風にする愛ひとつ

米子市 青戸 田鶴

震災の街へみそぎの雪積る

めでたさのかけの哀しさなど想う

菜の花の咲く頃余震終るだろう

老人の街に空地がふえてゆく

山吹の黄はつましい友に似る

しらじらと夜明けの月は頼りない

和歌山市 古久保 和子

カウントダウン世紀跨いで酔っている
シュツシュシュツシュひとり元氣な炊飯器

自画像にホクロを描いてどなたさま
つるべ落としへ洗濯物が風邪をひく

ほんの些細なことが噂の震源地
眠そうなひとの尻尾を踏んでみる

香芝市 大内朝子

求愛のダンスよ鶴の華麗なり

ロゼワインかわいい魔女にしてくれる
ほつといてくれる親切ありがたい

まあいいかむきになるのはもうよそ
あっさりとい医者返事は老化です

好きだからつかず離れずして歩く
米子市 鷺見正子

クリスマスケーキをどうぞ仏さま
常備菜コトコト今日は妻が居る

一汁一菜 鯨大根に蟹の汁
押し入れに次つぎ溜っていきのう

たばこ税取って差別をするなんて
一面もスポーツ欄も騒がしい

黒石市 相馬一花

還暦の私を襲う四十眉

健診の結果で変わる酒の量

馬面を瓜実顔と言ひ直す

再生紙チラシにされて蘇生する

ストレスを味方にすれば疲れない
遠来の友に飲ませる隠し酒

茨木市 藤井正雄
妻の留守 長女が大人ぶる夕餉
ゆっくりと老いのワープロあいうえお

屠蘇祝う同じ巳歳の孫が注ぐ
人生の区切り還暦定年日

庭の隅落ち葉で埋まる鳥の墓
碁を囲む別の顔持つ祖父であり

東大阪市 谷口 義
長男は迷い次男は迷わない
悩み聞く方も悩みをかかえてる

やりくりも趣味の一つにしてしまふ
兄嫁の皺が伸びてた三回忌

あっさり頼みあっさり断られ
佐助が一輪さしてある極み

東京都 播本充子
にらめっこタレ目に負けたお人好し
人生のドア蹴とばしてでも開ける

満点パパをやります馬鹿息子
イヒヒヒヒ魔女が仕掛けに念を入れ

主語のない会話が弾むのも夫婦
明日からの私に重い賞となる

豊中市 田中正坊

華清禪寺 彩あざやかな仏様(雲南旅遊)

秋天の下澄みわたる昆明湖

春の城いま海棠の花ざかり

白族の女性ガイドのいい笑顔

玉龍雪山 神さまがおわす嶺

天人合一 麗江はシャングリラ

鳥取市 岸本宏章

イラストに困る巳年の年賀状

げんこつのやさしさ今の子は知らず

相手より深目に頭下げておく

こしひかり収量よりも多く食べ

さといもの皮知らぬまま主婦となる

場数踏むたびに迷いが深くなる

鳥取市 岸本孝子

トンネルの出口で欲がまたひとつ

遺言を書くとき仏の灯が揺れる

セクハラがうっかり肩もたたかせぬ

気が遠くなるほど背負う国債だ

良妻の短所のひとつ酒切らす

加藤さん男一匹安く売り

大阪市 神夏磯典子

検査結果 刑執行のように待つ

現代の唄かも知れぬコマーシャル

善人が直立不動くずさない

無駄骨が忘れた頃に報われる

土曜日のチラシ妻の目釘付けに

必ずの約束愛は揺れるもの

豊中市 吉田あずき

歳末よ人の流れの早送り

師走の月冴えて生き方問う如し

厚着して伊達の薄着をなつかしむ

筋書きのない道をゆくスニーカー

からくりも裏へ回れば他愛なし

煤払い去年ほどには届かぬ手

岡山市 井上柳五郎

ほのぼのとしきたりどおり年迎え

住き年に念じてめくる初暦

カサコソと語りかけくる落葉踏む

チェンソーの音虫食い松の断末魔

自慢ではなくてニトロを見せる友

横転の土俵を叩く負け力士

和歌山市 田中みね

文句無しの下で大いに疎ましい

家事万端終えて炬燵にへばりつく

ひとりでも手抜きはしないティータム

本日限りとチラシにあるがもう三日

あつちこつち痛むがお口大丈夫

懐に火の玉抱いて新世紀

岡山県 富坂志重
余命ないつるのキュウリは腰を曲げ

常識の視野で終りをむかえたい

北風に逆らう私の意地っ張り

パソコンが乗りビツクリした古机

よそ行きも普段もずつと同じ顔

記憶力ヒューズが切れて困ってる

黒石市 千葉風樹

雪しんしん泣きたい程のしずかなり

常識を破壊してゆく世紀末

太陽よりも明るくなつて愛誓う

指切りの温もり消えぬ花時計

ハンガーの温さに戻る都市砂漠

赤とんぼに主役とられた野外劇

竹原市 三宅不朽

檀山の根雪とかせよ新世紀

ぬぎすてて寂寥天を突く銀杏

筆いくらかえても諍うだろう遺書

少年の眼にはなんでもないボール

人よりも車が大将さあどうぞ

名札までつけて疑う税吏の眼

香川県 神保坊太郎

少年の闇へ悪魔が笛を吹く

借景が庭先つづき瀬戸の海

介護うけながら関白やめられず

年輪のみだれ貴方の揺れた頃
猫の手にされて師走に狩出され
絶対は死ぬことだけと見つけたり

青森県 西谷大吾

ねんごろに磨けば石が語りだす

恐山石は一途にただ祈る

満月の夜は人恋う雪女

地球儀が歪んだままで新世紀

出稼ぎが発つて無口な子と老いと

地を走る雪に津軽は押し黙る

倉吉市 米田幸子

屋根裏に折紙つきの壺がある

俸せに慣れて他人を傷つける

じつくりと思案してから金は貸す

呆然と言葉失う突然死

みほとけの慈悲が祈りの掌に溢れ

舟はもう母の港をあとにする

米子市 光井玲子

名月を地震のゆれの中で見る

雪をいただき大山ほんに神々しい

雪しんしん無駄口などはよせつけぬ

月冴えて昔のひみつまで照らす

荒涼として無気味だな冬の海

蕎麦の花 母の匂いがしてならぬ

鳥取県 新家 完司

殺された魚を悼み海が鳴る

海鳴りも岩木嵐も念仏だ

オゾン層今日もごっそり壊された

脳天にこの世の雨が突き刺さる

冬枯れの景色が肌合ってきた

鳥取県 土橋 はるお

木枯らしだお米の汁の旨い時季

まろやかに抓ってくれるお母さん

感情に走る男の咳ばらい

汗の出る仕事の方がわしや似合う

太るから食べたべんと食べる娘だ

鳥取県 土橋 睦子

気配りのうまい男に最敬礼

陽が昇る今を大事に生きるだけ

風雪に耐えた女の舞い納め

枯れ葉舞うたったひとりの遊園地

褒めちぎるあなたの嘘が見抜けない

鳥取県 西原 艶子

敗戦であっても父が無事還る

ささやかなしあわせ家族みな揃う

凧が海はまるで仏のようになる

海の幸どっさり抱いた海の底

平凡な道がわたしによく似合う

鳥取県 石谷 美恵子

アー海の匂い生気を取り戻す

はつきりと言えぬ訳ありの退院

倦怠期が匂うバラバラの行動

景気も下 政治も下の下世紀末

ストレスをみんな吸いこむ海の蒼

鳥取県 谷口 次男

あの小島いっぱい秘話を埋めている

口だけの民主主義だと笑う国

接点が脆くはかないサラリーマン

隠し事しないでできない星の下

このおでん俺の口から逃げる気だ

鳥取県 岩崎 みさ江

落葉掃く音から冬になっていく

タクト振るわたしを奮い立たすため

墓ひとつ守り抜けない親不孝

魂を抜いた墓石に手を合わせ

物忘れあまりのことに笑い出す

鳥取県 山本 正光

香を焚く煙が妻に届くまで

娘や孫と同居でいつも羨まれ

こめかみの火薬はずして初春を待つ

人並と思ふ貯金も税もない

伯耆路の鬼の里でも花だより

こぼれるような笑顔で焼けたパン
或る時は泣いても見たい夫の腕
奇抜さは誰にも負けぬ赤椿
原っぱを走る小犬とわたくしと

鳥取県 田村 きみ子

この雪が解けたら母と花遍路

鳥取県 石尾 かつ乃

風呂敷に包むまあるい親ごころ

近況を余白に一句つつがない

生い立ちを語るに丁度よい夜霧

遠い日の思い出たんと過疎の駅

ゲレンデが解ける無情の冬の雨

鳥取県 津村 八重子

大波小なみのり越え米寿までとどき

新世紀祝う葉ボタン生いきと

洗い髪まとめ鏡と対話する

心にゆとり抱いて余生をたのしまん

鹿野笠郷土みやげのナンバーワン

鳥取県 林 露 杖

ミレニアム二千円札見えていない

ITもドコモも無縁老いの日々

主治医にも駆け引き病状加減して

消費税のど元過ぎて介護保険

温泉に浸す五体の皺を撫で

お帰りと云える子がある夫もある
マークシートで人生の正誤表
トゲの無い嘘から受けた致命傷

鳥取県 奥谷 彩子

躓いた石で拾った生きる知恵
完璧に敷いた布石にある油断

鳥取県 橋本 多哥由

肩書きが増えて脳天光りだす

人生に真実一路 八十路坂

法螺吹きで残念踊る相手ない

永田町いろいろあつて大変だ

噂にはならぬ仲だとはつきりす

鳥取県 國森 武子

菊の芽をひとつ頼んで土準備

色と香にウーンと呻くいい菊だ

四百万白磁茶碗でお茶よばれ

青空に見事に咲いた柿の海

まっ黒に光る しいの実宝石だ

鳥取県 近藤 春 恵

ふる里にストレス捨ててに行つてくる

麻酔から覚めてたしかな脈を診る

都会でも鳥取弁で話する

まなうらにいつも微笑む母がいる

手さぐりで幸せ探す旅に出る

鳥取県 上田 俊路

新世紀そろそろ運も向くだろう
回らない寿司屋もあると子が誘う
重いから持ってあげると孫が言う
あたご梨自転車に積み友が来る
少子化でも村の祭りの灯は消せぬ

鳥取県 権代 康女

惜しまれて葉たばこやめる決意する
私には都会に住めぬ虫がいる
たばこ吸い煙残して去ってゆき
初恋は心の中で清く住む
皮算用人は勝手な値ぶみする

鳥取県 太田 幸枝

八紘の海に抱かれて島育ち
今そこで話した人の救急車
呻く声そして産声たからかに
純情の芽を踏みにじるストーカー
弁当の飯一粒も残さない

鳥取県 吉田 孔美子

よう解る元気と書いた絵をもらう
ロボットに真似の出来ない絵を残す
小さい嘘 海の軒を聞いている
漁火のない海怪物に等し
夜間工事ライトアップのもみじ山

鳥取県 さえき やえ

モズよこい冬の小庭がさみしいよ
親子だな温い言葉でつきはなす
采譜にない理数科系の孫二人
笑う鬼一匹かってるす守る
温かい情にふれる柚子の風呂

鳥取県 原 みさを

流れ弾をときどき貰う場所にいる
森の奥むかしむかしの灯がともる
ふだん着で巳年の朝がやってくる
ふり向けば二十世紀は風ばかり
二十一世紀の花芽うごいている桜

鳥取県 羽津川 公乃

初詣でこの一步から新世紀
わたしには回って来ない二千元
数の子が届き師走を急かされる
友もまた独り電話が長くなる
柔らかいおせちが好きになった箸

倉吉市 松本 よしえ

身ごもって女のいのち熱くなる
椎の実を噛むふる里の味がする
トンネルの出口がまるく見えて来た
紅葉山濡らして通るきつね雨
少年の面影探すクラス会

倉吉市 山本玲子

禁煙もやれば出来ますこの笑顔

コスモスが咲いて休耕田に秋

大きな尻が座席確保ににじり寄る

脱ぎすてた少年の靴ばかりでかい

懐が寒いウインドショッピング

倉吉市 淡路ゆり子

堂々と母であることに告げる

リストラをかいぐつてる子の努力

荒れた手に糸屑だけが絡み付く

七種類 朝夕飲んで薬漬け

新世紀 巳年の地平這いまわる

倉吉市 最上和枝

南無阿弥陀 涅槃の旅の道しるべ

母さんのシヤリたつぷりのいなり寿司

一群の雁大空を画布にして

脳天を洗濯したい物忘れ

炬燵部屋まるい話になってくる

倉吉市 野口節子

充電はたつぷりしたが職が無い

介護法 老人天国とは言えぬ

広っぱに子供の声かもどらない

来年は運が表を向くころだ

ごめんとは言わずにそっと肩に手を

倉吉市 山中康子

のり越えた病夫にまぶし初日の出

新世紀はじけて忙し大蛇舞い

よろこびも人一倍に福寿草

わたしにも欲し山茶花のいじらしさ

子知のない地震に肝を冷やします

米子市 林瑞枝

ふところの聖書に銀の雪が降る

珈琲匂う指がキリンの首を追う

髪カットして虹の街から逃げ出せぬ

ハートには時間まだある種を蒔く

緋の絵抱いて埋もれる雪だるま

米子市 木村富美子

コスモスと逢う約束の万歩計

散る時も色をくずさぬ花がある

次の芽を見届けている落ち椿

忘れられたわたしのような昼の月

アルバムに雪合戦の関の声

米子市 中井ゆき

満月にきこう兎のアドレスを

キシキシと札幌の雪よりそわぬ

牡丹雪ほほに止まって暖かい

それぞれの思惑で見る花の色

薦一枚 命かぎりに紅もゆる

米子市 田 中 亜 弥

米子市 門 脇 晶 子

手の内で夢をころころころがそう
コスモスも菊も散つたよ冬ごもり
南天の実はブライドで赤くなる

とっておきの話は次のつぎにする

ななかまど森の妖精かも知れぬ

米子市 木 村 春 枝

一皮を剥いで親しいお付合い
お隣に何があつたかゴミの嵩

冬の旅 意外な人と道連れに

神様に意地悪されて試される

いつ止むか余震に慣れてゆく恐さ

米子市 永 井 三 津 子

古稀祝う母への感謝たんと込め

思い遣る言葉に温い血が通う

一升のお米で嫁になつた祖母

正直に生きても神の通せんぼ

小言ばかりそれでも母が大好きだ

米子市 政 岡 日 枝 子

花の下蛇も私も身をかくす

皿まわし今を落とさぬよう回す

鳩時計 小兒病棟ゆえ唄う

万華鏡小さな嵐吹いている

前列の足に自尊心がみえる

月見れば一度は恋もしてみたい

満開の花をえがいて種をまく

山の上礼儀のいらぬにぎり飯

地震見舞に心いたわるランの鉢

自分史は雪の怖さを知っている

米子市 澤 田 千 春

堀ぎわに目立たぬ枇杷の花が咲く

キュッキュツと雪踏む音がなつかしい

近よれば月も次第に打解ける

どの窓も幸せそうな灯がともる

雪が舞ううれしい事があつたのか

米子市 野 坂 な み

大山の雪凜とした気をもらう

満月の化身とおもふ菩薩さま

びちびちと動く私の守備範囲

花形を下りて小錦もてている

礼儀正しい友へ少うし距離をおく

鳥取市 富 山 檳 榔 樹

氷雨降る凍て付く体仁王様

今年こそ蝮酒呑み意気上げる

面の皮一枚剥がし老いを生き

欲得が詰って地球冷えてくる

据膳に投げ箸好きの愚妻です

鳥取市 福田登美

わが家にも真つ直ぐにくる年の暮れ
したたかに生きても金は逃げている

赤い実を活け淋しさに背を向ける
辛抱の背がだんだん丸くなる

まだ女枯れてもおしやれ忘れない

鳥取市 武田帆雀

物分かりいいネクタイをしめている

もう少し詰めて下さい老いの席

カレンダー戴くものでありがたい

どこまでが紳士か胸の奥は闇

男ざらいで美しく咲く雌蕊

鳥取市 近藤佳子

余生もらいあせらず励む夢作り

帯しめた札は銀行出たがらぬ

コンマ以下言われ新年意地咲かす

散華の君二十世紀の鎮魂歌

働く日遊んでる日もめしは美味

鳥取市 春木圭一郎

いつからか仕事の鬼にさせられる

鬼手好手おりませやと勝ちが見え

鬼ごっこ気になる子だけ追いかける

鬼門だと思ふところに福が待ち

美しい鬼子母神なら会いに行く

鳥取市 徳田ひろこ

木漏れ陽に輝いてくる実南天
一夜漬にされて緑が濃くなる

必要にされているらし同居する

わたくしの呻きがマイク越してくる

昂りの余韻を星と酌み交わす

鳥取市 倉益一瑤

三面鏡 残り火がうふふと笑う

ほんのりと染まった頬は罪の色

ふところにかすかな恋を漬けたまま

枯木に花が咲くと思っている愚か

めんどうなことを客間の壁が聞き

鳥取市 岩原喬水

三浪の合格絵馬も踊りだす

血圧をあげる怒りはもう止める

ボケそうでしたっかりネジを巻き直す

老化した脳も穴場は覚えてる

浮気にも反応のない妻になり

鳥取市 上田宣子

駅前には木の実の溜まり場になった

血の濃さをやんわり諭す木守柿

説明のつかぬ私を持てあます

さりげなく抜く荒馬のコンセント

ワルツを踏んでいる一本の小川

鳥取市 杉本孝男

薬漬け嫌でお医者を手こずらせ

顔パスで乗ったらきつと首が飛ぶ

世紀末には還りたかった北の島

一皮をむけば淑女も魔女になる

おでん屋と言う閑所あり呼び込まれ

鳥取市 植田一京

聞き役の上手に全部しゃべらされ

超うれしい電話スキップ止まらない

先様に合わせる笑顔一つ持ち

狙われて薔薇はしっかりとゲを抱き

まだ脈があるのかきつく叱られる

鳥取市 西村黙光

禁酒禁煙 心に雪が降り積もる

禁酒した脳に濃霧が立ち込める

北風が禁酒のドアをノックする

いらいらが禁酒の壁をぶち壊す

一カ月禁酒の威力見せつける

島根県 伊藤寿美

ストレスが溜まると喉が痒くなる

電気毛布の温みに溺れそうになる

冷蔵庫の中にどくだみ咲かせてる

留守のはずの隣家の電話鳴り止まず

深海魚のような男に従ってきた

島根県 堀江正朗

ベースメーカー夢は豊かに動きます

窓に背をもたれ冬陽に深呼吸

白杖の出足鈍らす冬の風

ひとり歩き出来ぬ口惜しさ白杖

納得のいくまで聞いて手こずらす

島根県 堀江芳子

白杖もはずむ卒寿はもうそこに

縫られて怒鳴られもして老いて来た

鈴生りの万両寿ぐ庭の景

心機一転 除夜の鐘から勇み立つ

白杖の頑固はぐした孫の声

島根県 森茂美

掃除機の音が大きい今朝の妻

離農する人になつぷりある未練

白鳥の群れる湖水に冬が来る

よそゆきの声で老妻汽車に乗る

灯台が静かに昏れる日御碕

松江市 佐野木みえ

クリスマス銀座はひと人人の波

シャンデリアより輝いて新夫婦

干柿を作り都会の子に送る

新世紀いい事ありそうな予感

シクラメン今が盛りと咲き乱れ

松江市 銭山昌枝

幸福の木も金の成る木も良く育つ
棚上げのままの釣書がよく遊ぶ

古希近しまだ老人と呼ばせない
夫の癖四十二年直らない

クリスマス正月ボーナス出ないのに

出雲市 岸 桂子

今日の陽へ昨日の涙乾かそう
成り行きで結んだ紐がほじけない

言いわけをしていて負けだないと気付く
淋しくてひとつ覚えの鶴を折る

秒針も風も動かぬ喪の仏間

出雲市 城 多喜

病んだ顔鏡はとても意地悪だ
病人の話廊下で聞いている

病院の廊下スキップしたくなる
淋しくはないが時どき独り言

浮き雲にふわりと乗ってみたくなる

出雲市 吉岡 きみえ

鼻唄が消えるきびしい冬が来る
慈善鍋十円だけごめんなさい

仲良しツアーひとり欠けたらつまらない
失礼のないよう法事の準備する

派手なことしないつもりも金が要る

出雲市 園山多賀子

頑なに生きて明治の座り胼胝
戸惑いがあり上弦の月仰ぐ

自己暗示かけると木偶も踊り出す
糟糠の妻も時効になりました

深呼吸 卒寿の春を把握する

出雲市 佐藤治代

ざわざわとざわざわとしてまだ夫婦
ひとつ屋根一つの顔に飽きている

腕によりかけては鍋を焦がしてる
宇宙から笑われそうな愚痴を言う

大声で笑う体が軽くなる

出雲市 板垣夢酔

あの嫌な戦争してるよその国
大学をだせば間借りの娘にとられ

松葉蟹 独りの膳をはずませる
貧乏性だから優雅な夢を追

勲章も負けて光らず場所がない

出雲市 板垣草丘

親と子の昔と今の出雲弁
柚子ひとつ一番風呂の胸へくる

希少価値まぜものなしのような人
錦織健が出た時起してね

あと七年平均寿命が待っている

なで地藏光る頭と肩と足

出雲市 小玉満江

九十歳ボチボチ噛めるするめいか

紅葉へ一刀彫りの鬼子母神

キヤアキヤアとルーズソックスジベタリアン

ガングロが姿を消した世紀末

出雲市 久谷まこと

歳の所為だけでは済まぬ忘れ物

へらず口喧嘩のものはそのあたり

のばした手引つ込みつかぬ値段表

潮時は心得ている花の精

それぞれの好みで迷う味加減

出雲市 富田蘭水

現在の幸せ鍵をかけておく

納豆がスパッと切れる幸せだ

煤はらい神も私も新しく

やがて里ズー弁がなつかしく

小心の太郎がやつと笛を吹く

唐津市 仁部四郎

あの叔母は苦手 私の眼をのぞく

軽口を撒いて本音を誘い出す

前置きが長いドロでも吐くのかな

日当は安いし意見でも言おう

悪法に羊しばらくおとなしい

渡り鳥北風連れてどつと来た

唐津市 山門幸夫

メジロたち去年のままの番かな

新世紀 男よ強く強くなれ

ジャンボ機の今日の機長は美女なりき

乗車券ポッケを全部かきませて

唐津市 山門タミ

チラシ見て北海道を食べてます

刈田から引揚げて来た庭雀

BSに明日は宇宙の町が出る

来年も生きてるつもり宿予約

転んだと言えずかくれてシッパ貼る

唐津市 久保正剣

暮れ早しギャルの会話の語尾撥ねる

コンパスを締め老後の青写真

素潜りが性に合ってる知能線

茶番劇 国の明日より自己の明日

介錯なら上手に出来るいまの医者

唐津市 宗水笑

百選をはずれた滝の水甘し

仁王様闇夜はそつと笑いたし

スーパーに席を譲ったシネマ館

親権がびくびく覗く子供部屋

お土産はどれも元祖か老舗札

唐津市 井上勝視

日本一の妻で松の木丸太です
他所の子はどうして良い子ばかりだろ

戦争を知らぬ教師の平和論

無党派が立派な党に見えて来た

人間の勝手ペットが墮落する

唐津市 山口高明

白状をしると鰻井とつてくれ

猪鍋を囲んで雪の夜が更ける

飼い主に何故か似てくる犬の貌

もう誰も信用出来ぬ野良になり

高金利誘うファンドの甘い罠

唐津市 市丸晴翠

不確かな記憶補い合う夫婦

床柱背に飯 風呂とまだ元氣

古希の坂越えもう怖いものはない

要らぬ物並んで買った店仕舞

病氣より怖いお医者者のミス続く

唐津市 樋口輝夫

正論を吐いて首筋寒くなり

額ただけで責任取らされる

死んでからすぐ起き上がるエキストラ

胸に手を当てると真顔で妻が言う

腐葉土に化けて役立つ濡れ落葉

熊本県 高野宵草

おや国旗が出ている勤労感謝の日
まず未練捨てて物置片付ける

就寝の指呼点検をしてまわる

老後とは遊ぶ体を修理して

かばい合う医療が犯すミスつづき

熊本市 永田俊子

スリル悲し十七歳のサスペンス

宴会の酒に仮面がずり落ちる

骨のないくらげ上手に生きている

米びつを満杯にして心飢え

地雷百 花野の下にあると言っ

北九州市 梅田宣司

本音出し別のストレス貯めている

時計代りの列車が消えた廃止線

ピンチにもたじたじしない妻と居る

割箸の気楽さ好きでうどん食う

職安に捨値の首を売りに出し

高知市 北川竹萌

米寿越え無事故運転さようなら

自家菜園待ち居る如き出来栄えよ

かぶ 大根 春菊 キャベツ 収穫す

ブロッコリーにカリフラワー必要ほどをとりいれる

国道の帰り楽しい夕日影

高知県 赤川菊野

狐の部屋で宇多田ヒカルをまねてみる

延命の薬があれば家も売る

ワインドーに映る私に影がない

カタカナの恋人つれて娘の帰国

新世紀凜とかまえて一人待つ

香川県 成重放任

誰よりも母に上げたい勲一等

設計図どこにあるのか蜘蛛の家

容姿まで父に似て来た歳となり

懐が寒いと体まで冷える

手が触れただけでときめく胸の内

香川県 川崎ひかり

チラホラの客に師走の風寒し

あの時に逢ったが最初で最後なり(故石垣花子さん

花子さん貴女に賀状もう出せぬ

人間の業より深いものはない

苦しみの中から生きる種さがす

香川県 瀧井勝

習うより慣れよ時間はたとある

真つ直ぐに字が座らない賀状書く

老人のお世辞は年季入ってる

たった一つ残った籤を引かされる

膏薬を貼り合っている風呂上がり

香川県 山地マツエ

天下りの椅子がぎしぎし軋み出す

風はいじわる私を過去へ引き戻す

ブランドのセーター虫に狙われる

雪しんしん女のうなじ枯れて行く

反省の水割 少しうすくする

香川県 清川玲子

樹の上へ大声で呼ぶティータイム

いとしい人と並んで座る樹のベンチ

七癖があつて人間らしく居る

何にでも首をつつ込む癖がある

百歳が座ると大師の顔になる

香川県 池内かおり

記者会見終わると涙すぐ乾く

遍路みち人目を引いた柿のれん

ふたつ増し一つ消して住所録

気は抜けぬ師走は妻も腕まくり

セクハラと騒いで此の世軋み出す

松山市 宮尾みのり

はつらつと熟女化粧も手を抜かぬ

恩という尺度が親と子で違い

さよならといつものように言つたきり

深呼吸言わねばならぬことがある

秘密には出来ぬ油が浮いてくる

松山市 丹下 美津子

ほのぼのと温もり貰う師の笑顔

何時もの場所と言ったらわかる飲み仲間

趣味の会あなたの席はあけて待つ

アンテナを広げて孫の職さがし

ひとことのわびが素直に出ない悔い

愛媛県 中居 善信

柿剥いて大根干して冬にいる

有り余る米を輸入とは何ぞ

麦焼いた頃の活気が村にない

肩寄せて群れる安心出来るから

金貸して人の裏側見ってしまう

美祿市 安平次 弘道

ポケットにいつか初心を置き忘れ

ケースバイケース意見がまとまらず

過去は過去 今を生きたい再生紙

風向きが変わり目線が低くなり

ブラジャーの中にかくしている本音

岡山県 矢内 寿恵子

ミレニアム惜しみこよみが薄くなる

改まる言葉で初春の陽を掬う

執念は蛇にあやかるとの道

恵まれた自由も孤独うら淋し

あざやかに記憶を戻す古日記

岡山県 荻野 鮫虎狼

看護婦の手が温かった注射針

自家用車 波に乗れない十二月

主治医にも正月休みがある不安

生菓子は欲しい抹茶が待受ける

老人に席を譲って嫌がられ

岡山県 小林 妻子

ポーナスの化けた車の帰省客

どの家の灯もじつと耐えている

見栄張った男の返事頼りない

性善説誰を信じて生きようぞ

山男の帰り縄暖簾の関所

岡山県 山本 玉恵

手さぐりでここまで無事に来た夫婦

残された月日 大事に過ぎなば

ちぐはぐでどこかでピント合う夫婦

ねむったら心の痛み忘れてた

背もたれが残らず聞いた姑の愚痴

岡山県 大石 あすなろ

絵ごころを一輪ざしにためされる

冬が来る気配白菜うまくなる

まだ胸にゆれるものあり古日記

目札を交わし合ってる万歩計

三宅島ドラのひびく日待っている

倉敷市 井上富子

奔放に生きてみたいと思う靴

少年の心の河が蛇行する

ぬるま湯の中で乾いているハート

お相撲をつけて寝ている畑疲れ

使い捨ての時代よさらば新世紀

倉敷市 小野克枝

冬の絵にむらさき色の母が住む

棘を持つバラで散りどき忘れない

零の手でさがし続ける玉手箱

不器用な男が覗く花の芯

北風を避けて通れる歳になり

岡山市 川端柳子

木守柿真面目に世紀末の貌

メモ用紙明日に希望が持てそうだ

もう一人の自分に会ってみてドキリ

懸命な愛よ自分の翼持て

いい人が悲しい人になりました

竹原市 石原淑子

里の柿採る人も無し地に還る

首ポカリ無念無想のしまい風呂

すれちがうケイタイ中の自転車と

倅せの子感ろうばい膨らんで

二千一年ひっそり寿ぐ冬苺

竹原市 時広一路

未練断ち切って裸木春を待つ

熱燭も冷酒も好きで気がおけぬ

神様のポケットに有る僕の運

鉛筆の滑りも良くて気もうらら

医者顔消した嬉しい日のグラス

竹原市 森井菁居

心の洗濯妻と出かけるコンサート

食卓の絆が温い鍋の湯気

聞き流すことも世渡りかも知れぬ

現役の頃はしていたまとめ買い

逃げ道を開けてくれてる思いやり

広島県 藤解静風

ラリルレロ入れ歯の調子テストする

せんりゆうの合間に眼科 泌尿器科

口答えせず従わず掌に乗せる

枯木に花咲かせる灰を準備中

そこに居るただそれだけでいい夫婦

広島市 森田文

お祈りも済んだ喜劇の幕が開く

独断で仕切る姿につい見とれ

涙割りのビール何倍にもうれし

魚にはすまないぐらい下手に食べ

定年後の助走に川柳すすめおり

砂川市 大橋 政良

愛するといふたやすきと難しき

遮断機がおりにタバコに火をつける

手が届きそうに届かぬ運の糸

屑籠の中から拾い出すヒント

ポケットに街で拾って来た噂

十和田市 阿部 進

現代っ子 部屋から親を遠ざける

倅せを箱詰めにして娘に送る

浄土への土産に善を積んでいる

フルムーン老いを忘れて弾んでる

子にそそぐ愛に限界などはない

弘前市 高瀬 霜石

用意ドン暦の足が速すぎる

大きな会社大きな負債あるらしい

生きるため斬らねばならぬ人がいる

体重が元に戻った三回忌

失敗をして失敗をして生きる

弘前市 宮崎 ヒサ子

思う色出ぬまま明日の橋渡る

吉と出たおみくじ運にぶら下がる

プラタナス冬の構えを整える

世紀跨ぐイルミネーション眩しくて

永らえて世紀の空を見届けよう

弘前市 小寺 花峯

病気になるのも一生マイペース

再発におののく我が身今は冬

雪しんしん津軽の冬は眠るのみ

遠くなる耳でささやき良く聴こえ

不揃いの時計が集う三次会

弘前市 一戸 ツネ

イルミネーション銀河と遊ぶ十二月

星回り良くて八十路の共白髪

星占い信じる若さいきいと

スターダスト露天の風呂に溶けている

逝った児の星もきらきら冬がくる

弘前市 福士 慕情

鍋焼きを始めましたと山の雪

スナックの何時までもある忘れ傘

淋しくてテレビの音を高くする

何処までも夕日に溶けてゆく鴉

秋桜風が冷たくなってきた

弘前市 須郷 井蛙

ゴミ増やす出来合い料理売れている

合格に乱舞してますばたん雪

お婿さんつれて来ました趣味の会

朝帰りあきれて青い鳥が逃げ

完熟の娘なかなか出て嫁かぬ

弘前市 今 愁 女

どつときた雪片付けて足捻挫
家中を這って歩けば獣めき

日々感謝の怠り神に裁かれる

危なっかしく新世紀への橋渡る

目に見えず立ち向かうもの迫りくる

弘前市 高 橋 岳 水

深読みをしてから一步踏み出せぬ

雪吊りの幾何学模様冬に入る

一村の芯まで凍りつく二月

屈葬の如くに膝を抱いて寝る

雪を踏む愚直の脚を棒にして

横浜市 菱 田 満 秋

びつたりと歳をあてるとうとまれる

善人を真似て苦勞をさせられる

九十九で死に一年を惜しまれる

脳死判定 人生のロスタイム

他人事と思えぬ他人の死を悼む

横浜市 清 水 潮 華

さわやかな笑顔 先入感を消す

機嫌よい証拠 旅行の話出る

震動が合うのか電車よく眠れ

二千円札は神経遣わせる

冷たさへ息吹きかける掌

横浜市 菊 地 政 勝

長生きをするかも知れん遠い耳

おっはーと孫が布団に乗ってくる

主導権 妻に握らせついでゆく

好きな風待つて飛び出すいちようの葉

遺跡から嘘も出てくる考古学

横浜市 小 野 句 多 留

休刊日 昨日の朝を読み直す

自己流の処方箋から今日がある

してやるがやってもらうになる挽歌

冷奴から湯豆腐になつてゐる

枳酒をなみなみと注ぐ温い店

横浜市 山 下 省 子

あの世までつきあう顔だろう

変な顔 他人に言われる謂ない

肩もみがうまくなつたと誉めてくれ

どうみても男レディーのトイレから

いい年が派手を着たつていいでしょう

川崎市 和 泉 あかり

虫食いの目立つ野菜がよく売れる

厄除けの大師とんとん飴を切る

目薬をさして納税書を眺め

指先を温めて風の封を切る

病人といっしょに咳をしてしまひ

町田市 竹内紫鏘

謹賀新世紀 八十路の礼厚し

黙祷の倣いは世紀越えてほし

FAXでくずし字読めという頼み

学園祭 孫の仲間が画く似顔

わが疎髪とびこえ喋る主婦二人

京都市 小西未佐子

見返ればご利益嬉し師のお顔(永観堂にて)

本当はこうでしたのと未練虫

見慣れるものよ色とりどりの髪の色

ロボットに気を遣う日が来るのかも

前世では蝶だったのか花狂い

京都市 都倉求芽

動くでも動かぬでもなし雲とわれ

いつも背を押す諺の二つ三つ

下がるまで計り直して血圧計

お天道様がつくるのでしょ陰ひなた

星はみな丸いのかしら馬っ鹿みたい

京都市 高島啓子

シクラメン奮胎児の形して

ハンバーグでかい少女が増えました

油断して一円玉が増えてゆく

ブッシュでもゴアでも日本叩かれる

迷彩の服着せられて人変わる

京都市 山海友熙

母の住む町だ綾とりして遊ぶ

風の吹く町で見つけた竹トンボ

梅の咲く町で貰った花鉢

倅せはいくらじゃんけんしても勝つ

長男 次男 家族で初笑い

亀岡市 井上森生

二分する世論アメリカのデモクラシー

通天に迫る紅葉が彩を増す(東福寺)

紅葉を愛でぜんざいも東福寺

若返るクスリ自慢の同期生

現し世の世紀を跨ぐこの縁

京都市 稲葉冬葉

人間をやり直したい血糖値

血圧計一度で済んだことがない

やり直す度に個性が消えている

水仙の香りにチワワ寄りつかず

胃袋は幹事任せの新年会

奈良県 渡辺富子

うどんすき囲む座椅子に序列なし

暮れなずむ街の死角で拾う恋

少年法 心の闇へ日が射すか

許すとは言わずに贈る雛人形

先生の訛りそっくり童話読む

奈良市 米田恭昌

大宮市 八田敏

台所事情ランク下げてるケアプラン
突然の辞令首洗うひまもなし

子や孫に誇る生き様真面目だけ
独りっ子しゃべる人形つれ歩き
体調を崩し寝溜めをする介護

どん底の虎這い上る爪もなし(新庄退団)

食当たりくらいで腹はへこまない

安らかに眠りし鬼のデスマスク(鬼遊先生急逝)

大統領選挙アメリカ値打下げ

薫風師とかつぐ樞の軽いこと

政談に火花ラーメンがのびる

奈良市 天正千梢

静岡県 菌田獭沓

二三日新聞も見ず旅の空

菊の香を手に残しつつ墓掃り

旅人のさみしき影へ鳥なき

夕焼けを見れば忘れる妻の愚痴

彼岸花 明日香の里によく似合い

厚底がぐらりよろけるアーケード

手の内を見せ合いながら生きのびる

早く寝てじっくり休む夜の長さ

ハードルを一段下げて古希の坂

燃えつきる恋の炎と知らず燃え

大和高田市 岸本豊平次

富山市 島ひかる

電話では苦情聞くから手紙にし

石一つ投げて空気を確かめる

発車ベル走れぬ膝であきらめる

念仏を唱えてみれど出ぬ答

やり直したいこと多い古希半ば

包丁も俎板も聞く阿弥陀経

孫四人 十七歳にさしかかり

粗大ゴミなどと言えない人と居る

筆のせいにもした賀状書き終える

まさかの時へ鬼一びきを飼っておく

大和郡山市 坊農柳弘

富山市 舟渡杏花

水仙のつばみゆっくり温暖化

お百度へ執念人相まで変えて

切り餅をワラで吊るした母の里

ユダよりもずるい男と手を握る

フルムーン雪見障子の差し向い

秘密って悪くはないなウフフフ

暖冬を蹴散らす庭の雪化粧

折れるほど抱きたいおんな目の前に

堅物の師匠を偲ぶ古時計

愛知県 早川盛夫

海南市 三宅保州

慌てても慌てなくても二十四時

正論の重さ軽さよ多数決

珈琲と漢字で書くとか芳ばしい

不精髭生やして猫に横向かれ

H2O水といえども化合物 和歌山市 青枝鉄治

初笑い税の不満を吹きとばす

核のない国ならうさぎ小屋で足る

賽銭に神も不況と心得る

肩書きをとればなんでもない男

政界の謎解きさせぬ多数決

和歌山市 西山幸

相も変らずぬるい芝居をくりかえす

還らないものはかり待つ古い椅子

湿っぽい話を嫌う紙人形

昨日も今日も軽い財布に負けている

思い出を捨てて童話と別れよう

和歌山市 福本英子

努力した涙をたんと見た世紀

生臭い風 日本もアメリカも

清水寺の金一文字に救われる

毛繕い始める猫のクリスマス

他所なみにせかせかして庭箒

不便でも昔のままの郷がいい

歳のせいなどではないぞ物忘れ

妻がいて子がいて風呂が沸いている

仲の良いこと呼び捨てにしてされて

出世には遠いがみんないい仲間

可児市 板山まみ子

丹精の大根届く昨日今日

妥協せず生くと決めてもすぐじけ

固まった脳の回路がほぐれない

水雨止み静かな君の野辺送り

大会の君の勇姿が目に残り

和歌山県 中後清史

いたずらな風が古疵撫でてゆく

損得が絡むと本音覗かせる

平凡な暮しを襲う向かい風

テクニク使い潜った自己嫌悪

辻褄の合わぬ返事へ風の乱

海南市 谷口義男

遣伝子に組み込まれてる生真面目さ

人数が足りない時に呼びに来る

予備の無い生命大事に生きて行く

妻の意見聞くまで返事先送り

年金で分相応の祝儀出す

和歌山市 山口 三千子

和歌山市 山根 めぐみ

退院後の夫に期待した誤算

試歩の道宇宙の朝を出迎える

遣る瀬無い憂さ愛犬とたわむれる

仏頂面してやわらかい絹豆腐

虚勢張り心の透き間カパーする

置き所ない悔いを抱く長い夜

夫婦茶碗壊せば気楽かも知れぬ

この孫に戦はさせぬ千歳飴

腹に据え兼ねて心に鬼を飼う

シッペ返しあるかも知れぬEメール

和歌山市 垂井 千寿子

和歌山市 楠見 章子

仏より鬼に教えてもらた恩

新世紀と向かう触角はたらかず

戦時速し何でも買えるのが怖い

自信ついたらしい冗句に張りがある

馬鹿正直と言われストレス溜めている

ハンターの眼で追っかけるファインダー

目標へいつかいつかと亀の足

波を描く指揮棒眠くなってくる

病院の窓へ欲張りもう言わぬ

好きなワイン贈り喜び分ちあう

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 牛尾 緑良

とにかくに初冠雪の富士拝む

語り部の父母と一緒に新世紀

新世紀 天晴れ地晴れこころ晴れ

メッセージひとつを抱いて年を越す

白鷺に声かけてみる冬の窓辺

還暦というピリオドを乗り越える

ハンカチを落してからの胸の渦

冬という試練いくたび春を待つ

いつかは壊れるコロンブスの卵

貝殻節バックに届く友の声

和歌山市 吉村 さち子

和歌山市 松原 寿子

紅白の合間 年越し蕎麦すすする

掌を振れば風の響きが胸にくる

口止めをいっばいされて聞いている

愛を溶きなさけに添うて流れよう

つくづくと百歳の母眺めおり

伏せ切れず本音こぼれている手紙

置き物のように百寿の祝い膳

深読みはよそうか今を信じ切る

鏡餅供えて今年締めくくる

不器用なおんな樹海で踏み迷い

和歌山市 桜井千秀

ぐっすりと眠ると明日の絵が描ける

無視は屈辱 忍耐力が付いてくる

美食には縁がなくとも皮下脂肪

溝にまで嘲笑いされ遠回り

錆びついた謎解けぬまま新世紀

和歌山市 川上大輪

足元に天から届く走り書き

足裏に重い言葉を溜めている

陽が落ちて巷に増える回遊魚

筋書きを変えてしまった人違い

回り椅子軽い返事を持っている

和歌山市 細川稚代

保育所の庭で我慢の芽も育ち

使いすてカイロにたよる通夜の席

住所録 消すペン先が震えてる

陽のあたる場所ばかり選る鬼あざみ

ひよ鳥に二つ三つは残しとく

和歌山市 玉置当代

めろめろになったプロポーズの文句

着飾っていても心が瘦せている

木枯らしが心の中も掻き乱す

分岐点 義理の狭間で悩んでる

雲切れてわたしもパズル解けてくる

相生市 中塚礎石

秒読みへこれからという目の動き

踏ん張れば犠打なら打てる床柱

地藏さん赤い帽子を待っている

その先はもう止めようよ夫婦仲

道草をした人間で老い盛ん

尼崎市 春城 武庫坊

信号赤を歩く浪速の街師走

湯気はしあわせ湯割焼酎 蟹の鍋

世紀末 夕陽が照らす青アメント

枯れ葉散る天が奇麗な空を見せ

もう歳は忘れ新世紀を生きる

尼崎市 春城 年代

いつからか程良くなごむ酒の量

川の流れの常と変らぬ年の暮れ

冬の色に融けこんでゆく八十歳

冬空にぼんやり浮かぶ飛行雲

体重計に乗ると夫が読みに来る

尼崎市 内田 美也子

一枚の暦せかせる年の暮

改めて世紀を刻む初春の音

細分化された介護がもつれ合う

誘われて俄遍路の霊山寺

心経の旅の道連れ遍路雲

親密さ増したダイコン ガンモドキ
オッハーに熟年熟女盛りあがる
雪こんこ脳裏離れぬ人がいる
初時雨去ったおんなの化身かも
呆けたふりしようか あんたがたどこさ

尼崎市 長 浜 澄 子

ミレニウムあれよあれよと過ぎてゆく
大根の白さに母を恋しが
化粧してダンスに通うおばあちゃん
それから美空ひばりの歌を恋う
にこやかに犬と散歩の稚子さま

尼崎市 奥 山 美智子

尼崎市 的 場 十四郎

真実を知って一夜が長くなる
てのひらと顔をみつめて説く易者
幾山河越えては男強くなる
子も育ち茶の間に描く夫婦の絵
いつの日か笑い話になるはなし

尼崎市 田 辺 鹿 太

ささやかな償い妻の肩を揉む
笑い合うことで世間が広がる
宿六と陰で言われているらしい
退化した脳にやたらとカナ文化
来る度に母はわたしの歳を聞く

老いらくの恋はうたかた風花よ
ずっと昔はおんなじ唄をうたってた
すこし疚しく夫の酒をおまけする
今にして出合う思わぬ水たまり
言いたいこと溜めて鳩尾重くなる

西宮市 門 谷 たず子

ゆっくりと紙面ななめに読んでモカ
ペコニアが化石のように生きている
うとましい記事読む気もうすれ寒い
父の忌も姉の忌も過ぎ師走かな
修復に至らず世紀暮れんとす

西宮市 牧 淵 富喜子

西宮市 奥 田 みつ子

秋の夜の胸の底なるほろ苦さ
一四〇日 武庫の流れに励まされ(夫退院)
今朝のガラスよかったなアと鳴いてくれ
思いきり憎んでみてもみたとても
オカリナが希望を持って流れくる

西宮市 林 はつ 絵

使いたくないが切り札持っている
たんたんと不幸を話せるまだ余裕
弱くなる耳へ娘の鈴の音
来るものが来て介護法一段目
抜けた釘とんと気にせぬおばあちゃん

西宮市 亀岡哲子

やわらちゃん近くの町に住む噂
星降る夜一人ビデオのサスペンス
手に餌を乗せても寄らぬ白い鳩
問診へ症状暗記順を待つ
今夜こそ星を見ようと君が言う

西宮市 秋元てる

アーカーサーターナー 辞典繙く度歌う
懐の痛まぬ見舞よくしゃべり
そのうちに縫う生地一〇年眠ってる
自分では捨て切れぬもの古里へ
嫁さんの新調さらりと褒めておく

西宮市 菊池トミエ

肩書のない名刺出す気楽さよ
隣から鍋物の匂いやってくる
ビル砂漠終の住みかも腰が浮く
近すぎて大事なものを見失う
白壁の長い塀から木守柿

西宮市 緒方美津子

それぞれの好みを煮込むおでん鍋
うちの孫おこげのおにぎり知りませぬ
荒れさせぬ酒にしたくて今日は鍋
うちの掃除機隅はやっぱりりが手です
蚊の奴め生きのびてるな殺せない

西宮市 長谷川 淳

新世紀聞こえはいいが恐ろしい
新世紀どんなタクトを誰が振る
二世紀にわたる人生いとめでた
うちの児が上手に画いたピカソの絵
待ち遠しとんどの後の焼芋が

西宮市 山本義子

通販で綿入れジンベ買いました
所用ありラッシュの駅も久しぶり
しみじみ朝いだだける旅の良さ
水飲める感謝をいまだ持っている
山茶花の候 震度七忘れ得ず

芦屋市 黒田能子

泡立てて消毒したと思ひ込み
快方へ向かう命と生き直す
とりどりの夢 風に舞うシャボン玉
宅配の留守を待ってたように着き
することがいっぱいあって義理を欠く

伊丹市 山崎君子

大根だき慈愛いたたく風の中
紅葉山きれいな声よ落葉風
朝市にずらり赤蟹にらんでる
靴脱いで落葉サクサク娘にかえる
ワンナイト踊って三日医者通い

伊丹市 檉谷郁子

宝塚市 嵯峨根保子

イエスノー 答せさせる十二月

ほろ酔いで歌うは故郷の安来節

無位無冠 踊る手足も意のままに

客送り次の予約へ女将の目

送り送られ時は流れて無人駅

神戸市 池田善守

初日の出身も引き締る新世紀

喪のはがき八十代は若い方

老老介護 思いを致すおらが先

孫と風呂 洗ってもらおう側になり

Top 野球終ってみれば Bottom

神戸市 小林一夫

焼酎に酔いてそのまま死に給う

どうしても曲がってしまいう杭を打つ

とりとめのない恋でした赤とんぼ

銀杏散る せめてやさしい言葉など

人形の手が落ちてゐる冬の道

姫路市 古川奮水

電話代削ると友が減りそうだ

葉が落ちて冷え冷えとする並木道

雪の駅疲れが溶ける国訛り

暫くは孫が話題をひとり占め

責任を果す音色で時計鳴る

紅葉のどれが綾やら錦やら

いのち紅玉三郎を観てかえる

ルミナリエ これで私のお身ぬぐい

出直しのあれもこれもと新世紀

入門書パラパラ情緒不安定

三田市 北野哲男

この今を一番熱い時にする

終盤に犠打を承知の宝くじ

関係を聞かれ大事な人と言う

寒い夜に河豚提灯め温い顔

沢庵と味噌汁育ち喜寿を越え

川西市 米原雪子

それぞれの包み方して子を育て

脱線もあつて楽しくなる授業

悔った風邪に自由を奪われる

おしゃべりを盛り上げてゐる幹事さん

遠くまで余韻残して夜なきそば

川西市 松本ただし

鼻先で笑つて時世振り返る

村地蔵だけが残つた開拓地

読みかけの本伏せたまま長電話

自販機へ釣り銭忘れたまま戻り

自己評価足りない物が多すぎる

兵庫 大谷 幸次郎

年金もポーナス恋し年の暮
象もまた地雷を踏んだニュース聞く
新世紀へビは黙って皮を脱ぐ

年賀状巻かれてみたい蛇に会う
ウエストにベルトの穴が付き合えぬ

大阪市 奥村 五月

ミレニアム宿題残し新世紀

ナースでも家では怖い顔もする

竹輪から竹がなくなる里の味

隠れ飲み答が怖い糖尿病

捨て石で息の根止める暮の敵

大阪市 小林 周信

退院の朝すつきりと髭を剃る

無理しても笑顔見せたい病み上がり

一番星 明日も元気でまた会おう

極めれば婦唱夫随になるくらし

大欲を抱くと渡れぬかずら橋

大阪市 杉澤 汀

繩のれん出し満天の星仰ぐ

凍てついた月に朗々黒田節

戎っさんあんじょう話聞いてんか

紀元節 昔はもつと寒かった

お別れへ時間厳守の霊柩車

大阪市 井上 白峰

真実を秘めて虚栄の面被る
鈍感な男 言葉の裏読めず
乗るたびに脱線してる口車

サーブ権妻が握って譲らない
絶妙の牽制球について本音

大阪市 川原 章久

直っ白い湯気から掬う京の湯葉

胃の底にポツと灯がつく冬の酒

ポケットにユーモア入れて歩く町

空涙 頬に笑いが潜んでる

透視術 骨の髄まで覗かれる

大阪市 安達 はじめ

方円の水に短慮を諭される

重い魚籠 提げ大漁の軽い足

仕事より着て行く服に悩んでる

夢で逢う父は多くを語らない

結論の出ない会議で疲れ果て

大阪市 小糸 昭子

綱引きはみんな子供に帰れる日

包丁の無いキッチンでああ若い

鎌首をもたげて見てる新世紀

したたかに生きて果実は熟れてくる

火花散る他人のジョークで切り抜ける

大阪市 津守柳伸

発つ前に土産 段取りさすハワイ
アロハだけ覚えてきました巻き戻し
義理がたい下戸でせつせと新年会
宴会の梯子へ変えるイヤリング
ほどほどが判らぬギャルのEメール

大阪市 寺井東雲

表紙の顔 本人よりも美しい
ニシキ蛇 肩にのせられ腰にくる
天からの職と思つて有難い
鍵の束腰で鳴つてる倉庫番
真心をこめて草笛吹いている

大阪市 鈴木トヨ子

不況風サンタも悩むプレゼント
荒れる世相無事な師走をただ祈る
流暢な琴の音に貸す暇な耳
口下手にマイクが回る三次会
喋りたいけれど空気がチャックさす

大阪市 松尾柳右子

里帰り知らせる声が弾んでる
廃屋にもみじひときわ美しく
貯金ない銀行なのに親切だ
休日のプラン指圧も入れてあり
鼻唄も出る一日のしまい風呂

大阪市 辻川慶子

天下人今の日本にほしい人
ちぎれ雲君は勇気があるんだね
水仙が匂うわたしのお正月
筆の流れいきいき魅力ある個展
いくばくの命へ今日も歯をみがく

大阪市 鶴田遠野

歩合給 疲れた靴に鞭を打つ
左遷地を定住と決め親を呼ぶ
さわやかな出逢いのままで消えた恋
倦怠期 夫婦の間合い少しずれ
御自愛の文字が滲んだ母の文

大阪市 川端一步

真面目三 不まじめ七で年を越す
失言は取り消しておく新世紀
だんだんと自分に甘くなつて暮れ
ストレスを捨てる散歩に道修町
ニコニコ顔 一寸先は闇なのに

大阪市 中田あい子

新世紀つつがなけれど初詣で
さんざんと手こずつた子が真面目パバ
未来より今が大切七十路坂
金婚で並んだ父母にあるドラマ
うっかりと本音こぼした四面楚歌

大阪市 町田 達子

美しい名前の雨にホッとする

山茶花時雨 花の心も潤いぬ

美辞麗句並べて付き合にくい顔

二千年にさよならジャンボ買いました

ややこしい介護保険も医療費も

大阪市 玉置 英子

友の死で御主人の名を知りました

十二月八日あの日はまだ乙女

無事に目が覚めた一日大切に

嘘一つ隠すためまた一つ嘘

家中に電気付ける子 切る私

大阪市 川久保 睦子

嘘が下手千六本の刑に処す

超高いカレーゆっくり味わおう

星たちが澄んだ満月に嫉妬する

日帰りするでしょうと橋出来てから

独りになるまで笑顔でいようガン告知

大阪市 津村 志華子

大島も小紋も寝かす桐箆筒

赴任地で男ひとりりの豆腐鍋

遺されてひとり芝居がまだ続く

使い古した骨がポロポロ哭いてます

若者がはまり込んでるEメール

堺市 神原 文

明け方のリアルな夢に落ち着かぬ

平均寿命 悔しがったり認めたり

鏡見る誰に見せよと思つてか

おどけ出したなあ緊張してららし

庭隅の紅葉は盛り賀状書く

堺市 黒田 真砂

どん底を見たから怖いものはない

年新た白紙の地図に描く夢

回想の中に出てくるクレヨン画

娘の新居ローン気になる門構え

夢の橋渡ればどこへ着くのだろう

堺市 柿花 紀美女

時という鎮静剤がきいてくる

今日ひと日老いのリズムで無事暮れる

夢を買う師走の寒い列につき

手袋を脱いでしっかり握手する

流されて私の辿る岸見えず

堺市 志田 千代

混んでいるお店 安心して入る

うれしくてももうスキップはしなくなり

豆腐一丁 買いにいくのもウォーキング

いい加減にしますキリのない掃除

隅々を見て見ぬふりも心得る

堺市 近藤 豊子

藤井寺市 高田 美代子

ガラスだま追いかけてきて逃げてゆく

おはじきの迷子にであう拭き掃除

おはじきへ児は桃いろのつめをあて

ひきだしにむかし遊んだガラスだま

おはじきの好きな六歳 六十歳

藤井寺市 太田 扶美代

美人ではないが役に立つ笑顔

忘れてしまおうと雑踏を歩く

冬銀河一人そちらへ逝きました

百度石数をちがえていたようだ

母もきつとこうしただろう回り道

藤井寺市 中島 志洋

豆を撒く日本はやはり富裕国

鬼みたい顔してはるが泣き上戸

三次会 出世頭はもういない

どうにでもとれる女の生返事

水掛け不動 何を祈るか三枚目

藤井寺市 楠 昭子

妻母 姑 わたしにたんと顔がある

ふるほけた茶碗が歴史語りだす

メロデーの橋で赤トンボを唄う

筋通す男あつさり役を降り

百面相どれが本当の顔だろう

居眠りへ電車の揺れが心地よい

線路際の花は騒音アレルギー

もう少し時間下さい年の暮れ

目の色を変えてもたった二十四時

冬ざれて背骨がボキボキと軋む

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

無理はしていない積りをしてました

愛情でカレー煮つめた鍋もある

無意識に食べたみかんの色は濃く

つぶやきを聞き返されて恥じている

肌寒い背中にほしいやさしい掌

羽曳野市 吉川 寿美

おしどりも共には逝けぬ世の摂理(鬼遊先生を偲んで)

一会の風は昨日の事を口にせず

一番尽くしてくれた膝ボンが痛む

許すとは言わず逃げ道開けてある

時効にはならぬ科白を妻が持つ

羽曳野市 酒井 一 壺

長生きへ歳はいらないお元日

すぐ米寿がんばりませんマイペース

約束をしてから迷う癖があり

迷いから抜け出すまでの回り道

原点にもどれば迷い吹っされる

新世紀 古い窓にも新風を

羽曳野市 西村りつえ

ITに負けないような地獄耳

矢印より手さぐりで行く天の邪鬼

傷負った丸いところが歪み出し

追われるより今年を追うぞなまけ癖

羽曳野市 三好専平

メモリーのチップでバツハ聞いている

ほめるだけほめてしかしと言うておく

なにもかも裸にしては味気ない

凡人の煩惱たかが知れており

アホやなあ あかんだれやと蝶々逝き

羽曳野市 安芸田 泰子

納得はしてないらしい言葉尻

譲られた席で揺れてる自尊心

一人居の癒し求めたロボット犬

大根がおいしくなつて冬最中

宇宙遊泳みたいな孫の歩き初め

羽曳野市 福田満州

名披講の抜粋テープ師を偲ぶ(鬼遊先生を偲ぶ)

カタカナ語たと並べる作家知事

びっくりするほどええニュース聞きたいが

おもちゃ屋に売ってるかしら竹の蛇

牡蛎だけは逃げ腰うちの鍋奉行

やまと撫子 草かき分けて捜してる

人垣があるから背伸びしてしまふ

年末は帰りたいだろ三宅島

死にたいと言つてしつかり食べてはる

やりくりをしていきいきと暮らしてる

東大阪市 安永 春

ゆるやかに太湖 遊覧船で回る(びっくり上海 四日間の旅)

大荷積み行き交う船の沈みそつ

蛍の光奏でてくれた蘇州の夜

一時間早く起床の勘違い

その刹那ブヨブヨ言つて通りすぎ

東大阪市 指宿 千枝子

馬肥ゆる秋の辛さやダイエツト

悩むのはおよしなさいと秋の空

有馬路の旅のリユックに降る紅葉

紅ひと葉そつと懐紙に包み居り

お土産は財布の中味確かめて

八尾市 内海 幸生

清く舞う雪と道連れ鬼遊さん

南無大師 同行二人の永い旅

新世紀 目の前にして何急ぐ

立ち呑みの川柳話もう聞けぬ

高野山でまた会う日までごゆっくり

八尾市 生 嶋 ますみ

お互いに苦手があつて夫婦独楽
耕せばミミズ目覚めてあわてだす
泣きたい時泣ける宇宙がとつてある
着てみたい服はわたしにみんな派手
晴れの席とても気になる顔の皺

八尾市 井 尻 民

ふる里がやけに恋しい寒の月
子の帰る日をかぞえてる木守柿
まだなにか足らぬせわしい節料理
遅れたがまだ待つていてくれた人
ショートカットして若返る新世紀

八尾市 吉 村 一 風

思いつきり孫に破らせ障子貼る
許そうと決めてから酒旨うなり
寶石をはめてやりたい妻の指
厨房を楽しむ主夫の春日和
大根漬けまだまだ嫁にまかされぬ

八尾市 長谷川 春 蘭

赤信号 銀杏落葉が飛んで来る
悲しみの時でもあでやか菊人形
パーゲンを選ぶまだ着膨れるつもり
葉牡丹の渦幾重にも幸祈る
片隅の幸と言わん老いの秋

八尾市 村 上 剛 治

神の目を盗んで悪いことをする
窓際の席で夕日が目に沁みる
ああ涙 男はすぐに騙される
金メダルやればできると言っている
それからの話をさせる酒を注ぐ

八尾市 村 上 ミツ子

わたの花から蓮の台へお引越し(鬼遊先生を偲ぶ)
下っ端がいつも一番騒がしい
手術中お忘れものはないですか
恋してるばかりの眼にも見えません
ときときは神にウインクしておこう

八尾市 高 杉 千 歩

句誌句報みやげに持たす黄泉の旅
穏やかに二千年の幕下ろす
訣れ惜しくて本社句会の朝に発つ
川柳塔バツジ六文銭より確か
またあしたご苦労さんのまま訣れ

八尾市 高 橋 夕 花

冬枯れの桜並木は菊ざかり
体調の乱れよシクラメンは華麗
寒の月淋しき影のわがいのち
歳月やまだ捨てられぬ業の数
熱アツの朝のおむすび夫よ子よ

八尾市 宮西弥生

結婚はしないが男好きになり

世界地図 国内地図の中で翔ぶ

離婚して職場の花がまた戻る

指切りの指 永遠は誓わない

ペランダにこのごろカラス来て過密

八尾市 宮崎シマ子

電池入れ替えわたしきれいな音になる

二〇二五年 百歳になるとどうしよう

念には念入れても忘れるもの多し

寒空の門をたたいて 訃を告げる

夫が歌うわたし以上の音痴だな

寝屋川市 籠島恵子

形から抜け出せないでいるわたし

流された自分を見てる十二月

わたくしの未来にしゃしゃり出る夫

ペットボトルの水道水に気付かない

冬木立 日光浴をしています

寝屋川市 江口度

やりくりのうまい女のつまみ食い

ゆずり合う席に他人が来て座る

もう誰も渡ってくれぬ歩道橋

ぶきつちよな箸だと思ってる豆腐

年末のみかん箱ごと売れていく

寝屋川市 岸野あやめ

夢ひとつ成れば次の日次の夢

誕生日 中途半端な年齢だなあ

銀行で親切にされ老いを知り

霜の朝 子なし夫婦は他人めき

貰いもの値踏みするのは悪い癖

寝屋川市 森 茜

一生懸命もう見詰めない夫の目

赤い羽根おとなしそうな箱に入れ

ビジネスの話へパフエ慮する

いい人と出会って運のいい日なり

多数決の鎧を纏う民主主義

寝屋川市 平松かすみ

古代食並べて夫のバースデー

ときどきは上様と呼び奉り

回数券買ってお出かけしています

エネルギーの素だと思ふ朝の餅

餅つき器頑張る四分の一世紀

寝屋川市 高田博泉

ご近所のうわさ飛脚のようにくる

食うものはみんな肥やしにしてしまふ

ワンマンが昨日も今日も迷うてる

子を叱る勇気が欲しい若夫婦

フアッションになった携帯離せない

寢屋川市 酒井勇太郎

おはロック踊れと孫にせがまれる

骨太と褒められ荷物持たされる

傷心の帰郷優しい無人駅

警官の不祥事誰も驚かぬ

不法駐輪 自分は良いが人は駄目

寢屋川市 坂上高栄

バリバリッとおかき食べたい総入歯

晩秋の嬌笑かもね緋の紅葉

私より五つも若い川柳塔

人工授精 神も領域許されよ

まだ女 朝の鏡にお早うさん

寢屋川市 太田とし子

電線の雀も睨む新世紀

内閣がどう変ろうと蜜柑むく

ミレニアムいい人連れて逝か合った

買うものはないデパートの喫茶店

欲しいものなしほしい物には手が出ない

吹田市 石原靖巳

煩惱は断ち切れぬまま除夜の鐘

四捨五入すればそこそこの夫婦

ちぐはぐな返事へボケを疑われ

寄せ書きへ同床異夢の字が並ぶ

生き下手な男が唄うマイウエー

吹田市 野下之男

蟹鍋のつもりでいます脚二本

年の瀬に何で第九か拗ねてみる

お土産に気を遣うなで気が重い

京都では身を屈めたい高いビル

孫に似た物売りの目に降参し(タイ国)

吹田市 穴吹尚士

駅前のシャッター通り風が舞う

一人では寒いおしゃれなカフェテラス

万札が駆け抜けて行く年の暮れ

善人の顔をするのに疲れ果て

一息で流れるように悔み言う

豊中市 安藤寿美子

煙突に煙直角寒の風

この森に来ればいつでも安らげる

待ち合わすちよつとシツクな喫茶店

人影が長々と落ち冬至来る

嬉しい日 心経の声ハイトーン

豊中市 岸田知香子

必要とされて隠居も出来ぬ喜寿

正反対持ちつ持たれつ五十年

夢託す買わねば当らぬ宝くじ

歳末の呼び込み財布ままならず

差し向かい鍋を囲んで年忘れ

豊中市 井上直次

遠回しトゲがぬけない胸の内

シュークリームのような男がよくしゃべり

うつるから切ると電話の主は風邪

シングルベル新世紀へとせわしげに

この町にコンビニ生れ地ベタリアン

豊中市 松岡久留美

出来過ぎる嫁は非難の的にされ

落しもの前後左右を見て拾う

耐えぬいて見事に咲いた恋の花

遠来の友としたたか呑み明かす

うちの家男勝りの母でもつ

豊中市 湯浅馬洗

おみぬぐい仏の顔は何度拭く

ベットポトル恵方の水はどれかいな

ゼロ金利 長蛇の列の宝くじ

金廃坑やつと輝く観光地

紅梅が欲しい二月の狭い庭

高槻市 江原秀夫

昔話ぐるぐるまわる屋台酒

空しさが重く流れて世紀末

人恋し話つきない囲炉裏ばた

リーダーの右往左往に闇の声

今日五回だんだん増える物忘れ

高槻市 傍島克治

安請合いしてまた悔いる酒の席

目線避け話す上司の腹を読む

妥協という護身の術を心得る

定休日 生け簀の魚の安泰日

お隣ですらと妻からプレッシャー

高槻市 井上照子

鬼は外 心の鬼に撒いた豆

柁に鯛の頭厄はらい

海越えて学ぶと孫の目は光る

戦争を知らぬ若者荒れたがり

かたかなの言葉へ辞書が離せない

箕面市 岩津ようじ

ロクなことどうせあるまい新世紀

泥舟の大臣となり嬉しそう

人生というベルトコンベアまだつづく

やがて逝く身にも少しは欲があり

車椅子 元大臣の被告なり

箕面市 出口セツ子

笑顔みな集い世紀の除夜を聴く

優しさの種を子と蒔く新世紀

新庄がでかい夢描く新世紀

内外の鬼と仲良くして暮らす

本気で嘘をかき分けてる子供

守口市 井上桂作

なにことも胸におさめて時を待つ

皺の数だけ責任の持てる人

敬老日休んだ人は折もなし

年寄り茶髪高靴好きでなし

公園ははぐれ小鳥の集う森

四条畷市 吉岡修

不器用と器用貧乏です夫婦

蛍光灯 淋しい影をなほおぼかす

晴れもよし雨もなおよし君という

俄雨 駆け出したのがアテランス

すつきりとさせないことで金動く

大東市 児玉蛙

うっかりと口をはさんで馬鹿をみる

あんちゃんの手を借り飛んだ水たまり

頂上へ登る気構え亀の足

水たまり越えて弾んだ親ばなれ

介護保険使わず逝けば極楽だ

枚方市 寺川弘一

やりくり上手見込まれ玉の輿に乗る

やりくりの次元が違う妻と僕

介護する心に小鬼同居する

本人は拒否しただらうターミナルケア

線香の揺れとお話する仏間

枚方市 海老池洋

遣伝子組み換えそんな大豆の福は内

招福の猫がよそ見をして困る

人生に怖い矢印多すぎる

弱気では様にならない河内弁

よい時もあつた宝石箱の鬱

交野市 山川日出子

ハイカラな神戸の姿戻つてる

青い目が白のお米のコマーシャル

父の額平常心を語つてる

下駄履きで診察室にお坊さん

風鈴がいつも迎える無人駅

交野市 森本弘風

猫嫌い隣同士で仲が好い

老眼鏡 前の美人のしわが増え

喜寿祝い秘蔵の酒が踊り出す

それぞれが枯れてきている同窓会

ラーメンもイーजीオーダー博多です

高石市 浅野房子

暖冬のうちにと急ぎ旅立たれ(鬼遊先生へ 2句)

今頃は栗主幹と選句中

介護法プロも暗中模索中

ラーメンを肴にビール飲む男

正月も盆も関りない暮し

泉野市 山本蛙城

税という奴に齒ぎしりさせられる

よかつたなあ列島赤い地図のころ

売り言葉らしい風には逆らわぬ

新世紀蓄の先も赤く待つ

新参は蛇口に遠いホームレス

貝塚市 池田 寿美子

入院パック役立たぬ日を祈りつつ

諸行無常 祇王寺の庭そのままに

I T 化情緒味わう暇もなし

踏むも惜し焚くにも惜しき敷紅葉

大根がおいしくなつて年の暮れ

松原市 小池 しげお

スタートは右足からと決めてある

言い返せなくて入歯をよく洗う

仏さま小さな声を聞き給う

回るしか習っていない風見鶏

茶柱を飲んででもつれてゆく話

和泉市 岡井 やすお

大物内閣重くて景気浮上せず

国債だあと野となれ山となれ

建国日 榎原行はみな満車

老人会 三人減つて五人ふえ

炬燵から梅見だよりを見る二月

大阪府 米澤 俣子

以心伝心 今夜は鍋が煮えている

躓いてひと呼吸して歩き出す

ガイドライン 我が家は妻の傘の下

ロボットに仕事の鬼もしてやられ

事件記者 トップ ニュースに事欠かぬ

大阪府 榎山 隆盛

鯨飲の父とおんなじDNA

人情の風が素通り青テント

ラーメンが恋しくなつた暮れの六つ

わたしにもチークダンスは踊れます

強がりな女の肩が泣いている

岸和田市 井伊 東吉

散り終えを早くと願う落葉掃き

関空の沈下は神の怒りかも

親も子も土俵の外が騒がしい

年金がまたまた細る医療負担

拝借のトイレに並ぶ備長炭

岸和田市 岩佐 ダン吉

結果論でつかい声で言うてはる

出直せと一喝くれたお母さん

核のない世紀がこよう陽が昇る

自己宣伝さみしい僕になつてはる

正しいと思つてばかりいた角度

岸和田市 高須賀 金 太

メール交換車内にへたる高校生
トラックの中にお昼の清掃婦

編み物をする妻の背に母を見る
冬枯れや孤立しているなと気づく

しあわせの中の私に気づかない

岸和田市 原 さよ子

ブランドの財布に中味ともなわず
かつらとも知らずに褒めた黒い髪

逆転打いい顔してるお立ち台

くじ当りまさかまさかの夢心地

ナツメロで少女にもどる母の顔

岸和田市 宮 野 みつ江

名月に足跡残したのはヒト

足跡にちよつと背のびの後が見え

赤い月 不意におびえた胸さわぎ

意地捨てて何と気楽な掘りこたつ

熱さめてなんてことないただの人

河内長野市 加 島 由 一

雨上り傘とはくれるはしご酒
眠らない町で探した青い鳥

したたかで涙脆くて妻で母

味噌汁があつていい日の幕が開く

冬が好きうまい鍋あり酒があり

河内長野市 井 上 喜 醉

晴耕雨読 夢をつぎたす新世紀
夢一ぱい抱いて嬉しいパスポート

善人は上手な嘘が苦手です

古希越えた雑兵ころも背も丸い

飼、い主へ利口な犬は目を配り

富田林市 大 橋 鐘 造

一人では歩くに惜しい星月夜

花束を贈る妬心を秘めながら

ジャンケンが強い私で生き残る

人間に戻って除夜の鐘を撞く

輝いていた日もあつた粗大ゴミ

富田林市 片 岡 智 恵 子

黙っていてくれる味方と信じよう

こだわりを水琴窟に癒される

人間らしい人間のいる吹きだまり

食堂の隅で広げている薬

温泉を掘り当て苦労倍になり

富田林市 中 井 ア キ

器には収まりきらぬ次男坊

思い切り泣いたら眠くなつてくる

できすぎた姑は越えないようにする

すっぴんのわたしをみせて愛される

日本語が死んでゆきます仏さま

新世紀 指折りどつちゅううことはない
忙しさに愚痴り肩書きに酔うて
生き字引 余分なことが多すぎる
大物と比較してから落ちこぼれ

米子市 白根ふみ

米子市 神庭詩郎

役職を降り黄門の役をする
休耕田 身の振り方を考える
聞いている時は納得した法話
手内職 子との対話に空返事

米子市 中村金祥

いきなりの地震へ風も立ち止まる
いきなりの大臣席が落ち着かぬ
底のない空の青さに気を許す
しっかりと風来坊は貯めている

鳥取市 夏目健一

脳天を割られたくないので無口
南無阿弥陀仏なおゆく道もきた道も
たつぷりと冬日やりたい十七歳
恙ないいのちの隅にある感謝

鳥取市 山本益子

何よりの薬と思う深呼吸
古い師 荒れた手相にメスを入れ
たつぷりの愚痴聞き交わす縄のれん
世紀末ラストシーンを自分史へ

鳥取市 前田一枝

年の瀬にたまってるものゴミばかり
しみじみと帳尻ながめ泣き笑い
師 走行く素通り出来ぬ助け合い
きらいだと言ったおかわり三ばい目

鳥取市 美田旋風

大義名分つけて世話役押しつける
職安で見付けられない飯のタネ
最後には自分で決める幸不幸
庭木刈りわが城ばつと浮き上がる

鳥取市 石上悦子

飛行機は自由に飛んでいるつもり
どうしよう瓶のブラシのような松
土踏まず庇ってなんてほしくない
かじられて鯛焼君はまんぼうに

鳥取県 塔寛子

世の中を背負って後はどうする気
打つ手なくあれよあれよと世紀末
過去未来消した地震と世紀越え
新世紀へ脳の改造間に合わせ

鳥取県 黒田くに子

同居してくれる嫁ありありがたい
嫁の里近くうっかりさからえぬ
家柄を偲ぶ旧家の太い梁
兎小屋でも家族はみんなまるく住み

鳥取県 西川 和子

六十五歳今が私を急き立てる
味付はまかせて調理ポランティア
兄弟で分ける一つが切りにくい
道連れの石段腕をお貸しする

鳥取県 乾 隆 風

電車賃のこして居酒屋にもぐる
サロンパスはぐって美容院に行く
気の毒な人だと思ふあらさがし
蛇だつて毒にも薬にもなるよ

鳥取県 乾 喜与志

いつの間にやら童児になっているおとな
お爺ちゃんの変笠はまだ納屋にある
衣装ととのえて次の間の孫よ
ありがたやテーサービスと年金と

松江市 川 本 畔

約束はせぬままにさよならと言ふ
再会という名の店で待っている
酔い覚めの肩へ下弦の月降りる
身の内の大きな音で新世紀

松江市 安 食 友 子

賽銭にごっそりエゴも含んでる
止まり木で五臓六腑をフォローする
グミでもいい覚えられているわたし
指人形 先ず抱擁をさせてみる

出雲市 青山 久子

赤ちゃんをしつかと抱いた若いパパ
セールスと話をすればつらくなる
年の瀬に足跡じつと振りかえる
遠い子へわたしの鐘がひびかない

出雲市 小白金 房子

いい目覚め生きて大きな陽を拝む
蛇口全開 今日勇氣が湧いて出る
煙ひと筋暮色にかすむ過疎の道
藁屋根の温み故郷の夢を見る

出雲市 石 倉 芙佐子

金銀の胡蝶舞うてる万華鏡
凍る夜鏡に写る雪は赫
私の裏も表も知りつくし
意地悪な鏡にそっぽ向かれてる

竹原市 岩 本 笑 子

早く早く紅葉が見事です
ハローワークもベンチも師走の風である
自動販売機 人間様におじぎさせ
町角で拾う一円玉のうつ

竹原市 古 谷 節 夫

スナップの桜が語る青春譜
静寂と幸せ満ちて夕焼ける
ストレスを包んでくれる森が好き
プライドを押し折る策が見あたらず

岡山県 福原悦子
スケッチも入れて昨日の旅終る

完済のローン気軽な鬼瓦

満ち足りて眠った朝のいいリズム

末席の一声意見が乱れだす

熊本県 岩切康子

笛太鼓 詣でを待って御神酒出る

白蟻駆除 同級生の愛が見ゆ

お祝い品せんてい缺を頂こう

糸通すだけの眼鏡で雑巾縫う

富山市 酒井輝

2Bの便り下手でも嘘は無い

出世せぬから幸せな遊園地

キャンドルがパスタの味を深くする

高層に棲みひとの子になる仔猫

富士宮市 渥美弧秀

古い二人 森のいのちに包まれて

山麓に暮す夫婦に庭の富士

不帰の友偲び独酌暮れなすむ

終章を富士に守られピアノと詩

東京都 後藤早智

ほめ役に徹し仲人役を終え

七ほめて三は論じている祝辞

朝市のいぶきに魚買い漁り

ワインドーショッピング財布持たない女です

弘前市 岡本花匠
室咲きの花添え妻の誕生日
冬至南瓜お膳に添えて母達者
三秒の余裕大事と影法師
ITに乗れぬ男のペンの意地

弘前市 蒔苗果林

青い森に生れて老いて青い尻

森の奥老いも励めと雪の鞭

無言の行 一人暮しにテレビ笑う

年金を医療費越して新世紀

弘前市 櫻庭順風

幼子が隔離病舎に入るなんて

病棟へ神社みたいに祈り込め

高熱に一瞥されて泣くお鮎

薄暗い病棟点す時刻表

檀原市 居谷真理子

衣食足りガーデンングの土を買う

凍えた手まずは温めるうどん鉢

愛人ができて許した娘のピアス

太い足まともな女でございます

西宮市 井上松煙

喜寿となりゆったり歩く下り坂

脳細胞減っても爪はよく伸びる

どっぷりと趣味にはまって若返る

庭の木にイルミネーション若い親

西宮市 刈田泰司

岸和田市 藪野ケイ子

藪野ケイ子

秋深し隣松茸 うちさんま
古時計 余命を削る音がする

秒針の早さで汚れてゆく地球

時計まで疑って見る待ちぼうけ

笑いなさいあたりを暗くせぬうちに

はいお父さんみかんむく背を丸め

雪の森春へ夢見る蛇家族

哀しげに踊るピエロの赤い鼻

賞味期限確かめている老眼鏡

おだてられその気になって世話をやく

外野席の野次にふりまわされそうで

朝令暮改 議事堂の頼りなさ

バス待てば枯葉ぐるぐる舞うて来る

座り胼胝 羨まじしい母想う

初恋の人の名刺が捨て切れず

ファッションの見方が違う母と娘と

衣食住 年金暮らし遅遅進む

ドリンクを透かして飲んで七十路

主婦の座にどっかり妻は崩れない

悔い一つ抱く膝頭痛み出し

和泉市 西岡洛醉

伊丹市 小熊江美

神戸市 山口美穂

中村 ゆきを

岸和田市

平手打ち愛のムチ飛び立ち直る

片隅でふたりで紅茶淡い恋

舞い終えて拍手の音に足袋軽い

ライバルの咳ひとつ聞き夢が覚め

老境に入り枯れ木をいとおしむ

小半日探し物した模様替え

居眠りのテレビ観賞する至福

おない年 自分は何をして来たか

河内長野市 植村喜代

二時間も掛けて来る娘に損させぬ

お向いの紅葉 見事に塵も出来

お正月嬉しかったは若い頃

写真の顔こんなに歳を取っていた

箕面市 唐住実

ゼロ金利 遊ばす金を持つ身分

焼け石にちやんとなくなる金を貸し

歩道まで動いて街に流し込む

鍋奉行 隣の鍋も差配して

池田市 藤井計光

男料理上手い女将に遊ばされ

年金が食欲の秋食いつぶす

未来図は月と寝ている夢枕

大ジョッキググッと流す凄いいシャン

池田市 栗田久子

鬼は外追われた鬼は寄つといで
立春を前にくしゃみが凍りつく
気がつけば悪魔と握手した右手
梅だより山の斜面が光りだす

池田市 岡本吉太郎

逃げに逃げやつと助かり生き心地
力強く押切つたつもり勇み足
九州場所 満員御礼程遠く
森内閣倒れそれでも続いている

吹田市 大谷篤子

鍋の湯気ほろ酔い美人に見えてくる
熱三日 土鍋で孫の粥を煮る
激論の船の舵取り名司会
演出をされた芝居でまた涙

吹田市 古川喜美子

母さんはいつも隅からタクトふる
好きな人対角線に鍋の湯気
鍋釜を磨きつつけた命なり
小走りに袋の鈴の鳴る日和

吹田市 瀬戸まさよ

熱々の冬食卓も賑やかだ
ミスしてもそうでしたかとあつけらん
年老いてギョツとするほど親に似る
草の道踏んで大地を確かめる

茨木市 堀良江

大根だき大鍋甘い湯気を立てる
バスツアー小鍋ずらりと煮えている
葉ばたんの出を待っている花時計
還暦の教え子に喜寿招かれる

守口市 結城君子

師走なかばに能舞台観る余裕
暖房のお札かカニシヤボ満開に
菊の出来ほめてさが菊貰いけり
欲ぬける私へみんな親切だ

寝屋川市 堀江光子

後ろから時計が今日も追っかける
鍋ものも小ぶりになって老夫婦
度忘れが増えて真紅の手帳買う
終点の分らぬ船を降りられず

寝屋川市 北岡波留吉

逆鱗にふれては潜る縄のれん
嘘八百並べ射止めた金バッジ
えらいこつちやこんな私にラブレター
まだ八十路 朝飯前に一仕事

枚方市 鈴木政子

若者はコンビニ弁当元旦も
六時間待ち川柳塔も読み終り
飛行機雲 今日には五本が交叉する
喪中ハガキクラス会から五通来る

枚方市 宮川珠笑
お布施にもレシート欲しい新世帯

大阪の夜が博多で明ける旅
おしゃべりも止んでツアーバス暮れる

枚方市 二宮山久

リストラをのがれ定年まで三年
妻に似て娘の口調酒の量

ローン終えボーナスどこへ行く財布
妥協せぬ我が身に増したる酒の量

枚方市 森本節子

呼出しの長八美声も消えてゆく
白さが見事に着地する中州

残照に自分のいのち重ねみる
肩のちからぐっと抜いて楽しもう

大阪市 清水利武

てっちりがよく流行ってる冬の夜
寒そうに一人ぼっちの寒の月

走る気はあっても足が動かない
小遣いがいつか消えてるパチンコや

大阪市 大塚節子

病院のバス停にふと母をみた
あれこれと出して疲れて三越へ
伝染のあくび握って手で殺す
てんやわんや母笑ってる一周忌

大阪市 渡部さと美

二十世紀と鬼遊先生共に逝き
ITに踊らされるか国あげて
若い芽が不況をバネに伸びている
自慢ぶらないからお聞きしたくなり

大阪市 田中節子

たちくらみ錆びた脳から活入れる
オッハーは挨拶なのか世の流れ
慎重に選び過ぎたら臺がたち
何も見えぬ欲得ぬきの火の恋よ

大阪市 清水絹子

這い這いの孫も仲間祝い箸
当り年の嫁の差配でお元日

誕生日もかねて元旦にらみ鯛
無事金婚 巳年の妻に逆らわず

大阪市 本間満津子

試歩一步 足にやさしい畳部屋
ゆらゆら歩くので震度三気がつかず
いやな話聞いてしまつて耳掃除
良い返事してから思案もて余し

一月号に 同人 山下省子さんの作品が、
誤って水煙抄に掲載されました。
訂正してお詫びします。

秀句鑑賞

同人吟 小寺花峯

—1月号から

だからこそ戦車に向かつて石を投げ、国を守ろうと子供心に精一杯抵抗している。冬に入る少し気になる心電図

高橋 岳水

歳は取りたくないものである。冬が来る度に足腰が痛んで動悸息切れがする。何も冬に限ったことではないが、寒さを迎える度に長生きするための心電図が心配になつてくる。

あと戻り出来ぬ人生風まかせ

菊地 政勝

後悔したつて自分の人生、くよくよしないで残された人生を楽しく謳歌して、明日は明日の風が吹くようになるようになるさ。

満期なき終身保険掛けて生き

八田 敏

ただ、生きながらえているのだらうか。「終身保険」に掛金がチョッピリ惜しい気もあるが、自分はまたこんなな元氣だ死ぬわけがないのだと自分に言い聞かせ、明日もきつと同じ事を考えている。

宵越しのお金は持たぬ鬼ごころし

稲葉 冬葉

金は天下の回りものとはかりに若い時(特に独身時代)はそう思つていた。明日は待ちに待った給料日。今夜は手元にある金で「鬼ごころし」の酒を買い、下宿へ行ってドンチャ

現代川柳といわれる今日、川柳の根本ともいうべき定型が失われつつあると思う。川柳の三要素といわれる「ユーモア」「風刺」「穿ち」が底流にきちんと流れて初めて川柳と言

われたものである。心に残る句は誰が詠んでも後々残るものである。川柳家だけが理解する川柳はもはや川柳とはいえない。大衆に裾を広めるには大衆から理解されることが必要である。悲しいときは悲しく、嬉しいときは嬉しさを句に出して「五・七・五」を頑なに守っていききたいと思う。

罪人にいつかされそう喫煙者

西出 楓 染

愛煙家は、最近ノイローゼになりそう。身体に悪いことは百も承知なのである。仕事を片付けたあとや物事の合間の一服は、何とも言えない喫煙者のゆとりでもあり、「煙草は思索の翼なり」である。

独学で覚えたタバコ酒おんな

新家 完司

人間とは賢いものである。他人から教え

てもらったり、習つたりしなくてもちゃんとした悪いことだけはマスターする。勉強もこうでありたいと思うものである。

答弁の台本頁間違える

藤井 正雄

本人は上がつてしまつて間違ひに気がつかないのである。最後まで飛ばしたままで読み終えてしまう。そして、嗚呼やつと私の出番は終わったと安堵している。

一本の道しか知らぬ足の裏

大石 あすなろ

悲しいかな馬鹿がつくほど正直者である。人を押し退けて出世するものもいるかと思えば、会社が終わると真つ直ぐに家に帰り、次の日また会社に行く真面目人間もいる。果たしてこれで良かったのかと、ふつと考え込んでしまふ。

パレスチナの子供が石を投じている

三好 専平

深い意味の句である。普通の子供であれば何でもないことであるが、パレスチナの子供

ん騒ぎしようぜ。

味噌汁が美味いと思う寒い朝

牛尾 緑 良

外は北風が吹いている寒い朝、会社へ行くのが億劫である。そこへ出てきたのは、湯気が上がっている味噌汁である。ふうふうしながら飲んでいるうちに、さあ今日も頑張るぞという気持ちになる。

十七歳の善悪本物だと思ふ

垂井 千寿子

新聞を賑わしている十七歳前後の少年であるが、それは一握りの数でしかないのである。大人の方が毎日事件を犯しているじゃないかと。親切な十七歳は身近に沢山いるのである。たまたま新聞の活字が十七歳というだけである。

ひとことの風潮流に呑み込まれ

松原 寿子

してやったりとほくそ笑んだ意見が、意見ではなく屁になってしまった。大衆の意見と食い違つて押し流されてしまい、落ち込んでいのである。民主主義とは時には正論を流してしまふ残酷なものである。

子を諭すママの優しいオブラート

中後 清史

目の位置の高さで子供と語り合ふのはやっ

ぱりお母さんが似合っている。男だとうはいかない。泣いて家へ帰つて来たとき、いい子だから泣くのはもう止めて、さあ、お母さんに話してごらんとお母さんと言つて優しく包み込む「オブラート」そのものである。

つい酒が言わした事にして本音

椎江 清芳

やあ、昨夜はどうも済まなかつた。近頃アルコールが入るとどうも一言多くて、何を言つたか覚えてないんだよ、と言つて謝つてい

るが、実は酒の力を借りて普段の態度を注意しているのである。

記憶から消えてはいない震度七

栗田 久子

あの忌まわしい、地震は忘れようとしても忘れることは出来ない。地震ばかりでなくとも予期しない震度七のような出来事は一生の内

で何回かあるものである。良いことにせよ、悪いことにせよそれらは記憶に残っている。

明日の事分らないから生きられる

田中正坊

今日は確かに生きています。明日の事なんて考えてもどうしようもない。今現在生きてい

厚底のドングリもいる背くらへ

傍島 克治

流行とは恐ろしいものである。危険を顧みず若い女性は、厚底の靴を履いて背を高く見せようとしても、みんな同じように厚底を履いているから結局は変わりばえはしない。大きいドングリも、小さいドングリも携帯片手に街を闊歩している。

マンシヨンの隣は近くて遠い人

中田 あい子

隣の人は何する人ぞ。今はマンシヨンばかりではない。昔は特に農家は田植え、収穫時期にはみんな協力してやったものだ。今は機械農業で隣の助けはいらぬのである。だからコミュニケーションの場がない。おのずと隣が疎遠になる。

決められた紙数に限りがあり、鑑賞文が書けない次の句をお許しください。

不機嫌な猫の機嫌をとっている

高田 美代子

知恵借りるつもりがお金貸す羽目に

片岡 智恵子

定退へ邪魔な仮面は脱ぎ捨て

大橋 鐘造

無駄な汗ひとつも無いとお母さん

岩佐 ダン吉

自選集

橘 高 薫 風

みちのくの雪とりんごと黄なコート
宮城のお堀端行く黄なコート
空港はベンツを降りる黄なコート
御堂筋金の公孫樹へ黄なコート
聖堂のマリアに祈る黄なコート

黒 川 紫 香

正月は箱根駅伝見てるだけ
希望だけ百歳の絵を画きつづけ
年配の看護婦さんに興味持つ
旨いもの食べる夢だけ追いつづけ
正月は六甲山がよく見える

野 村 太 茂 津

補聴器に響く福音かも知れぬ
後輩よ僕の目はまだ黒いうち
目障りな奴が立つので出た遣る気
迎合はせぬぞ 刃毀れはないぞ
昔鍛えた小太刀の術を見せようか

榎 本 吐 来

鬼遊さんのご逝去を知る師走の会
新聞の見出しもぴんと来ぬ老化
気にするのが一番駄目と識っている
老夫婦なごんでいます軽い嘘
生涯現役 老いの活字に励まされ

土 橋 螢

すこし硬派で戦争へ征つてきた
昭和・平成 我が青春に悔いはなし
二千年終りは蛇に化身する
無量寿の海を潜つてみたくなる
帽子かぶつて八方の厄払い

斉 藤 荔

空の青ソーラーカーの乗り心地
木枯らしが村の出稼ぎ連れて行き
ミレーの絵の頃はよかつたなあ落ち穂
紫蘇の葉で包もう亡母のいい話
豊稷に小鳥の分をちと残し

藤 村 女

激流に生きた証の丸い岩
流れ流れて母なる川の丸い石
つらかった過去は語らぬ朱いばら
過去すべて包んで女強く生き
去る女の涙が月に美しい

小林由多香

遠くてもふる里があり母がいる
おもしろい漫画下車駅過ぎていた
反省のいがい酒にも酔っ払い
国文祭まではがまんの休肝日
大掃除ころも部屋も新世紀

八木千代

鬼遊さん さようなら
冬空のあまりに青き旅路かな
塔の柱もうちの柱も震度4
お先にとみんなが急ぐ世紀末
アペマリア優しい星のあたりから
初霜の中を訃報は人へ人へ

西田柳宏子

怒ってる暇なんぞない忙しい
スランプという口実に逃けている
まだ越えるものあり老軀に鞭を打つ
こだわれば褒め言葉さえひっかかり
三億円とる気のジャンボに吸いとられ

西村早苗

猪口二三杯もうはじまった泣き上戸
崩れるからおかしゅうて積む積木
どじばかり慰め恥をもう忘れ
雪見酒酔うてはならぬように酔い
二十一世紀のお神酒ほんわか効いてくる

堀端三男

酒たばこ止めて長生きするそうな
有形無形の恩をたくさん受け八十路
勝つものが何ひとつ無いいい友だ
粹外でにやにやしてるすかかん人
年金と釣り合う軽い命かな

田口虹汀

言語では一寸語れぬ弥勒の美
形水さんに鬼遊さん塔の宝を挽ぐように
唐津でも久仁於多駄子を失うた
辛巳に架けよう卒寿の夢の橋
領巾に登りや良い陽が見れるけど

阿萬萬的

冬日和愚痴が溜った独り部屋
足並は揃わぬけれど夫婦です
おだてられ自己満足の絵が描けた
躓いてやっぱり歳かなと気付く
介護保険政府のご都合主義に見え

石川侃流洞

カラスミへもう一本をせがまれる
老人ホームに対話がはずむ陽の温み
子が敷いたレールに乗って至福旅
孫の玩具にされて野良猫喉鳴らす
お隣が釣れだしいらいらしる竿

舟木与根一

部屋割りの軒が先に寝て困る
少子化の少年が履くでかい靴
毒のない蛇が揃うた年賀状
小説より奇なり此の節寝正月
とぐろ巻き作戦を練る初暦

恒松叮紅

義理一つ欠いてしまった体温計
曇り空歪んだ話聞かされる
ユーモアの解けない人のくそ真面目
トイレから一句浮かんだ顔で出る
気に入らぬ話忘れることにする

野田素身郎

パラパラも踊る美人の若女将
先日の地震でトイレの戸がきしみ
議論はもういい僕は身体障害者
検診の結果分かって酒にする
除夜の鐘妻は疲れて寝ています

玉置重人

傘寿ですオーバーホール急がねば
しがらみはみんな捨てよう冬木立
自動車はあかんが自転車は乗れる
威張ってはいるが私の守備範囲
もうちよつと生きるつもり粗衣粗食

河井庸佑

竿を振る手を止めじつと見る夕日
守備範囲妻の広さに助けられ
逆境をプラス志向で切り開く
同僚と傷をなめ合う縄のれん
親友の訃へ最後に会った日を想う

小西雄々

達筆の賀状に心うばわれる
大根も皇居に着くと落ちつかぬ
火の髪は不要と切れば吐息でる
湖岸には伝説があり水にごる
冤罪へ木が揺れつづく霧の中

月原宵明

まだ酒がいける二十一世紀
表札も靴も生きてる三回忌
渋柿が堤から手の届くところ
内職の母と宿題向かい合う
一呼吸おいたら主義が変わった

波多野五楽庵

山は雪おきあがり小法師もろて来た
智恵子抄閉じるとほろり日が暮れる
序文から終のわたしを捨てにゆく
水子塚おんな一人の重い枷
北へ帰る寺山修司の人哀れ

芳地狸村

墨彩が光る手書きの年賀状
絵手紙の筆がうれしい旅便り
ボジョレーの香りに酔った解禁日
一杯の酒が車を鬼にする
留守番に留守番がいるおじいちゃん

正本水客

珍しい友の手紙をとっておく
つまずいてから気が付いてもおそい
山幾つこえたか過去をふりかえる
雑音がきえてから静かなり
口げんかの後は何ものこらない

遠山可住

週刊誌の見出しに老いをくすぐられ
酒だけの酒がこのごろ落ちはじめ
玉手箱それから軽い方を選ぶ
年寄れば死ぬみんな死ぬ次は僕
ジャイアנטの優勝おもしろおまへんな

川島諷云児

清濁を飲んで流れに身を任す
波風を立てて沈んでゆく噂
我漫にも限界がある腹の虫
ふる里は近くて遠い流れ雲
お隣の主人を妻が褒めすぎる

故金井文秋

いつまで生きますのヒントがちよつとほし
へま言った顔が漫画にされている
退屈どころか趣味に追っかけられている
生きる道は妥協と頑固知っている
肩で風切った人だが自己破産

宮口笛生

初日の出燃えに燃えてる新世紀
幸せを願うて過疎の別れ橋
盗人酒の味が匂うて叱られる
銀行強盗俺もやりたい十二月
正月やだんだん怖い歳になる

二宗吟平

草花がジョギングの足引きとめる
ご縁日火鉢の席を先にとり
年賀状書いて師走に春が来る
寒いとも言わず七星距離守る
老大で若い講師に励まされ

越智一水

初春や路郎 葭乃の軸をかけ
迎春へ点す神の灯仏の灯
初笑いみかんの山をみな崩し
初春へ雀が庭でさわがしい
地に足をつけて歩こう新世紀

工藤吟笑

昔日の栄華を語る古土塚
振り向かず川ひたすらに海へゆく
薬呑み死にたい等と嘘の皮
痛飲もよいが生命もだいじです
軍人が消え軍手だけ生き残り

木村あきら

福は内独居老人豆を撒く
能面の裏に優しい顔がある
黙秘する九官鳥が喋るから
揚つてる凧に無限の空がある
密林ジャングルの中で童話が貌を出す

両川洋々

豊作は罪か罪かと土に問う
燃えた日もあるに悪妻とはなんだ
兵の墓バンザイ聞くと目を覚ます
ミサイルよフロンよ地球いじめるな
肩すかし食わせて何が政変だ

森下愛論

千代紙に煩惱包み海へ捨て
手のひらに余命を乗せて瘦せてゆく
満足な五体の中は酒蔵で
なまぬるい酒が言葉を詰まらせる
前編は語る後編酒酒酒

弘津柳慶

国なまり心ほごして里の川
電話中風呂の水を思い出し
原爆の街青々とよみがえり
賛成の拍手で会議締めくくり
浦島を帰して姫のヒスが出る

板尾岳人

久しくも美人に逢えた登山口
また木曾路歩いて握りめし食べる
寒くても母を忘れたことがない
年金で食べて走って森の中
妻の手を握ったことがない二月

河内天笑

ええ披講聞かせてくれた鬼遊さん
高杉 鬼遊 十二月七日
大坂 形水 十二月十一日
ぼそぼそと温いことばをかけてくれ
西村左久良 十二月十五日
育んで大樹は涅槃像になり

『五体不満足』を
読んで

奥山 美智子

ある日、テレビのモーニング・ワイドショーでこの本の著者、乙武洋匡（おとたけひろただ）さん（二十一歳）とばったり出会った。画面ではこやかな笑顔が幾度となくクロージングアップされて、さわやかな好青年だった。タレントたちとテーブルを囲んで椅子に座っていたが、私はふと目を留めた。彼には両手と両足がなかったので、自分の目を疑った。何回も見直したが、本当だった。なぜ、こんなことに……と同情せずにはいられなかった。

『五体不満足』この本は講談社から出版された。（平成十一年）一ヶ月余りで三十万部を突破する勢いで売れているという。障害者の本がよく売れた話を今まで聞いたことがない。電動車椅子を足にして、早稲田大学政経学部に通っている。（平成十二年三月卒業）

頭脳明晰で次から次へとつなげられることしきりで、ついつい本を買わされてしまった私である。本屋には人気の本だからよく見えるところにどっさり積んで置いてあった。

小学生にも読んでもらえるように、漢字には振り仮名が付いている。だからとても読みやすいので、たくさんの方達にも読んで欲しいと思う。

彼は先天性四肢切断という障害で、生まれつき手と足がなかった。原因は不明だという。『神のいたずら』としかいいようがない。産まれた赤ちゃんとの対面は一ヶ月間も許されなかったとか。初めて彼を抱いたお母さんは「驚き」「悲しみ」ではなく、「かわいい」「喜び」だったという。なんと寛大なお母さんだなと感心した。だから、彼も重い障害を乗り越えて、小・中・高校と普通学校を楽しくエンジョイできたのだろう。「障害者だと意識したことはほとんどなかった」というから、大きな驚きである。

私は特殊学校の温室育ちだから、彼の思考と行動に対する努力と忍耐力の絶大さが、どれほどのものかよく分かる気がする。両親の熱意と彼の知力で、普通小学校への「入学許可」を手にすることが出来た日の喜びはひと

しおであらう。プロ野球選手・将棋の棋士・アメリカの大統領・弁護士と彼の夢はくるくる変わってゆくが、いま、どのようなあこがれを抱いているのだろうか。

早稲田大学の総長へ申し入れをすると、以前は車椅子のまま建物の中に入ることにすら困難な校舎であったのを、新校舎（九十八年春完成）はエレベーターや車椅子トイレを完備した。『バリアフリー校舎』にして下さったという。本のすごい売れ行きに合わせて、全国から講演依頼が月に十回もあり、「心のバリアフリー」を訴えている。

彼はよい両親、小学・中学ではよい先生とよい友人に恵まれて幸せな人だ。聴力障害を持つている私たちに出来ることに関しては、『耳が聞こえなくてもやれることをしっかりと見つめることが大切』だと言い、もうひとつ『努力って報われるんだなあ』この彼のつぶやきが素晴らしかった。

それから、「あながき」にある有名なヘレン・ケラーのことは強烈に心に残った。「障害は不便である。しかし、不幸ではない。私も自分でやれることはしっかりと見つけて、どんどんやって行かねばならないと心したものである。

水煙抄

板尾岳人選

鳥取県 西垣 美知子

美辞麗句嘘がどこかでかくれんば
和を保つ苦勞の役も楽でない
悔しさを一つ呑み込み雪が舞う
ライバルを越えて心に穴があき
洗っても心にのこる悔いもある

松江市 山根 邦代

親友の笑顔に会えた菊日和
ストレスが吹き飛びました友の声
正直になれぬハートを抱きしめる
心にはいつも花束抱いている
好きな事がありそな予感今朝の風

島根県 福岡 博利

ジングルベルそろそろ腰をあげようか
気が付けばこんな所に立っていた
書いたはず手帳のなかの万華鏡
神様の前だ慌てたかたつむり
慌てるなエンマ様にもある都合

秋田県 秋野 宏

ハイと言う暮らし支える椅子がある
絵葉書が旅の風景お裾分け
塩加減妻が我が家のコック長
その内に蟹も真っ直ぐ歩くだろ
こぼれ種らしい個性の花が咲く

松江市 津川 紫晃

だれか背を押してるような冬の風
柿の種ひとつ小さな嘘を捨て
止まり木の右も左も聞き上手
悲しみを隠すお面が見つからぬ
ブランクも止まったままで年の瀬に

新潟県 高野 不二

無駄でいいせつせと介護保険料
豊作が結局首をしめて来る
妻だけは笑って信用してくれる
呑む用事曆の上の丸印
クラス会昔の恋を打ちあける

東京郡 清原悦子

鳥取県 下田茂登子

笑いジワその深さまで見てくれず
少々の事は許して母元氣

今一度小銭の数をたしかめる
すばらしい木の実が生って深い過疎
しつかりと見ていかなかった鍋の底

叱られた事を忘れていた大人
寒椿コタツの中で見えています

どんぐりと勝負をしても負けそう
でポロポロにされて頑固な首ひとつ

指切りの先に笑顔がついてくる

六感が読み間違えたサスペンス
買い溜めたりんごに蜜がたまりだす

秋田県 湊 修水

米子市 小塩智加恵

のんびりと生きて気ままに竹を踏む
俺よりも先に死ぬなと掘炬燵

無事無難 終りし今日の灯消す
亡父の歳数えてみたら百五つ

うんだうんだ秋田訛りも板につき

震災禍 補修の花瓶飾るだけ

年金の財布が欠伸ばばかりする
ささやかな平和五勺の美酒に酔う

折鶴がちよつと気取って休む松
明けまして大きな節目四方拝

倉吉市 大下智子

米子市 猪森スミエ

腹くりり不器用だけど渡る橋
困っても母は笑顔を忘れない

尊敬と謙虚を論ず鐘の音
深呼吸して幸せの初日の出

口車乗って後から刺さる棘

贅沢な愚痴だと墓に叱られる

暮れてゆく二十世紀と会話する

嬉しくて何から先に話そうか
故郷の風には春の匂いする

平凡がなにより嬉し日が暮れる

チャンネルを替えてみたくて花を買う
つまりはばかりで出口見つからぬ

島根県 毛利幸

米子市 足立由美子

新世紀私の夢を倍加する

人形になりたい気持ち笑われる

いい意味で明治頑固が懐かしい

還暦は人生コースの折り返し

ゆうゆうと街を闊歩の茶髪族

価値観が同じでボールよく弾む

鳥取市 福永ひかり

世の中はつくづく狭い他人の目
正義感このままじつとして居れぬ

主婦業と言いたい程にある仕事
点と点結べば見えてくるかたち
しあわせな時は心も広くなる

鳥取市 山宮愛恵

忘却のかなたで咲いている椿

白椿一輪活ける今がある

美しい涙の音は五線譜に

視点かえ明る朝が迎えられ

蟹食えば万円札の味がする

鳥取市 横田春名

ひとつまた一つと願い消していく

ひとつだけ親の思いに添うてみる

雪積る想い出だけが若返り

朝のお茶お互い機嫌計り合う

たっぷりと貯めた時間が追いついて

鳥取市 録沢風花

風の子の声がどこかでしたような

一枚のがきに夢を追うている

誤作動は忘れた頃に攻めてくる

復興は未完のままに年が暮れ

新世紀やっばり私らしく行く

鳥取市 有沢せつ子

孫の歌孫が居るからひいきする

フリーターが闊歩している大都会

影法師いつの間にやら太ってる

いく度もさよなら重ね老いて行く

新年の箸を家族の色で買う

横浜市 川島良子

外面はいつも夫に負けている

方向音痴五十の坂でまだ迷う

更年期教科書通りやってくる

呆けるのがまさか自分と思わない

去る者は追わない主義かまだ独り

横浜市 近藤道子

明日にもとっておきたい夕茜

二千円財布の中で眠ってる

歳とって不満は捨てることにする

ああ平和だけど不安な新世紀

新世紀地球をもっと青にしよう

横浜市 布山嘉信

柿実る野鳥と分ける秋の幸

役力士みんな勝ったと大見出し

冬至日に部屋を乱れを覗かれる

木枯しが灯油値上げとやってくる

旅に出て続きのドラマ見逃さず

究極の愛はやっぱり夫婦愛

横浜市 平 達也

満ち足りたつもりが何か一つ欠け

何千里何を思うや渡り鳥

思い出がっつきつぎ湧いて走馬灯

三代を生きて世紀の初日の出

横浜市 三村 八重子

暖房の中で読経一葉忌

紅葉の山のリズムは水車小屋

老婆の指が知ってる塩加減

モンゴルへ私の笑顔撮りに行く

飛び越えた積りの足が泥を浴び

横浜市 巖 田 かず枝

大掃除今年も女だけとなり

晴れるなら予報外れも文句なし

たくあんに刻みを入れて母の膳

停戦をしようじゃないか三宅島

期限切れ食べても私元気です

横浜市 田 中 笑子

勝ち負けが決まってるからの苦い風

だぶついた服にこだわる訳がある

憧れた人も散歩に孫を連れ

約束を書いたことすら忘れてる

会うまでは緊張続く初対面

嫁姑なかで男が痩せてゆく

川崎市 小林 久美子

小心の恋を知らないかたつむり

積んである本に激励されている

刺のある言葉の裏を考える

逆立ちをすれば真実みえてくる

宇部市 藤 本 一規

顔役を退き本領を發揮する

看板を変えても中身変わらない

エリートのはきはやっぱり柔らかい

横文字が氾濫しつつ浪花節

人間は自由に炎操れぬ

富山市 沢 江 和代

菜食で人間臭さ消してます

ダイヤモンド無い暮らしにも飽きてきた

口先は無欲無欲とくじを引く

思いっきり泣いた女の硬い胸

善人に疲れてしまう夜がある

和歌山市 上 地 登美代

相槌をうったばかりに矢が刺さる

対決はよそう心が寒くなる

形状記憶されてまあるい輪に戻る

脳伝達ギンギシと言う音がする

国会の中で竜巻よく起こる

和歌山市 武本 碧

絵に画いた虹でも少し勇氣出る
へそ出しルック雷様も苦笑い

浮かれ過ぎ持っていかれた油揚げ

正解は高い木のとっぺんにある

ウエディング幼なじみを実らせる

尾張旭市 三浦 きぬ

電線の鳩背を向けて何思う

来世も亡夫とこの道歩むはず

名医診断加齢のせいと申される

譲られた座席だ居眠りなど出来ぬ

公園に住むホームレス優雅かも

札幌市 三浦 強一

新世紀やはり期待をしてみよう

蘆苞の中で醗酵する民話

味のある祝辞は友の国訛り

ワイドショー終れば風化する噂

母を恋う姿で並ぶ兵の墓

八王子市 井上 京一郎

いい人と言われストレス溜めている

すぐ捨てる娘 何でも仕舞う母

レジへ出す男の籠の軽いこと

磨いて磨いて地金が出る誤算

心証はクロと決めてる妻の勘

兵庫県 徳平 毬子

きつちりとずばらが織り成すまるい家

夕映えに消えかけている夢を追う

何事もなかった顔の朝の膳

癒されぬ心道草して歩む

兵庫県 安達 厚

語らずも響き合う風珊瑚婚

柿を果皮剥いて甘くする

古希過ぎて筆でいろはを書いている

言い訳の寿司折りと乗る終電車

満足な五体に感謝忘れてる

お陰様今年もドック入りしました
兵庫県 山本 泰子

さまざまって青春切符捜す森

ばらばらもどこかで庇い合う親子

ナビゲータ指示にしたがい回り道

老いの身に忘れるという強い武器

豊作の柿にカラスも横を向き

三田市 久保田 千代

どうしても許せぬ古い女です

強がりも言っても所詮唯の主婦

うっかりと出した握手が宙に浮き

趣味を持つ母へ子供の応援歌

広告が嘘だと分かる荷が届き

尼崎市 松下比ろ志

ふる里は昔のままで胸にある

秋空の雲は話が解りそう

残照の海と余生を語り合う

とぼけても耳のあたりにある本音

歳時記をめくる京都のまねき上げ

尼崎市 森安夢之助

かも知れぬ予言に惑う破れ傘

急がねば時計は待ってくれません

ため息が出て風向きが変わりだす

包みそこねた恥があちこち落ちている

山ほどの苦難を越えて喜寿の春

川西市 井本清山

朝酒を妻に勧めるお正月

我が家の手前で今日の悔い捨てる

心経を二行ですます墓参り

狂い咲き許されそうな寒ざくら

ゆっくりと余白綴ろう六十路旅

京都府 丹後屋肇

雨しとど家裁の隅に傘を置く

権利書を探して天井裏を這う

カウントダウン世紀を開く除夜の鐘

新世紀神祕は残して置いて欲しい

元旦や糞落とされるボンネット

京都府 前上英一

雑念を拭って明日が見えてくる

ユリカモメ京の景色に溶けて冬

異文化の風情に触れるパスポート

念願を果たしてからの風の子

稜線の向こうの空に憧れる

京都市 山本礫

動脈硬化寒冷前線北上中

笛はやっぱり夫に吹かしてあげましょう

最初から眉間を狙ったりしない

刺し違えを考えはじめってから長い

ひらひらと落ちられそうな高さだな

京都市 勝山美千代

福願う神の鈴の音凜として

顔見世の空気吸いたく街に出る

師走です財布もやせて風邪を引く

除夜の鐘清めの火粉身に浴びて

鍋ものに和むところは安堵感

綾部市 藤田芳郎

仮の世も極楽があり千鳥足

還暦へ描き足す色の足りない絵

血が濃くて三日坊主を繰り返す

一瞬を重ねて心研ぎ澄ます

走らねば荷を解く岸を見失う

高知市 小川 てるみ

喜怒哀楽男と違う女偏

まだ母が居るから足が行きたがる

寂しさに自作自演のひとり言

喧嘩する余力も少し持ち合わせ

ふる里の風が運んでくる噂

香川県 原 賢

右左妥協はせずに軋む靴

定年後も一度結ぶ靴の紐

葬送の帰り道にも喉渴き

錆び付いた技の一つも研いでおく

これからが妻を頼りの歳となり

愛媛県 黒田 茂代

美術展見た後どっと出る疲れ

棚ざらえして来たような福袋

葉陰からわたし呼んでる冬苺

ほっとした途端涙が止まらない

信心と別の打算が少しある

愛媛県 安野 案山子

山なりのボールになった父の肩

警官の殴りたいのがよく分かる

故郷の風を貰って生き返る

冷え切った五臓六腑が酒に溶け

愛息よ焦らなくても良いのだよ

今治市 塩路 よしみ

夕焼けへ素直になれる無になれる

まだ生きる欲がおしゃれの彩を選ぶ

生者必滅愛とは死とは別れとは

人間の森で蓼食う虫と住み

脇役でいるからゆとりある笑い

堺市 村上 玄也

外出へどつきり理由つける妻

切れ味は鋭いけれど情がない

嫁につく息子で嫁が憎い母

夫婦して里の雑煮を譲らない

ロボットの犬に癒しを受く孤独

高槻市 乙倉 武史

凍てついた心は愛で解きほぐす

逃げ足の早い諭吉へなげき節

笑顔こそ金のいらぬ美顔法

人柄が顔に出ている好きな人

答えてはくれぬ虚しき亡妻の墓

和泉市 横山 捷也

刺を抜きゆつくり余生生きていく

弱点を見抜かれていた面構え

商談がまとまりそうな渋いお茶

餌をくれる顔を見分ける野良の猫

熱燗の一本幸せ噛みしめる

大阪市 三 浦 千津子

歳時記が次第に薄れゆく挽歌

泣き笑い越えて夫婦の生き比べ

バラ百本地味な男のプロポーズ

夫には軽く言っとく預金帳

生き方を変えて悩みの森を出る

大阪市 榎 本 日の出

古い服着れず捨てれず瘦せられず

たつぷりと抱きしめてやる膝があり

悩まずにしつかりすき間うめて置く

口出しをしたばかりに板ばさみ

名水でご飯炊いてる誕生日

大阪市 一 本 勇 太

夫婦とは我慢の積木かも知れぬ

標準に少し外れて見たい猿

横なぐり雨が男にしてくれる

柿熟れて一人芝居の幕おるる

この顔で八十年も生きてます

吹田市 須 磨 活 恵

現実と夢のはざまのヤジロベエ

他人には絶対見せぬ鬼の面

私より背伸びしたがる影法師

貧しくも咲かず花あり夢がある

ばら刺繡命吹き込む朱い糸

吹田市 木 下 敏 子

ひとり言百パーセント姑ゆずり

新世紀いい年祈る除夜の鐘

急な坂あなたとだから楽に越え

木枯らしに押されて弾む冬帽子

紅ひいてどこまで伸びる生命線

八尾市 山 本 宏 至

哲学でぐつぐつ煮えるチャンコ鍋

青春の肌はまぶしいほどピンク

年金の引き算だけがうまくなる

ひびいた夫婦茶碗にある深み

叩かれた方が忘れていた痛み

河内長野市 大 西 文 次

始球式届かぬ球に拍手する

金壱封回転ずしで足を出し

終電が明日の始発に仮眠する

九十まで生きた自分を誉めてやる

終電が通り駅の灯が消える

大阪府 澤 田 和 重

気遣いは無用ひとりにしてほしい

どっちでもいいから意見はさまない

金婚式どちらも耐えた顔でいる

ほめ役にまわりストレス溜めている

意見する顔が分別臭くなる

兵庫県 広瀬 房江

新世紀の切符がやっと貰えそう
おお神よ子をリストラさせないで
良い姑を演じる事もむつかしい
大切なものの一つに旦那様

姫路市 北条 てる代

戻るのを信じ飛ばしたブーメラン
こぼす愚痴拾うてくれた母も逝き
縄だけを残して消えた縄電車
地図にない旅を重ねて四十年

伊丹市 延寿庵 野鶴

ハードルを下げて妥協の視野の位置
酒とろりおでんほおぼる祭り笛
I Tが暮しを変える新世紀
一本の首を大事に老いひとり

和歌山県 村中 悦男

熱爛のコップが似合う縄のれん
喜怒哀楽 鏡の中で確かめる
老夫婦小さな欲をみとめ合う
解決を先送りして新世紀

和歌山県 中村 君枝

限界が見えた記憶のうろ覚え
つつましく暮らして母の太っ腹
鬼の首とつてもたかが城の中
ミレニアム内助の功も死語となり

和歌山市 今 一步

会話して味が出てくる人が好き
戦中派貧しき消えず物捨てず
リハビリに励みながらも酒賞味
仕事帰り不満の渦を酒が呑み

和歌山市 木村 親路

どちらかが我慢したから老夫婦
大学は出たけど寒波土石流
ロボットの介護を受けるかも知れぬ
今日も買うもしやもしやの宝くじ

海南市 堂上 泰子

森羅万象みなそれぞれの知恵を持ち
娘を味方につけて家族の舵を取る
大輪の虹にも出会う冬万歩
真つすぐに育てた息子嵌る罟

田辺市 大峠 可動

新世紀七福神も旅仕度
直線を描いて討たれた蟻の群
疑心暗鬼ばかばかさを繰返し
冬の部屋化した狸と二人きり

奈良市 乾 春雄

売り言葉軽い笑顔で買っておく
悪口を言えば出てくるカクレンボ
初詣神に打算を覗かれる
文庫本になるまで待っている財布

奈良市 田中賢治

習い事連れの音痴に支えられ
ご無沙汰もくせ字の儘で春を呼ぶ
音信の年賀一枚歳忘れ
嫌われて元気に育つ消費税

堺市 荻野像山

大輪を褒めて一鉢もろて来る
酌なんて面倒僕はコップ酒
妻歌舞伎おでんチンして飲むお酒
一年の悲しい音がするポスト

堺市 喜多美波

モザイクの如く枯葉が散り積もり
身を託す裏切りのない白い飯
すげ替えた顔で居座る新世紀
幾たびかチャンネルかえて生きている

堺市 齋藤 さくら

冬の雲ふんわり風に身を任せ
北風に御馳走 鍋と決めている
聞き上手やんわり本音突いてくる
どうなるか不安残して新世紀

堺市 梶本哲平

書き出しは元氣と書こう日記買う
臓器移植 性別がない首ひねる
携帯に今日もだまされ振り返り
革命と囃して株価釣り上げる

堺市 和田つづや

人間という動物の輪が好きだ
桐落葉僕も詩人の真似をする
都会にも羽の返るとこ見つけ
還暦はまだ人生の折り返し

河内長野市 木太久 正一

考古学 自作自演の墓穴掘り
琴光喜ひとり気を吐く博多場所
加藤マグマに一瞬ゆれた永田町
タイタニック同じ運命と突く野党

羽曳野市 川口信子

家計簿の数字最後は赤くなり
味のある言葉をかける唐辛子
大安に茶柱立って手を合わす
この年でうきうきさせる年賀状

羽曳野市 山本 たけし

引っぱって糸真つ直ぐに凧上がる
車椅子 思慕は断ったと好きな人
陸奥を訪ねて民話聞く囲炉裏
思いやる心育ててくれた亡母

羽曳野市 永田章司

商店街大売出しの無い師走
鬼の面付けて非情の肩たたき
世も末と嘆いて明日も生きてゆく
人の目を気にし飲んで立飲み屋

泉佐野市 稲葉 洋

よそゆきの声で話が打ち解けぬ
越年の酒気も一緒に初詣で

お釈迦様届け下されこの賀状
老いに朝老いそれなりの新世紀

泉佐野市 備後 三代子

編み棒を動かす人と見てる人
踏切りで待つ間に捨てる人のエゴ
プレゼント老いたら着ると母は積み
子雀に元氣出してと励まされ

富田林市 山原 昭水

不細工な父で娘が覚えられ
葬式でガンの予防を聞いてくる
わが家なら落語のネタになれそうだ
一張羅を着てもやっぱり河内弁

富田林市 中崎 深雪

楽しい日楽しい色を身にまとう
ロボットにわたしの介護期待する
自然美を深く見つけた定年後
年重ね目からうろこが落ちていく

八尾市 平川 幸枝

目薬の頬を身ぶるいして落ちる
キンカンを煮つめて独りの炎を奢る
万感をこらえた揚句出る涙
これ以上情報いらぬ新世紀

八尾市 中島 春江

冬ざれに一人喪中の葉書かく
焚火さえままには出来ぬ世の中よ
世代交替私は私好きに生き

木枯しの茶房に優雅 熱帯魚

岸和田市 不破 仁緑

ケープルに乗るなと孫を送り出す
正論を聞いてる誰も笑わない
ライバルの全快祈る鶴を折る
万歩計の電池に負けたなあと思う

東大阪市 今岡 貞人

出し捨ての介護保険は謎ばかり
生き死にの話の他は丸く聞く
気は焦り身はついてこぬ傘寿
人並になろうなろうと辞書を繰る

東大阪市 笠井 欣子

卓上の花が開いて鬱が晴れ
絵手紙のダルマ優しく睨んでる
さわやかに車椅子から会釈され
母は逝く観音様の顔をして

東大阪市 田中 美弥子

悔いは無い酒みちづれに父は逝く
裏切りの罪の深さよ寒の月
騙されておこう誠意のある限り
人憎むかぎり虚しく陽は落ちる

大阪市 伴 洋子

顔が売れ名が売れ世間狭くする
貞淑な妻を演じる女面

海鳴りに女のウツを閉じ込める
蜘蛛の糸誰に譲ってあげようか

大阪市 尾崎 黄紅
字余りのような余生にしたくない
作戦のひとつ兜を脱ぎました

新世紀戦の疵は引継いで
自画像はめがね外した顔にする

大阪市 中川 千都子

言い訳を探して歩くまわり道
主語抜きでいつも話されてる噂

愚痴を聞く膝の老猫大あくび
過去形で告白しあう同窓会

大阪市 榎本 舞夢

ハードルを越えて行かねば子に会えぬ
いつも泣く一度泣けない日があった

世紀末いつもと違う年の暮れ
世紀末静かに暮れて新世紀

大阪市 中井 正秀
妻も要る年金も要る余命かな
知ったかぶりするから損をする羽目に

町内に質屋があつてホツとする
どちらでも良い事なのに眠れない

大阪市 小泉 ひさ乃

それぞれの足音で来る新世紀
古希になり燃える心がまだ残り

握手した手でライバルの平手打ち
不安抱きながら返事の封を切る

大阪市 伊藤 博仁

お若いとおっしゃいますが喜寿を過ぎ
酒補充キーは今でも狂ってない

リハビリに格好な器具歩道橋
久々に聞く公園のまあだだよ

大阪市 津守 なぎさ

縁談が決まり娘がしとやかに
大輪を咲かす努力の甲子園

旅プラン準備はいつも出来ている
忘れると年の故だと逃げてます

大阪市 中澤 伽羅

待つ人に無頓着です花時計
身に合うた小さな夢を叶えさす

女には解らぬ夢を追う男
足音を立てずに帰る靴が増え

藍染めの鳥打帽で若返る
生乾きのままで出かける一張羅

高槻市 左右田 泰雄
ほとぼりがさめるとうすぐ悪いくせ
亡き母をしのぶよすがのセピア色

高槻市 生田 義一

命より生保が先に駄目になり

自分史の中に一輪咲いた花

風通しよい肩書のない名刺

胸張って歩けとほやく影法師

吹田市 木村 無 禄

千歳飴駆けてく先は新世紀

幸いはメカに達者な友が出来

孝不孝 父の享年疾うに過ぎ

空想の中で無賃の旅をする

吹田市 太田 昭

肩の荷を下ろすことなく年を越し

除夜の鐘新旧世紀橋渡し

年金にボーナス欲しい歳の暮れ

後の人追い越して行く歳の暮れ

吹田市 二宮 栄子

世紀末六十路の坂を登りきる

外は雨独りの余生考える

見栄を張るまだまだ女捨てられず

里の陽をいっばい浴びてみかん来る

大阪狭山市 矢野 梓

言いつの無駄を知りつつ言いたがり

故郷でまず一番にうどん食べ

故郷の風邪も一緒につれ帰る

隙間風 冬將軍が忍び寄る

大阪府 小栢 こずえ

意地あつて温もりの庭春が来る

手間かけた木地の椀には温もりが

夢の中 昔の顔が会いに来る

世の花も色とりどりの万華鏡

大阪府 藤井 郁代

おもいきり飲めばストレス飛ばせるか

山盛りの話花咲くクラス会

あけすけに装うセンス チェックされ

少し嘘混せて円満誉め言葉

宝塚市 飯西 ミサヲ

今日からを余生と思つてはや十年

潮時を心得友は越して行く

金婚式いやじゃいやじゃと手をつなぎ

何も無い元気だけだがうらやまれ

野田市 那賀島 雅子

秒針に背なを押される十二月

いっばいの夢見せられたカレンダー

しあわせは銀の匙でもすくえない

ストレスを固め燃えないゴミにする

日立市 加藤 権悟

糠床に母の美学が生きている

一本のペンが妥協をしたがらぬ

宅配の鯛は明石の貌で跳ね

いただいた馬齢ひとつにありがとう

宇部市 中田忠夫

静岡市 中西雅

早く来て見事な虹が消えるから
終着駅 里の空気はいい匂い
鈍行でひとり気ままな旅に出る
しあわせは腹の底から出る笑い

岐阜市 平野あずま

片言のトルコ語笑みを返される(トルコの旅)
シルクロード隊商宿で飲むビール

落日と語るトロイの戦など
六本の塔秋天に突きさささり

富山市 松見たえ

下手な字もメールに変えて新世紀
再会が人生変えて春を呼び

靴脱いで未練の風を追うピエロ
輪に入るあなたの側にいたいから

岡山市 国米きくゑ

腰痛をみちづれにして新世紀
風に舞う落ち葉の美学みる峠
濡れ落葉ボロの鎧が外せない
北風に背いた風の糸を巻く

岡山市 大森純子

古書店でわたしを呼んだ福寿草
遣伝子が大分足りない五七五
美意識をおき忘れたる未練かな
忘れものしたのが恋のプロローグ

ペン先のしゃべる言葉は消されない
足袋こはぜ軽い音する亡母の箱
山茶花のひかえめに散り芽を残し
津軽三味雪の乱舞を見てみたい

横浜市 芦田鈴美

幸福のすき間を神に狙われる
相談が行ったり来たりボール投げ
諦めることも覚えて背が伸びる
犬猿の二人から愚痴持ち込まれ

横浜市 福田由美子

寄せ鍋をつついてる間に仲なおり
ハンドルを信頼されるハイウエー
勧誘の電話に弱み見せぬ声
マイカーは置いて忘年会がある

横浜市 石原三郎

正直に馬鹿がつくよと言われても
八十を超え鈍行の旅をする
嫁がせてからは独りのにごり酒
色と金 欲があるから生きている

横浜市 荒井広和

保護色となって世間の風を避け
百態の賀状に友の温かさ
少子化と孤独アイボに狙われる
図書館で探すシニアの未来地図

横浜市 秋元和可

自慢する菜園がある収穫期

二十世紀のベストセラーに広辞苑

安心を買った保険が危機にある

図書館へベストセラーを読みに行く

横浜市 長島 亜希子

凡人でいるから過去は問われない

うちのよりいいのが粗大ゴミにある

惣菜の店で言い訳しあつてる

紅白の幕にゴタゴタ隠される

横浜市 吉田 裕峰

リフォームと余命を乗せてヤジロベエ

御歳暮の荷を開けながら中味当て

借景をほめて新居をほめ忘れ

さり気なく間に合つてます電話口

横浜市 生坂 サト子

券売機タッチの好みあるらしい

Dメールあの手この手と凌ぎ合い

成果より無事着陸を祈り出す(娘帰国)

柔軟な脳時差ほけをうつされる

横浜市 保田 絹子

七五三ママの衣裳も褒めておく

黙つても言つてもしこり残される

目に耳にニュースの刺戟呆けさせぬ

自叙伝の虚々実々に引き込まれ

川崎市 塩沢 秀

逆風も素直に受ける風見鶏

千匹の羊数えて朝を待つ

少し酒召され仲人無事に済み

カレンダーの余白がドラマ待つている

島根県 持田 多輝子

今ここで絡むと痛い矢がささる

どうせなら笑つて生きる白髪染め

シナリオのない人生をひた走る

スツとあく忍者のような自動ドア

島根県 武島 ちよえ

口も手も添えて貰つたおもてなし

無茶するな健康手帳に論される

お小遣いもらつて孫は風になり

後押しをしてくれる風向い風

島根県 松本 聖子

この先は雑草のように強く生き

慌てるなしつかりせよとコップ酒

うとうとと疲れを癒やす雨の音

古い日記あばかれました古い傷

松江市 小川 注湖

新世紀多めの願い初詣

家具揃え妻と眺めて嫁に出す

美容院妻はにこにこ化けてくる

まだ元氣介護保険は払つてる

出雲市 伊藤玲子

思いやる余裕が欲しい新世紀
忙中閑 今日湯舟にゆったりと

健脚に感謝師走の雨の中
あるがまま受入れ生きる一歩ずつ

鳥取県 山内芳江

気軽です失うものは何もない

父母に逢いたくなって目を閉じる
骨惜しみするから五体拗ねてくる

空財布覗き叩いて出た埃

鳥取県 山岡久枝

平凡なよい一年を締めくくり

二千年無事にさよならまた夢を
金婚にほっとひと息これからは

巳年なら蛇も可愛く置き物に

鳥取県 西沖彰雄

立ち止る事も大事と向い風

止まっても下るでないと風の声
預貯金を余命で割れば出る吐息

金だけでないが無ければ生きられぬ

鳥取県 澤裕子

脳天を揺さぶるような震度六

大空を画布に描きたいデカイ夢
念仏を唱えて心少し晴れ

やっとな手に攪んだ幸だ溺れまい

鳥取県 竹森富久江

譚言へ興味深さの耳が起き
消毒の過ぎた田畑が病んでいる

仰向いて諫めてくれる丸い背な
囲まれていたい余生は遠花火

鳥取県 鳥羽直市

言い分はあるが黙って走り抜く

軽率なことば白紙に戻せない
無職ですできる我慢はして暮らす

ふたりなら荒れる海峡渡り抜く

鳥取県 河本照子

力むほど説得力が弱くなる

寶石が女ごころをかき立てる
裏町のお世辞に乗って千鳥足

見るだけと言いつつカード持つて出る

鳥取県 田賀八千代

新世紀私も脱皮することに

はつきりと誓った愛がほつれ出す
たっぷりと時をかければ水なごみ

大変だ少年の樹が育たない

鳥取市 田村邦昭

約束を違えてひとり先に逝き

母の手が握った飯を忘れない
欲望をゴミと一緒に捨てました

記念日を忘れて妻に疑われ

鳥取市 山口 千代子

此の一年静かに想う長い夜

忘却を防ぐメモ帳老いのペン

晴れた日は心もはずむ洗濯機

年老いて垂れた乳房が淋しそう

鳥取市 田中 瞳子

一服のお茶が心に灯をともす

おせちよりママが張り切るクリスマス

耳すまし地球の嘆き聞いている

ブランドで包んだ身にも木枯らしが

鳥取市 岡田 信恵

木枯らしへ冬の準備を急がされ

折り紙は角が大切妥協せず

ライバルも燃えているから励み合い

優柔不断チャンスも去っていったまま

倉吉市 牧野 芳光

まっすぐな人でポツキリすぐ折れる

まっすぐな道をまっすぐ歩けない

垂直に立っても少し歪んでる

直線を引いて味気のない花野

香川県 松村 輝夫

真実は一つ今だに軋む義理

二十一世紀途中下車はまだ決めず

健康は自分が守るローカル線

足腰を鍛えて寿命引き延ばす

高知県 桑名 孝雄

大統領選なぜ算盤にしておかぬ

打首も切腹もあるこの不況

礼服の新調もとが取れるまで

横顔が好きで止り木決めてある

高知県 百田 幸

正論を口止めされて風化する

もう歳だなんて言うのは嫌いです

家計簿の吐息も知らず粗大ごみ

底辺の生活で心豊かなり

今治市 渡邊 伊津志

歩き方教えてくれる嫁ぎ先

感激をすることはかり聴く妊婦

担ぎ手は全員茶髪村祭

哲学に抵抗出来ず散る紅葉

今治市 野村 清美

夜の爪切つて孤独がつきまとう

騙されて造花に止まる冬の蝶

ほら吹き笛にまんまと踊らされ

枯落葉過去はどうあれ眠りたい

松山市 高橋 宏臣

乱歩読む罨にはまって午前二時

天気良し水と油がよく混じる

大空に吸わせた今日のわだかまり

はつらつと歩こう好きな道だから

重病の友励まして寒い帰途

尾宮弘治

夫より猫が好きです落葉の季

柄の取れた鍋を捨てずにまだ使い

川西市 西内朋月

介護でも恥ずかしいです女です

船乗りに夢を描いた少年期
忘年会三度も四度も行くつもり

尼崎市 河津正治

篠山市 倉垣恵美

未だ癒えぬ紅葉の季節背に重く

会心の笑顔ゴールが近くなり

念入りな化粧くすぐるドレッサー

尼崎市 軸丸勝巳

ありがとう七十五歳になりました

温暖化風情を壊す大根焼き

新世紀正装で待つ初日の出

子報みて今夜は鍋と決めて出る

風の音瀬音聞きたく里帰り
千羽目の鶴折り終えて秋日和

神戸市 木村忠義

姫路市 服部一典

まだ役に立ってるらしい歳暮来る

にらめっこ仁王のような顔になる

アドバイスしたら僕よりうまくなり

逆境が自慢話に変る酒
フライドが取れぬ男が冬籠もり
同じこと二度と出来ない時差がある

神戸市 山口光久

兵庫県 黒崎美紗子

新世紀迎える酒に夢を追う

ルミナリエ街も私も勇気わく

どうであれ妻の一生絵にもなる

いつくるか福祉の話気にかかる
歯の抜けた年を知らせる鏡みる
寒さよけつくり花咲く新芽待つ

神戸市 船津とみ子

京都市 三宅満子

新世紀どこも倒れる事無しに

神戸市民を七十五年元気なり

お母さんは三十七で二月死ぬ

菊薫る小春日和に師の句会
もう天寿不足はないが菓飲む
どんな型にもなります私巳年です

八十の母丹精の静物画

八幡市 糸野和俊

母の手に傘寿を祝う腕時計

迷い道許す女房の太っ腹

和歌山市 永廣昇太郎

三百円で庭だけ見せるもみじ寺

学校へ育児の躰回す親

ネオン街未練心の手酌酒

奈良県 江波正純

年始客おとこ料理で迎えつ

子育ての使命を終えて今が春

和歌山市 吉田比佐子

年の瀬に駅で小さな夢を買う

曖昧な相槌打って世を渡る

ミレニアム地球の日記読み返す

表札に妻の旧姓並んでる

奈良県 古手川光

老い二人塾のチラシが投げ込まれ

手を握り夫婦のままで新世紀

和歌山市 土屋起世子

通天閣も冷たく照らすホームレス

青い実でつなぎ続ける年賀状

紅白の歌手も一緒に歳をとり

介護するピアス茶髪が光ってる

橿原市 西本保夫

杉の樹の間の視野で何を見る

飴玉の旅は道連れ情があり

堺市 田中紫

山村に住んで田畑せまい視野

ヒヤヒヤとバス曲り行く紅葉狩り

この視野で広い心が持てるのか

里帰り昔話を盛ってお茶

生駒市 飛永ふりこ

三日月にこだわり事を論される

渋滞で車線変更また変更

堺市 大橋錦

さわやかな空が私を包み込む

人は皆苦勞の中に幸を見る

のびのびと弾む夢ある子供の絵

わたくしに作ってくれた掘りごたつ

和歌山市 松尾和香

ロボットが介護の時を待っている

絵日記の太陽でっかい夢がある

八尾市 與田明

母の手にいつでも残る飴ひとつ

好きやねん夢追い酒と宝くじ

椎の実を拾った山に家が建ち

整形の腰が男の舵をとる

八尾市 田中トシエ

ジイさまは元気で今日も放し飼いの
エスカレーター喜怒哀楽がすれ違つ

正直が取り柄で青い鳥逃し

和泉市 小坂凡英

うってつけよ偏屈男演るのなら

無頓着知らねば腹の立つお人

小中高大と鮮度の高い順

泉佐野市 大工静子

しくじりを言い返されて貝となる

十念を称え浮ぶは友の顔

若き日の亡夫の浮気今笑う

岸和田市 亀井皎月

信号を待つて意気込み消えて行く

贅沢は三食昼寝酒がつき

古希も過ぎ喜寿に向かつて老い加速

岸和田市 木村正剛

無精髭剃らなくてすむ新世紀

それとなく探りを入れる妻の酌

ゆっくりと沈む夕陽に明日もらう

豊中市 みきわきみ

死語となる試行錯誤の余裕なし

眺めてるだけのテレビの円相場

株上昇半年も先当てる

豊中市 江見清

枯れ草も燃える力を秘めている
狭くてもお尻でひろげ座ります

遠い日のいいことだけを覚えとこ

大東市 井上すみれ

年金と付き合いながら生きてます

ともかくも二十一世紀生きていき

平凡と言う仕合せに感謝して

羽曳野市 森田四三郎

バーゲンに目の色変えて傘忘れ

ホラ吹きの話は五割引きで訊き

飴よりもタコ焼がよい七五三

柏原市 永浜加津子

明け初めて夜半の迷いふつきれる

年の瀬に何はともあれ恙なく

晩秋の駅に一人は淋しすぎ

摂津市 望月遊美

明治からドンドンヘドロ溜まりけり

将将たらずとも臣臣たらざるべからずや

金持ちに行政任せておれるかよ

寝屋川市 岡本勲

排気ガス世界遺産も苦しそう

これからも各駅停車で行く余生

世界旅行地図にロマンの点と線

見上げてゐる鎮魂の祈りルミナリエ
本心を見せぬ女のポニーテール
風吹けば女の胸の通り道

吹田市 後藤 志津香
高槻市 執行 稲子

七つボタン握った温み忘れない
いらち癖先輩だから見逃そう
自分史の半ばの挫折悔やまれる

高槻市 大崎 侑子

アナクロの女闘士も故国恋し
見るだけと心に決めて展示会
大鍋の大根炊き食べ無事願う

高槻市 西谷 治三郎

通院のお陰で口は達者です
運動もせんのにいつも運動靴
どないです元気で通院しています

河内長野市 杉谷 カズエ

松の内輝いている年女
ローンクを上げて余裕のある炎
家族にも見せて喜ぶ吉のくじ

枚方市 二宮 紫鳳

親の目に眩しく写る子の成長
世紀末我が家は何か乗り切れた
イルミネーション不況忘れの千鳥足

母の手の皺がとやかく言わせない
パソコン慣れけれど人間には慣れず
仙人になりたいけれど浮世好き

枚方市 安達 忠央

僕もするうたげのあとの鍋洗い
鍋の底はい上がるか上がれぬか
結局は酒の肴になりにゆく

大阪市 中村 忠敬

ぼけたふりしたがほんとにぼけてきた
温泉に入って入浴剤を入れ
危険物取扱主任わが亭主

大阪市 星野 きらり

黄泉からのお招きなんで断らぬ(友の計に)
世紀末越えたら据わる肝っ玉
コスモスに囲まれ好きと口づける

大阪市 熊代 菜月

惚れたことあった夫の高いびき
あれこれと突っぱっている欲の皮
公園の青いテントに師走風

大阪市 中村 叡子

マスコミの驕り世相を悪くする
ハイさいなら師は飄飄と幽界へ
新世紀皇居参賀をいたします

大阪市 亀井円女

深い森何か伝説ありそうだ

腐つても鯛は私という自信

婦唱夫随を笑つて許す太っ腹

大阪市 大川道子

腹話術本音人形にしゃべらせる

雪印ぼちぼち売場へお目見えか

役目終え花を咲かせている火鉢

大阪市 岩崎公誠

餌いらぬ電脳犬が繁殖し

人生の軌道がきしむ怖い音

あぜ道に折れ釘の古い生きている

大阪府 東文江

お見舞のメロン元気な者がたべ

ふるさとの橋のむこうに父母の墓

顔よりも心きれいな彼つれて

千葉県 大川晚翠

国会の見学終えて年の暮れ

不景気な祭り太鼓は五割引き

働いた炬燵に入り缶ビール

青森県 福士トキ

母へ書く年賀一枚消えました

ちらちらと降る初雪を舌で受け

祖母からの教え忘れず今がある

岡山市 清水金太郎

秒針のような一生で終りそう

合格の知らせまつてる祝膳

此の世からキナ臭い煙無くしよう

倉敷市 家守政子

年賀から一步はみ出る巳の尻尾

夜なべする鮭と鱈の握り飯

地球上同じことなら街に住む

倉敷市 撰喜子

よれよれになるまで着ない子ども服

年賀状一年分の思い書く

呆け防止炊事洗濯手抜きせず

倉敷市 森本文子

ひたひたと前後左右を攻める年

もう少しこのままで良い命の火

神様も許してくれる震度一

竹原市 正畑半覚

遍路バス老人力の花盛り

遍路旅まさかの雨が止む不思議

バスツアー隣の席はいつも妻

滋賀県 中宗明

週刊誌吊り広告にだまされる

ひそひそと噂気にする近所の目

信じてた娘 ガン黒なやむ親

世論より子の目が怖い年になり
春うらら浮世離れの夫婦舟
世も末と嘆く祖父にも新世紀

横浜市 鈴 江 純 子

ロボットの介護があるさ新世紀
欲果てぬ生きてる証拠くじを買う
丹精もせずにはどよく菊が咲き

横浜市 伊 藤 ふ み

蛇皮のベルトを締めて初詣で
大型店日本列島合戦か
潮騒が二人の世界包み込む

横浜市 北 沢 街 湖

コンビニへおふくろの味買いにいく
すんなりと許して指輪一つ増え
わんぱくは砂も埃も持ち帰り

横浜市 山 梨 雅 子

耳当てて水の流れを樵に聞く
涙する同じ子を持つスキー事故
羽子板市 異国語まじる賑やかさ

東京都 井 上 つよし

踏切で犬も足踏みする師走
耳よりな噂仕入れた控え室
年明けてからが本音の賀状書き

妻病んでこころを抜ける隙間風
生涯をわが福耳に騙される
二千円札やっと思えるお年玉

北九州市 岡 田 幸 生

生きて居る証泣いたり笑ったり
旅心一寸くすぐる美人の湯
ふる里へ飛んで行きたいちぎれ雲

香川県 伊 勢 八重子

百円玉数えて夫婦趣味があい
つまずいた小石をけてまた転び
ライバルの毒矢がねらう青い鳥

高知県 近 森 功

明日から歩く運動靴を買おう
ポーナスの中に見慣れぬ二千円
土壇場で受身の技が生きてくる

愛媛県 宮 本 末 子

逃げる雲追う雲落ちる滝の音
達者ではないが賀状は筆で書く
市況見るみかんに命かけて来て

宇部市 高 山 清 子

不用意な言葉が招く四面楚歌
言い過ぎが喉につかえて寝つかれず
チャンス無く残り火抱いたままで老い

島根県 多々納 テル子

無理せずに今日一日の積木積む

艶話 肩の力をぬいて聞く

亀で待つころばぬ先の世紀末

島根県 菅田 かつ子

トンネルを抜けるとあたり雪景色

ポケットで転がっている小さい夢

うっかりと咲いてタンポポ震えてる

松江市 松浦 登志子

お笑いで納め笑いで新世紀

起きぬけに夫婦無言で白湯を飲む

富士りんご母采の目に喜寿の宴

出雲市 川島 和歌子

いくつもの別れもあつた年の内

やんわりと搦き立ての餅母ともむ

里の秋軒場に吊す柿のれん

出雲市 加藤 スズコ

燃えつきて夢を残して散つた花

朝一番日の丸揚げて深呼吸

善悪の死角の道にあるテレビ

出雲市 梅 ミツエ

青い空気持よさそに鳥も啼く

秋の月澄んで何かを語りかけ

ざくろ割れ真つ赤に染まつた秋の色

益田市 岡田 たけを

わたしが誰かわからない日がかぬように

セクハラになるから口も手も出せぬ

手押し車で晩酌の酒買いにゆく

安来市 原 煩惱児

有珠山の怒りは続くミレニアム

幼児もカメラにポーズ先住民

北の旅終りを告げる蟹料理

鳥取市 近藤 秋星

新世紀いのちの讃歌うたおうよ

時来れば眠れる獅子も目を覚ます

生きてれば母も巳の年九十五

米子市 森 協麗

乗り越えて行かねばならぬこの先も

虹の橋渡つただろ病んだ亡母

梯子酒うちがだんだん遠くなる

鳥取市 西尾 敬之介

法華経を唱えて罪がなえてゆく

二十世紀曆一枚痛ましく

干し柿をもう食い頃ともいっている

鳥取市 宮脇 道子

煩惱が老いの道すじ角を出す

落葉たき心に残る歌に生き

戦争はせんと誓う新世紀

新世紀平和の帽子かぶりたい
名月がやつと顔見せダンゴ食べ
震度四念仏唱え時を待つ

鳥取市 河田 のり代

遊びなら重い荷物も気にならず
単線のはるか彼方にふるさことが
どん底でその一言が灯を点す

鳥取市 福島 庸二

古い家 福が来そうな黒光り
今世紀石ころ道がなつかしい
肩パッドなしの洋服良くなじむ

鳥取市 谷岡 清子

金メダルさあこれからをどう生きる
DNA鑑定幸も不幸も容赦なく
鎧着て石橋叩きコケている

倉吉市 猪川 由美子

おはようと朝一番のメッセージ
老いてなお夢を託そう新世紀
金婚は叶わぬ夢の独り者

倉吉市 大森 孝恵

シルバー貼り左右確認追い越され
落葉樹みの虫だけが寒空に
日あたりを選んで花を移動させ

倉吉市 西脇 日出子

孫が画くわたしのホクロ positioning
年金を貰う日少し頼ゆるむ
佃煮がチョッピリ欲しい嫁の味

倉吉市 牧田 みち子

沢庵を持ち寄りお茶を汲みかわす
あやとりで笑いがたえぬいろり端
寒干の大根秘伝つたえまず

鳥取県 藤山 弘子

新世紀開けるカーテンからやかに
新世紀行けるとこまででかい夢
ストレスを流す買物して帰る

鳥取県 橋谷 静江

ストレスも忘れる旨さビール飲む
田圃から聞えるなまり美しい
仕舞ってる国旗を使う時がない

鳥取県 鳥羽 玲子

折り曲げた名刺反応大きすぎ
貝になるつもり席でまたしゃべる
思春期の息子ときどき貝になる

鳥取県 山下 節子

仮縫いで噂が飛んで走り出す
また逢おう火種を埋めて握手する
背の曲る妻に情けの念燃ゆる

鳥取県 平井 栄翁

三重県 尾崎 勤
似た者で妻も豚羹買って来る
どんぐりが落ちる小さくない響き

唐津市 岩崎 實

葉飲むかわりにお酒少し呑み
神経痛暗示で治療しめくくり

静岡市 増田 扶美

子雀が揃う園児の列乱す
寝返れば油の切れた腰軋む

鳥取県 岡嶋 金子

世の中は総理に視線的になる
此の辞典長くつき合い角がとれ

八尾市 鷲見 章

秋の花残つて深まる冬近し
秋深しテレビで散歩落葉ふむ

八尾市 高橋 明子

鈴なりの柿多くて過疎の家
嗚呼人生二度もあつてはたまらない

大阪府 平井 露芳

水泳に飽きたか亀の日向ぼこ
窓開けて家も一緒に深呼吸

大阪府 野田 栄呼

椀のふた開けて味わう玉手箱
意地悪をするよりされて強くなる

なにわ柳壇今年の10秀

— 12年12月29日発表 —

(太字は本社同人)

川柳塔社名譽主幹 橘高 薫風選

最優秀句
避難して船の上から見るわが家

村上ミツ子

秀句

底冷えのなにわにジャンヌ・ダルク立つ

家族への郷愁がある小津映画

熱演の裏に悲しい私生活

日記書く自分自身へ手紙かも

初孫をふわつと抱いた柔らかさ

二度勝つた話は亀に聞いてない

何なさる先生でしよう上の座は

アイデアを生むひとときの無駄話

片隅に住んで私も芦屋族

番傘川柳本社幹事長 田中 新一選

最優秀句

この顔でいいこの顔で生きてきた

秀句

誰か来る淡き思いをいくつ消す

叱られてから先生が好きになる

甘えさせ叱ってくれる大きな手

山一つ越えて命にあこがれる

ライバルに誘われてから影がない

父の職継ぐと大きく見える父

信じ合う心無防にして静か

不器用で自分の色を崩せない

迷い晴れ柿の色つきひとしおに

鳴澤喜八郎

久井 富子

高岡 健太

品川 俊郎

吉田万千子

羽森千恵子

柴本 太郎

椎江 富子

吉道あかね

堀 良江

愛染帖

波多野五楽庵選

海岸に佇って輪廻をたぐり寄せ

四桑駈市 吉岡 修

仏様この世のごときは半眼で
灯籠のあるお屋敷の隣です

西宮市 牧瀨富喜子

新世紀編み込む色を選っている
去年見た冬の景色が窓へ来る

倉吉市 野口 節子

底辺を這った日記が重すぎる
冬のバラ見栄も誇りも捨てました

京都市 都倉 求芽

円周の内と外とに温度差が
涙の色をいろいろ変える女です

唐津市 田口 虹汀

冬のベッドに点滴の音を聞き
小走りのナースの足に聞く師走

羽曳野市 酒井 一壺

切り捨てた尻尾に足をすくわれる
何となくすつきりしない妥協案

鳥取県 田村きみ子

木の実コロコロわたくしに杖を下さいな
米子市 澤田 千春

地震から柱時計が鳴り出した
小さくとも輪の真ん中で生きている

和歌山市 楠見 童子

トンネルを抜ける汽笛を鳴らさねば
高槻市 生田 義一

ら抜き語が飛びかう午後の喫茶店

弘前市 高瀬 霜石
回り道だとは限らぬ回り道

愛媛県 黒田 茂代
ぬく過ぎて講義が聞こえなくなった

羽曳野市 徳山みつこ
白菜がうまくつかって冬の陣

和歌山市 福井 桂香
海鳴りが響くおんなの樹が騒ぐ

三田市 北野 哲男
この人が私に電気走らせる

米子市 政岡日枝子
刻に追われてゆつくり雪と遊べない

米子市 野坂 なみ
月に照らされると懺悔したくなる

松江市 川本 畔
白椿身内の白を主張する

伊丹市 櫻谷 郁子
自分史に拭いて消えない疵の跡

和歌山市 古久保和子
グラスの底にいつも住んでる淋しがり

尼崎市 田辺 鹿太
熱い湯につかり前非を悔いている

富山市 舟渡 杏花
美学哲学切れそな縄にぶらさげて

海南市 三宅 保州
売約済名まで書くことないだろう

鳥取県 西原 艶子
姑が居る気がする姑の桐箆笥

堺市 志田 千代
熟柿落ち古里の縁切れました

大和高田市 鍛原 千里
冬の絵は女ひとりの縮図かも
風の輪のまん中にある花紋

削除キーふれないように生きていく
鳥取市 徳田ひろこ

異分子も居るはず丸い絵にしよう
冬さなか胃薬ばかり減っていく

倉吉市 牧野 芳光
何もかも無くて円い眼となった
結論を出すまで米を研いでいる

黒石市 千葉 風樹
働けるああ心音のいいリズム
ラストダンスへ天気占う下駄を蹴る

東京都 播本 充子
根回しの向こうに浮かぶシルエツト
忘れてと消えた女を忘れない

岡山県 山本 玉恵
今逢えば何から語り出すだろう
人間不信風は横からうしろから

鳥取県 小西 雄々
人の世の絆学んだ糸電話

黒白をすんなり言えず媚びて冬
尼崎市 長浜 澄子

東京駅プラットホーム抜けただけ
和歌山市 福本 英子

こだわってみても俺の子蛙の子
唐津市 樋口 輝夫

接木したバラにも棘がついている
香川県 木村あきら

一人乗る生命線はまだ黒字
香川県 松村 輝夫

冬だからやさしい言葉待つてます
横浜市 近藤 道子

休日の雨に添い寝をしてもらう
横浜市 芦田 鈴美

あくまでも白にこだわる雪虫
弘前市 斉藤 劼

かたつむり夫婦の列はよくゆがむ
倉敷市 小野 克枝

ジョーカーも独り暮らしに慣れてくる
和歌山市 川上 大輪

ポケットの拳が味方してくれず
松原市 小池しげお

君よりも信用できる借用书
枚方市 海老池 洋

もう一人の私にいつも負けている
大阪市 一本 勇太

開けて見せたい胸で言葉を選っている
大阪市 本間満津子

止めとこう話せば長くなる話
鳥取県 岩崎みさ江

いずれ皆ゆくのだ騒ぐことはない
八尾市 村上 剛治

アスファルト祭りの下駄の悲しそう
奈良県 米田 恭昌

濃淡があつて世間がやわらかい
鳥取市 録沢 風花

登り口いつつかいつかの繩梯子
弘前市 宮崎ヒサ子

一步引く決意が出来ぬ太い真
尼崎市 春城武庫坊

とべない鶴をたくさん折つて冬になる
八尾市 高橋 夕花

師走風ひとり世帯をかきまわす
尼崎市 内田美也子

改めて心の地図を書きかえる
米子市 光井 玲子

灰になるまで外聞に気を遣い
高槻市 乙倉 武史

味方からさりげなく来るプーマラン
東京都 後藤 早智

はずしたり掛けたりボタン忙しい
砂川市 大橋 政良

大物を狙い討ち死にしたらしい
鳥取市 植田 一京

無彩色の町で古本屋を探す
寝屋川市 森 茜

炊き出しの飯に連帯感がある
弘前市 高橋 岳水

八十年交換キーが動かない
弘前市 一戸 ツネ

顔もいい心もまるいのに独居
鳥取県 吉田孔美子

後ろ髪引かれて千切れそうになる
鳥取市 武田 帆雀

十二月八日を誰も語らない
富田林市 藤田 泰子

いち枚の貝から生まれ出たふたり
米子市 林 瑞枝

故郷のあたりへいつも陽が落ちる
横浜市 菱田 満秋

句に綴る自分史なんと優雅なる
亀岡市 井上 森生

妬まれて座り心地のわるい椅子
寝屋川市 岸野あやめ

上首尾のあとに待つた落とし穴
横浜市 保田 絹子

情の流れを女は直ぐに変えられぬ
八尾市 吉村 一風

心にもない追従に苦笑い
羽曳野市 永田 章司

生きてさえいれればと思う事にする
寝屋川市 籠島 恵子

安全地帯にいるから風は無味無臭
吹田市 石原 靖巳

弔問にスケジュール割く十二月
豊中市 田中 正坊

乱気流の中で終りのないドラマ
高槻市 左右田泰雄

場所取りは俺に任せろ先に逝く
唐津市 山門 幸夫

唐津市 仁部 四郎
イフと言う語法で明日を読んでみる

養屋川市 大田とし子
京料理うちのお茄子と同じ色

今治市 野村 清美
裏切られ心の鍵をかけ直す

羽曳野市 福田 満州
自戒していたのにやはりしゃべり過ぎ

鳥取市 岸本 宏章
生き下手な男を叱る冬的大海

横浜市 鈴江 純子
温暖化四季の約束かき乱す

鳥取市 夏目 健一
人間の欲が冬眠などさせぬ

愛媛県 中居 善信
起承転結笑い袋がぶつり切れ

青森県 漆戸凡々子
健保険無駄なく使い生き続け

青森県 西谷 大吾
吹雪かれて出稼ぎが発つ無人駅

藤井寺市 中島 志洋
節分の鬼より怖い肩叩き

和泉市 西岡 洛酔
怪しさを隠すドラマの冬木立

米子市 鷺見 正子
すぐ出せば三行半で済むお札

富田林市 大橋 鐘造
大きい眼をあけて来た道ふり返る

出雲市 石倉美佐子
頑丈な人差し指に泣かされる

高知県 桑名 孝雄
切れ味はないが刃こぼれしない僕

弘前市 福士 慕情
葉が落ちて木霊は森へ帰らない

日立市 加藤 権悟
象の目の奥に優しい海がある

弘前市 櫻庭 順風
春には春が秋には秋がある薄暮

横浜市 清水 潮華
マニキュアの白には抵抗感がある

和歌山市 吉村さち子
電池切れして謙虚さを取り戻す

愛知県 早川 盛夫
さて何をしよう今日から定年日

貝塚市 池田寿美子
二十一世紀見えないものを追いかける

泉佐野市 稲葉 洋
ミニ注連縄一つ位のめでたさで

米子市 青戸 田鶴
息切れがしても約束果たしたい

西宮市 奥田みつ子
木枯らしに心閉ざせば壁ばかり

鳥取市 春木圭一郎
少しずつ出せそう僕も枯れた味

枚方市 前 たもつ
それとなく隅に目をやる怖い人

鳥取市 岸本 孝子
場を踏んだ数だけ持っている自信

東大阪市 北村 賢子
三猿になるしか仕方ない世相

美祿市 安平次弘道
ピリオドを打つから話ややこしい

堺市 和田つづや
言い訳に困り打出の小槌振る

松原市 玉置 重人
浮気性ジャンルの違う本ばかり

大阪府 澤田 和重
思い出し笑いを妻に覗かれる

鳥取県 乾 隆風
捨て石になる役ならば推してやる

鳥取県 土橋 螢
末法の世は雪向こう岸は春

大和郡山市 坊農 柳弘
無理しなや無理をしなやと雪ダルマ

大阪市 小林 周信
ゆつくりと食べると味のない茶漬

倉吉市 米田 幸子
合格発表までは鉛筆とがらせる

今治市 塩路よしみ
踊ってはもらえぬ笛を吹く孤独

大阪市 三浦千津子
健康をチェックされてる冬の景

岡山県 小林 妻子
だらしない大人捌けぬ世紀末

和歌山県 村中 悦男
高齢の今となつては許す過去

鳥取県 林 露杖
老後とはそれほど楽なものでない

札幌市 三浦 強一
最北の岬に立てば雪まみれ

—水煙抄

秀句鑑賞

—1月号から

金村青湖

訪ねれば風は知つてゐるかも知れぬ

油断すると男結びがとけてゐる

越智青園

男結びとは、解けない結びの代名詞ですが、油断するとそれさえも解けるといふ。一度結んだ男の誓いさえも信じられない現代社会へのアラームベルでもありませんか。

見てるだけ落ちるがままの震度六

小塩智加恵

震度五のあれから喧嘩しなくなり

猪森スミエ

鳥取県西部地震の体験をそれぞれ詠まれたものですが、前句は数十秒の無力な人間の恐怖の極みを、後句は突然の不幸を家族の連帯感に変えて生きる強さを、それぞれ無駄のないタッチで詠まれています。

その他震災の句もありましたが、割愛しました。今なお余震に怯え、寒気に向かつて復

旧を待たれる皆さんにお見舞い申し上げます。もう一人私がいたら喧嘩する

牧野芳光

自らの長所も短所も知つての句。下五にユ一モアさえも感じます。リズム感もよく、平明さも親しみが持てます。

たまに来る嫁はコロコロよく笑う

大川道子

姑さんの善意の表現とすべきか、ひがみとすべきか、後者の方が川柳としてはよいようにだ。お嫁さんは精一杯の敬意だが、姑さんには空笑いにしか響かない。そんな複雑な心理の葛藤と見るのは私の僻み根性でしょうか。秋の夜に声届きそう亡夫の星

平井幸枝

町の騒音もいつしか消えて、秋の夜の静寂が帰つて来たころ星も瞬き、今夜も亡夫の星は何も語りかけてはくれない。「星は想念の世界だから合掌の心だけは届く」とは高僧の弁である。さらりと詠まれてはいるが、追慕の念が連綿と内在しており、大人の川柳であると言つておこつ。[亡夫星眷恋]の詩か。

種やかな時代でしたね竹とんぼ

前田忠子

呼びかけの形式で懐旧の念が古き良き時代を呼び覚ましてゐる。余談は入れず、二三回

読み返せば、たっぷり情緒にひたれます。他人さんだつたらけなしたりしない

中澤伽羅

俗言に「可愛けりやこそ愚痴も言う」といふのがある。夫婦だから、家族だから言える事も、言わねばならない事もある。多少のぞんざいな言葉も、甘えも許されよ。日常茶飯事の事柄をさりげなくとらえて句にする。これも川柳の楽しさではないでしょうか。

絵心をやと掴んだ墨の色

持田多輝子

墨の濃淡、筆致の強弱で絵心が表現出来たら本物、更に構図の配置で、空白の美にまで及べばプロ絵師になります。頑張つて下さい。

コスモスも日々草も咲き終わる

多々納テル子

コスモスは風に揺れながらも、どこかの知事さんのように、しなやかな強さを、日々草は暑い日差しに耐えながらも清楚で可憐な花を、それぞれの季を生きている。花に我が人生をなぞらえて夫婦像を見ていると言えは早計でしょうか。

来世まで一緒に枯れてゆく夫婦

国米きくゑ

人間に至福の願いが叶うとしたら、私も句のように借老同穴を願いたい。誰もが抱く理

鳥本

泰

東野大八

〔平成12年9月19日午前3時33分、長らく自宅療養中だった鳥本泰さんが心筋梗塞のため逝去された。泰さんはかなり柳歴の古い方で、長い間、時の川柳の同人として活躍して頂いた。〕

泰さんは汪洋と言う表現がびつたりの人で、ちよと大人(たいじん)の風格があった。口数は少ないが、時折もらすジョークで、よくみんなを笑わせたものである。私の一番印象に残っているのは、阪神大震災で、全壊というダメージを受け、九死に一生を得たという状態の中で、なおひるまずに作句を続けていたという泰さんの作家魂である。それには非常に感動した。

天命とは言いながら、また神戸柳界から惜しい人を失ってしまった。(中略)

法名 法皇院釋淨泰 行年八十四(爽介)

「泰さん、よくぞ今回も御参加下さいましてありがとう」

大陸川柳同窓会へは、よく顔を出して貰った。飄々として気取らぬこのジョーク居士とウマが合うのも同じ齢のせいかもしれない。大正5年8月15日生れとあるから、筆者とは二つちがいがい。それに8月15日生まれというのも面白い。

「終戦記念日の生まれとはオツなもんだな。日本全国でみんな忘れることのない記念日だし、終戦月日が何よりだ」と顔を合わせるといつもそんな話をかならずやり合う仲である。同窓会も最後となった高野山下のさる料亭の宴会には、なんと彼は酋長の娘の仮装で、得意のフラダンスを披露した。頭にピラピラをつけ、体はこの仲居の長襦袢を裏返しにしたのを着飾り、両腕をむき出しにしてさか

んに腰を振る面白さはまた格別で、筆者は會長格といふこともあってわざわざコップ酒を彼に運び、戯れのフラダンスに興を添えたものである。

「彼の経歴は、川西航空経営の工業学校を出て、明和工業に勤務、興和工業プレス部品製造ラインの監督をもって65歳で定年退職した。古い、ふあうすと、同人で、昭和57年度には、ふあうすと賞」を獲得している。」(以上は同社同人前川千津子さん報)

一九九五年一月十七日午前五時四十六分、マグニチュード七・二の激震が約二十秒間も続いた。このため神戸を中心に六千人以上の死者を出し、神戸市では二十万棟の建物が倒壊、または灰燼に帰した。まさにそれは未曾有の都市直下型地震であった。

芦屋市津和町11の彼の家はひとり暮らしもなく倒壊したが、見舞の電話が不通のため手紙を出したところ、二月五日付のハガキが舞い込んできた。彼の筆跡は次のとおり。

「早速のお見舞いありがとうございました。壊れた家の隙間から這い出し、やっと助かりましたが、半径50メートルの場所です5名の生き埋めがあった事を知らされ、ぞっとしています。いろいろ心配をおかけしました。有り難うございます。2月5日 芦屋市南京町9

の29の四〇五号 鳥本祥二郎方 鳥本泰

よくやつてきた青色刷りの彼の専用のハガキで、返答に困って 直角に曲がる」とゴチックで刷り込んだあの刷り物である。文字が平然と澄まし込んでいますのでまず安心した。

だが、とうとうそれつきり達わずじまいで、彼は逝つてしまった。

「頼らない人月を見ていま帰り

川柳を始めたころ、紋太先生に抜いていた句がこれである。これが川柳に病みついた八年前の私の作品らしいものである。

それまで川柳にぜんぜん興味のなかつた私は、ひまつぶしという訳でもなかつたが、毎日新聞、うそくらぶの投稿を思いたち、五十数回入選、賞品をせしめたものである。

ちょうどこのころ戦場川柳を河合すすむ先生が指導されるようになり、うそくらぶから川柳へ転向、今日に至つて入るものである。いまこうして川柳作家の仲間入りができてうまくならないのにあきれている。なかなか自分の殻は破れないのかも知れない。

今回、先輩室田千尋氏と共に、ふあうすとの人々として言也・不二也・天樹の諸先生の推薦を得て、再出発することになり、先輩を追い抜く心構えで頑張りたいと思いますので

よろしくお願い申しあげます」鳥本泰(西宮)

「私の作品」として、その口上の上欄に十六句並んでいる。その中から十句を拝借してお目かけよう。

期待されればなしで今日を生き

少年の心を探る罪を恥じ

エゴイストひとり南京豆を食べ

馬の脚そやけど意地があるという

厚化粧とれば道化の深いしわ

どんぐりころころ砂丘にころぶ夢

予言者のそれは小さな嘘であり

日雇いの身にセスチユアも忘れたり

六甲の緑へ愛をうちあける

屈辱を結んだ唇が堪えている

以上は昭和40年10月号「ふあうすと」誌で、その裏表紙に新同人紹介として室田千尋と肩を並べて鳥本泰のゴチックによる名がある。その紹介文には二人とも「甲南川柳教室」出身とあるが、詳しくはわからない。

これからすると彼はかなり古い川柳人であることがわかるが、あまり柳論はひけらかすのが得手ではないらしく、同誌上にはいくら探してもそれらしい文章は見当たらない。ジヨークを地で行くインテリ青年といったタイプで生真面目な顔付でよく面白いことを口に

「なんで大陸同窓会へよく来るんだ」

「みんなポーとしていて、どこか大陸ムードのオーヨーさんがなんともいえんからだよ」

「ふーん、そういえばみんなどこか抜けとるみたいだな」

「まあ、そんなところだが、シンはみんなしつかりしとる」

てなことを高野山の長い道々、話したことをよく覚えていた。うそくらぶに五十数回も入選したというそのお人柄が地でいつているらしいとみてとつていたこちら側の思いがそのままだと考えればよろしい。

「中河与一が先のとがったイタリアンシューズのことを書いていたが、アップツーデーを必ずしも尊しとはしないが、風俗時評に類する文には自らタイミンクというものがある。若い連中がどう読むかは別として、中河与一の老いを哀れむという気持ちがあわいな。大陸でのむかし話も結構だが、こんな話をトクトクとするようでは大陸人とはいえないなあ。青竜刀親分にしても時折、こんな感じを持つのは不敬だろうかねえ」

といった言葉も記憶にある。彼にとつては「人の老い」が哀れとみえたらしい。

▼次号は「菊地 盛三」

誹風柳多留二四篇研究 26

山田昭夫・橋本秀信
小栗清吾・伊吹和男
大野秀二・粕谷長生

清 博美・佐藤 要人

199 をしいかな息子女房にこびりつき

山田 文字通りの句、大麥結構だと思ふのだが……。

女房に付キにツいてるたわけもの 一八四

どいハでもくハつツいて出るばかりいしゆ 一五九

女房に惚れて家内安全 武九六

橋本 贊。今でも意気がる仲間同士では那掬することがある。

佐藤 贊。遊興の仲間に入らないことが、「惜シらハこと」なのである。

200 芝中の穴掘どもをかりあつめ

山田 赤穂義士、芝高輪泉岳寺に葬られるが、

多人数につき、周辺の穴掘人夫婦動員。

泉岳寺水道普請のやうに掘

穴ほりも其日八肩がぬけるやう

其あした穴ほり肩へ灸をすへ

橋本 贊。「翌元禄十六年二月四日切腹」く

らいは入れたほうがよいと思ふ。

清・佐藤 贊。

201 からつ文斗りじやと見ちやひんねじり

山田 空文は、中身の無い、虚実ないませの遊女からの手紙。

「空々しい、嘘ばかりの手紙だ」と振り捨てた、というのだが、昔から「遊女の誠と晦

日の月」「遊女の誠と卵の四角」と言うでし

よう。己だけもてたいと思つても、そうはいかない。

みす紙の文透キとふるウそを書キ 一一〇二

うらの文一座のこらす同し文、 拾七 18

壁をたばねてしよつて行文使フ、 九一 20

橋本 「からつぶみ(空つ文)」は、空文からぶみの促訛、贈り物(金品)の添えてない手紙」「(江戸語の辞典)とあり、主題句が例示されている。

(物事の依頼、借用、相談等の)手紙に何も添えてないので、「何だ頼み事の素手紙ばかりで、物は何もないじゃないか」と読んだだけで、反故にして捨てるという情景と思う。この句は「勝句刷」の天六松3、老中田沼意次の罷免された年である(天明六年八月二十七日。松は十月二十五日)。江戸時代は物事を頼んだりするのに、金品を贈るのが常識であった。(賄賂の感覚が現代ほどシャープではない)。

佐藤 同。なるほど、そういう諷意が読み取れますね。

220 五郎丸ふわりとぬいでしがみつ

山田 曾我兄弟。富士の巻狩で父の仇敵工藤祐経を討つが、兄の十郎祐成は仁田四郎に討

ち取られ、第五郎時致は御所の五郎丸に捕ら

えられた。尋常では時致に勝てないと思つた

五郎丸冬保、「上へは薄衣引かついて」(謡曲

「夜討曾我」) 女装して油断させて時致に近づ

き、「薄衣」をふわりと脱ぎ捨ててしがみつ

き、見事取り押えた。騙されたと知つた時致、

五郎 や、女にあらず扱は汝は、

冬保 御所の五郎丸冬保なるわ。

五郎 え、不覚を取りしか、口惜しい。

(歌舞伎「夜討曾我」)

五郎丸おまちなんしとたきとめる 拾五

しかみつきやれこい〜と五郎丸 一八二

つらに似合ぬ半かけハ五郎丸 四七

清・佐藤 贊。

23 いひきをかき〜遣り手いゝ往生

山田 強欲な遣手婆、ロクな死に方はしましい。

ところが、どうやら脳出血か何かで無意識の

ままあの世に行つた。遣手としては幸せな本

当にいい往生だよ。

よく心成佛とやり手への柔かふ 拾二

中日に死た遣りてハげかの内 拾三

大野 贊。疊の上での往生がよい往生か。

清・佐藤 贊。

24 月のかげ日向に成て母くるふ

山田 吉原月見などに現をぬかすしら息子。

親父に知れたらさあ大変。そこで陰になり日

向になつてかばう母の苦勞、知る哉君。月と

影、陰と日向の縁語仕立。

むす子のあきない月をうり花をうり 安四信4

母おやむす子のうそをたしてやり 一六八

清・佐藤 贊。

25 切落し半疊かぶり雨やとり

山田 切落は「平土間で、追込み席。最下級

の観覧席であるが、芝居好きや見巧者が入

る」。半疊は「①歌舞伎芝居で切落しの客に

賃貸した半疊ほどの広さの敷物」(以上「江

戸語の辞典」)。

「劇場内の見物席は時代によって多少異な

るが、江戸川柳から察すると、百棧敷(向棧

敷は舞台から最も遠い後方席で、切落しは

始め舞台の一部を切落した部分だと言われる

だけあつて、舞台のすぐ下で、舞台で雨を降

らせたり、水仕合などをすると水沫を浴びる

ような席であつた」(「江戸川柳経済志」物

価・遊里編)。

この句は、舞台の飛沫を避けようと、半疊

を被る切落し風景を詠んだものだが、「雨宿

り」と表現したのがミソ。

雨の傘さす結構な切落し 八七二〇

よくふかく舞臺のそばで雨にぬれ 拾九一

清・佐藤 贊。

26 たりひづみ金で直した嫁か来る

山田 携歪は「たるんだり歪んだりすること。

転じて、非難すべき欠点・短所。きず」(「江

戸語の辞典」)で、「携歪」を「金で直した」

は嫁を修飾する語だから、持参嫁そのものと

思うが、「川柳風俗志」頭註では「垂斜乃ち

家の左へ傾くこと」として、家の傾くのを直

した意に取つている。

大野 持参嫁贊。「たりひづみを直した」か

ら傾いた家を直す意味も含まれている。

橋本 大野説贊。「……も含まれている」と

いうより、そのことではないか。相場百両は

大金。それに、当時大金を投じての整形手術

などなかつたのではないかと思う。

清 大野・橋本説に贊。財政の建て直し。

佐藤 同右。ただ礎稿も同義であらう。

二つの流れ

川 上 大 輪

大矢十郎、偉大なる師であり、父である。
私の川柳の原点である。

そもそも体育会系の私が川柳をやっていること自体、不思議なのである。喋るのも書くのも苦手、まして頭を使う事などもつてのほか、少ない脳ミソがすぐバテてダウンしてしまう、身体はかなり鍛えたが、残念ながら脳ミソの鍛え方が足りなかつたようだ。

脳の神経細胞は約一四〇億、二十歳を過ぎると一日に十万个、五十歳からは二十万个ずつ減っていくとも言われている。もともと一四〇億の半分ほどはほとんど使われていないので、使われている神経細胞は約七十億、これが普通なのであるが、私の場合その七十億の半分ほどが怠け者で全く働かない。トレーニング不足で全く困つたものである。そんなこんなで少ない脳ミソにイースト菌を入れてパンのように発酵させて膨らませなければ使えないものにならない。たとえ膨らんだとしても

中は空っぽというありさまで、毎月の締め切り日が近づくと脳ミソは疲労困憊し、じつくりと推敲をする余力などは残っていない。こんな苦勞をしながらも懲りもせず、未だに川柳をやっている。それが楽しいから不思議である。

川柳との出会いは、最初にもあるように大矢十郎さんとの出会い、すなわち富子の父親との出会いから始まる。もう三十年も前の昭和四十五年のことである。

昭和四十八年五月号、川柳塔五五二号に同人特集として「柳縁親類同士」が組まれている。多久志さん・小松園さん、一三夫さん・庸佑さん、そして十郎・大輪、がそれぞれを紹介する一文を載せている、それをここで補足修正しながら冒頭の部分を再度登場させてみたい。

「久司君、川柳をやってみやんか」と傍らの柳誌を開いて話し始めた。初めて富子の家を訪れた時である。挨拶もそこそこ早速、川柳の話であった。私は訳の分からぬまま相槌を打っていた。川柳という言葉は知っていたが五七五なのか五七七七なのか、「本降りになって出て行く雨宿り」などの句は聞いた事があるが、それが古川柳だと言うことすら知らなかつた。それまで文芸には全く興味

がなかつたので適当に頷いていたが、その口調たるやユーモアたっぷりでも思わず笑いが出るものであつた。どんな句か覚えていないが、相槌を打っていた私も富子と顔を見合わせながら思わず「やってみようか」と言つてしまつた。私と川柳の出会いである。富子

が川柳を始めたのもこの時である。以後、句にもならないものばかり作つては富子の家に通うようになり指導を戴き現在に至つている。玄関を開けるといつも鉛筆を持つて柳誌とにらつめをしている十郎さんの姿があつた。私が出来ていることも暫くしてからでないと気がつかない、ということもしばしばあつた。句を考えている時や川柳の話になると他の事は一切聞こえない便利な耳を持つていて、富子との結婚話でもいつの間にか川柳の話になつていった。式の日取りや準備等の打ち合わせなどは川柳のついでであつた。家族の会話にしても句が主で、何でも五七五にしてしまふ、聞いていて楽しく本当に日常生活イコール川柳であることを痛感させられる。

(以下略)

十郎川柳の魅力はユーモアと穿ちである。そしてその根底には「愛」があつた。

覆た振りで聞けば妻娘は父思い 十郎
お早ようさん言うて悔いなし人遣い ♪

錢湯で逢う舊言は怖くなし

十郎

川柳の楽しさを覚えてからは富子、そして富子の弟の大矢喜一さん（現・川柳塔同人）も大阪から加わり、「よみうり時事川柳」への投句が始まった。入選は毎日五句、毎朝新聞を見るのが楽しみでたまに名前が載った日はもう一日ルンルン気分であった。しかしさすがに蛙の子は蛙、富子も喜一さんも上手かつたし、時事川柳のツボを心得ていてよく名前が新聞に載った。自分の句や名前が活字になることによって今までにない感激を覚え、知らず知らずのうちに川柳の深みに入り込んでいた。十郎さんからも「ああそうですかはあかん、なるほどと唸る句やないとな」とよく言われた。新聞柳壇の入選句は切り抜いてアルバムに保存しているが実家の新宮に置いていたので今は手元にはない。よみうり時事川柳でたばこのパッケージに有害の表示がされた時に

有害の文字は煙になって出る

という句を作ったのを覚えてる。

昭和四十六年に十郎さん、まさ子さん、富子、私の四人が中心となって「川柳しんぐう吟社」を設立した。もちろん葵水・太茂津の両先生も新宮まで駆けつけて下さった。会員は十名程度であったが、十郎さんの東奔西走

のお陰で少しずつ会員も増えてきた。大阪や兵庫、奈良からもたくさんの方の応援をいただき、ガリ版刷りながら柳誌「みかん」も毎月発行した。

昭和四十七年、富子と結婚。本名の久司から雅号を大輪とした。昭和四十八年には「菜の花、わかやま、しんぐう」の合同句会を早春の海峽で行い、その時の模様がNHKテレビニュースでも放映された。

昭和六十三年頃、ジュニア体操の指導が忙しくなり、川柳にもあまり身が入らなくなつて川柳塔も退会してしまつた。

平成元年に福山市に転勤、七年に十郎さんの看病のため和歌山に戻つて来たが、八月に他界、その間作句は中断していた。和歌山に来てから度々太茂津先生からわかやまの句会にお越し下さいという葉書を頂いた。

「また川柳を始めようか」と言う富子に「今度は中途半端な気持ちではあかんよ」と釘を刺された。「そうやね、死ぬまで続けんとな、父さんの供養にもなるから二人で頑張るか」ということで平成八年五月から川柳塔わかやま吟社にお世話になった。また薫風先生にも「また川柳塔で勉強させてください」ということをお願いし、川柳への復帰が決まつた。この時富子は雅号を富湖とした。皆が歓迎をして下さつた。嬉しかったと同時に

カルチャーショックを受けてしまつた。川柳が難しくなっている。今までのような句では通用しないということであつた。オール川柳の存在を知つたのもこの時である。早速取り寄せ、全国の句風を調べた、そして二人で分析をしていった。他の柳誌もたくさん読んだ。毎日が勉強であつた。オール川柳賞へは第二回から応募した。皆と同じレベルになるには先ずノミネートされること、ノミネートされなければ勉強不足だということを目標に頑張つた。

富湖は平成十年度第三回オール川柳大賞、翌年には路郎賞受賞、そして川柳塔杜月間賞のカップ永久保持者という輝かしい足跡を残して平成十二年一月二十七日、父十郎の元へ旅立つて行つた。

父十郎の供養のために始めた川柳、今度は私が二人の供養のために頑張らなければ……

川柳は自分自身の生きざまである。楽しくなければ川柳をやつてもつまらない。楽しいからこそ続けていられるのだと思う。私の川柳の根底には十郎川柳が脈々と流れている、そして富湖川柳が途中から合流し、大きな流れを作っている。この大きな流れをさらに大きくしていくために、これからも新しい川柳を模索していかなければならないと思つている。

尚香のむ

西出楓楽選

口紅があるから女捨てられず
暖かい顔で待ってる木のベンチ
月が出て相手の心まで読めた
もう少し笑おう今日は暖かい
振り向いた笑顔 暗号かも知れぬ
気休めを言うてはくれぬ体重計
セピア色の思い出箱をこぼれだす
干し柿の甘さ夕日の味がする
幸せが来そう南の窓開ける
うちのよりいい自転車捨ててある
脇役の花がなかなか越えられぬ
一枚の落葉にもある若い日々
手のひらをすり抜けてゆく風がある
冬薔薇 答えてならぬ事がある
ダイエツト諦めたのに太らない
本音言う鬼を許してなるものか
親から子 子から孫へとビートルズ
六十代は花だというたことがある
十割そばときいて乗り継ぎ食へに行く

鳥取県 岩崎みさ江
愛媛県 黒田 茂代
米子市 青戸 田鶴
藤井寺市 太田扶美代
米子市 林 瑞枝
富田林市 中井 アキ
鳥取県 録沢 風花
和歌山市 古久保和子
鳥取市 植田 一京
米子市 鷺見 正子
大阪市 神夏磯典子
尼崎市 内田美也子
寮屋川市 籠島 恵子
西宮市 牧淵富喜子
八尾市 高橋 夕花
西宮市 門谷たず子
横浜市 川島 良子
尼崎市 春城 年代
弘前市 宮崎ヒサ子

弁解は無様 木枯らし遣り過ごす
スクラムで荒野を道にしてしまふ
もたれば壁はだんだん温くなる
図書館にどうして何故を解きに行く
どなたさん夫に言う日来るかしら
幸福が逃げないように網を張る
深入りはするなと月の暈はいう
わらべ唄うたえばついてくる満月
山茶花にこころの装をくすぐられ
バリアフリーなのにつまずいてばかり
リベンジは無理だが古いの意地はある
悔いながら二十世紀の第九聴く
枯葉舞う明日を予約しておこう
淋しさは語らぬ風の置手紙
暖味な返事に水が流れない
ユートピアン眠りに入るちよつと前
子育てに似て菜園に手をかける
淋しいと言わぬ独りのマグカップ
可能性まだたしかめる紅をひく
鬼も閻魔にコネを使っているらしい
新世紀 老人会が待っている
辛い時たのしい夢を見る勇氣
華やいで舞おう私の余命表
人生でいちばんお得意笑顔よし
子の尺度に合わせて暮らす老いのちえ
逆風に乘って約束反古にされ

和歌山市 桜井 千秀
八尾市 村上ミツ子
西宮市 奥田みつ子
横浜市 長島亜希子
横浜市 巖田かず枝
鳥取県 伊藤 寿美
米子市 政岡日枝子
横浜市 近藤 道子
和歌山市 福井 桂香
吹田市 山本希久子
大阪市 板東 倫子
和歌山市 西山 幸
あきる野市 佐藤 季穎
倉敷市 小野 克枝
大阪市 川久保睦子
芦屋市 黒田 能子
横浜市 秋元 和可
大和高田市 鍛原 千里
東大阪市 北村 賢子
大阪府 米澤 俣子
熊本県 岩切 康子
香芝市 大内 朝子
鳥取県 石谷美恵子
寮屋川市 平松かすみ
岡山県 富坂 志重
横浜市 三村八重子

とび出しそう内密の話のど上下

おかめでも人一倍にみる鏡

暖冬や新世紀への気がゆるむ

小休止 少し自分を見直そう

組紐へあなたの好きな彩を入れ

聞かうちにのろけていると気が付いた

許されて愛の深さを噛みしめる

ひらかなの温さ優しさ母のもの

年金の中から少し赤い羽根

足腰の弱さを知った赤い靴

消しゴムでうっかり消した過去の顔

ときめきは春へお預けしておこう

美辞麗句並べて渦を避けている

二歳の孫私の夢をふくらます

まだ枯れぬ炎が揺れている聖夜

古紙がむっくり起きて斬り付ける

良心に突如と肩を叩かれる

荷にならぬつもりと子等を甘やかす

欲の皮繕うパフを叩いてる

羊水の子に戻ってる終い風呂

抜け道を残して生きて来た本音

味噌作りはずむ心で封を切る

本当の歳を知ってる影法師

鶴太郎の魚一言意見もつ

いつの日も一人芝居で日が暮れる

湯豆腐の湯気の向こうも笑顔なり

大阪市 本間満津子

倉吉市 山中 康子

鳥取県 さえきやえ

富田林市 藤田 泰子

川崎市 和泉あかり

藤井寺市 鴨谷瑠美子

東大阪市 田中美弥子

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 福本 英子

富田林市 池 森子

出雲市 城 多喜

寝屋川市 岸野あやめ

和歌山市 山口三千子

河内長野市 植村 喜代

箕面市 出口セツ子

松江市 安食 友子

松江市 川本 晔

東京都 播本 充子

和歌山市 楠見 章子

和歌山市 山根めぐみ

岡山県 山本 玉恵

東大阪市 笠井 欣子

今治市 塩路よしみ

大阪市 渡部さと美

八尾市 宮崎シマ子

西宮市 西口いわゑ

カクテルのレモン言いたいことがある

しがらみを抜けた笑顔の二度童女

おいしい話に石橋がゆれている

人気者 人格者とは限らない

バラの棘 幾度人を刺したやら

帳尻が寂しくなってきた師走

掠り傷ぐらいは治す縄のれん

ティースプーンかき回しつつ返事待つ

孫の世話焼いて親から疎まれる

ハイテクの風呂釜老いを悩ませる

バターでも買ってあげよう雪印

口笛かみずの声かも寒の月

屁理屈をまるで頓智のように言う

和歌山市 武本 碧

寝屋川市 坂上 高栄

倉敷市 井上 富子

羽曳野市 福田 満州

伊丹市 樫谷 郁子

和歌山市 玉置 当代

倉吉市 野口 節子

大阪市 中川千都子

横浜市 鈴江 純子

横浜市 山梨 雅子

羽曳野市 徳山みつこ

和歌山市 上地登美代

堺市 志田 千代

みさ江さんの句―普通の着想なら、女を捨てないために口紅

を手許に置くのだが、反対の視点から眺めてあり、ぐざりと胸

を突かれた。そして、逆もまた真なりと納得させられた。年齢

にかかわりなく、複雑な女性の気持が端的に表現されている。

茂代さんの句―ひところプラスチックなどの新しい素材がもて

はやされていたが、自然のものが見直されるようになって久し

い。自然に従属して生かされている人間にとつて、とりわけ木

とは心通じ合える。待たされる時間も暖かい顔で居られるゆえ

んである。田鶴さんの句―太陽光の真正直さに比べ、月光は

クールで情容赦のなさが感じられる。会話の途中で雲が切れ、

月光を浴びた相手の表情を見た途端、作者の心の中で答が出た

ようか。どんな答だろうか。想像が広がる。扶美代さんの句

―人間とは複雑で単純、単純で複雑。その日その時の気分など、

気温に手玉にとられているとも言える。奥行が深い句。

酌

梅田宣司選



相槌をしようずに打って酌をする
やめてほし顔で每晚妻の酌
独酌にそっとスルメが差し出され
酌量を見とどけ母は米を研ぐ
人の手を借りず独酌九十歳
もてなしに酌はいらない缶ビール
珍しく酌する妻だ何かある
上司への酌を忘れるカニ料理
振り袖の酌にほんのり下戸の頬
酌ぎに来る人は告げたいことがある
遠縁が隅で手酌の通夜の酒
大津絵の鬼と一晚酌み交す
晩酌の手がふと止まる地震報
反論を胸に納めてお酌する
まあまあとついでに意見も酌いでやり
情状酌量みんな悪人だと思つ
美女の酌ビールが酒か迷わせる
検査結果何ごともなく妻の酌
ライバルは両手に花の酌を受け
独酌に妻の冷たい目が刺さる
晩酌が減った夫のまるい背な
手の震え止まらぬ意中の人に酌

富子 敏子 由一 帆雀 次男 愁女 五月 水笑 虹江 満秋 周信 寿美 忠敬 愛論 碧

立呑みに手酌の似合う顔が奇る
風邪の床酌はいらぬコップ酒
晩酌の話は出来ぬ休肝日
ぐびぐびと今日の鬱飲む手酌酒
薄暗いところで酌がれるほど高い
赴任地も手酌ですかと探られる
紅一点へごっつい腕の酌が来る
皆までも聞かず酌み取る太っ腹
つましよ上司の霧が晴れたから
酌をする手付きも慣れて妻が翔ぶ
お父さん飲んでと酌を嫁ぐ娘が
酌される側に座つたことがない
孫の酌苦い顔して飲んでみせ
二次会の酌にも義理は見え隠れ
赴任地の独酌妻も子も知らず
佳

勝巳 照子 妻治 鉄治 雄々 時弘 和重 義男 東雲 東雲 彰雄 一風 銀波 政勝 恭昌 保弘 柳弘 柳弘 洋

それぞれメダルが語る辛い過去
国会にビジョンを語る人が無く
車椅子のお方と膝を折り語る
語るほど心がずれてくる親子
ばあちゃんか語る童話に嘘がある
語り合うオンザロックに気を許す
なれそめを語ればずれる父と母
聞かれても語れぬ深いわけがあり
疑問符の多い彼女の語り草
自信あり余分なことは語らない
戦争へ征つたきりだと子に伝え
手の節が寡婦の労苦を物語る
標本の蝶が語っているドラマ
掌をとつて聞いて下さるだけでいい
物語 孫が矛盾を突いてくる
待つ春に花は山ほど語りたい
訥々と語りが好きなつくね芋
のど飴のやさしさ愛を語り出す
夕焼けと語り合いたい明日の夢
生き方を運命線が語り出す
まだ産まれてこないうちから語りかけ
子が語る先生少し気負い過ぎ

生嶋ますみ選



裕峰 章司 保州 セツ子 正雄 愛論 富子 照子 民 ためつ 英子 倫子 朝子 アキ 孝雄 隆盛 千代 度 俊路 順子 まさこ

路 集

語るだけ語って老母は眠りこけ

昔はいいと口を揃える語り草

メモが切り札アリバイちゃん物語る

一生のドラマ語れば夕暮れる

身の上を語る女にだまされる

ジベタリアンあれも悩みを語ってる

湯どうふとゆらゆら語り合っている

捨て石の語り出す日がきつとくる

語り合つ友を財産だと思つ

この町の歴史を語る地蔵尊

介護特集夫としんみり語り合つ

二人きりなのに寝るまである話題

豆の芽を語る小さな進化論

消えた村タムの底から語りかけ

菊花展苦労話はまだ尽きぬ

ひかる

とし子

一風

たず子

圭一郎

ミツ子

勇太

あずき

剛治

ヒサ子

満秋

シマ子

次男

扶美代

そろそろ

菊地政勝選



宝くじそろそろ夢をくれますか

金運もそろそろ来そう籤を買う

マジックがまもなく点る老いの章

気の早い父母から届くランドセル

そろそろの老母の歩幅に歩を合わす

夢枕そろそろなんて呼ばないで

そろそろに嫁つてくれぬと困る歳

印籠がそろそろ出てもよい時間

入籍しそろそろ角が首もたげ

退院へそろそろ試歩の杖はずむ

介護する方にそろそろ過労きみ

そろそろと老母の手を引く初詣で

先が見えそろそろ肩の力抜く

そろそろと腰上げてからまた長い

陽も風もそろそろ春で大欠伸

石段をそろそろ登る共白髪

そろそろと立ち上る子に皆拍手

りハビリへ豆挟む箸そろそろと

もつ八十路そろそろお迎え来るはずだ

そろそろと思つ定年来てしま

常連がそろそろ揃つ縄のれん

そろそろと歩いていきます夫婦坂

結論へそろそろ釘を刺しておく

峰打ちの情けそろそろ判る頃

酔つてきてそろそろ本音喋り出す

運咲く息吹待ってる万歩計

急ぐ心なだめて歩く雪の朝

根回しをそろそろ効いた七光り

出る杭をそろそろ効つたか年の功

えべっさんそろそろ景気ようしてや

四面楚歌そろそろ忍びよる不義理

そろそろと阿吽の意気の共白髪

そろそろと言いままだと言つ二人

そろそろと進む老化がこわくなる

そろそろと本音聞こうか酒を注ぐ

そろそろとすすめた縁談世紀越し

七五三そろそろ歩く千歳飴

善信

哲男

順子

花匠

純子

靖巳

勇太

健一

ツネ

勝巳

圭一郎

正雄

圭二

彰雄

佳

タミ

しげお

風樹

アキ

あらた

人

満秋

地

大輪

天

吉田

裕峰

軸

順風

初歩教室

題 一 見 る

吐 田 公 一
は だ きん いち

この教室の最初の頃にやかましく言ったせいか、最近では誤字・脱字のある句が少なくなってきたことは喜ばしい限り。

さて、今回の「見る」の題に対して、乗っ・見るとか、食べて見るなどの句が多数あった。この場合の見るは補助動詞（詳しいことは辞書で調べて下さい）であり、仮名でみると表現し、「見る」とは違うのです。

この教室は国語の勉強の場ではないので、余り細かいことは言わないつもりだが、明らかに用法の違う場合は黙視することができないのでご寛恕願いたい。

添削句

○垣間見る空の青さに癒される 無名
名を忘れないよう。内容を具体的に

▽空の青見てストレスが癒される

○あと幾ら見えない赤い糸の先 賢治

▽あと何年見えない赤い糸の先

○初夢は金に埋れた夢を見る こそえ
初夢＝夢を見るで重複。冗長となる。

▽初夢にまでも出てきた札の束

○人の心落ち目の時に真見る 章司
真を見るでは。投句前に読み直すこと。

▽落ち目の日人の心の奥が見え

○紅葉と滝に誘惑されて小半日 栄子
滝を入れることよって上七であり、欲張

りすぎ。川柳は省略の文学です。

▽紅葉に誘惑されて小半日

○酌されてはすかいた見た妻の顔 像山
中七が無意味。上四になるが

▽今夜はやさしく見える妻の酌

○無口だが広い背中を見て育ち 鈴美
子が無口ともとれるので、分りやすく

▽子は父の無口の背中見て育ち

○手さぐりで生きた時間は冬の海 道子
二月号の題は見るです。ご投句の三句とも

見るに無関係の句ばかり。

▽手さぐりで明日が見えない暮し向き

○初老の目残る人生見てみたい 栄呼
残る人生を余生とすれば――

▽見れるなら余生が見たい老いの欲

○夢の中いつ見ても笑む若き母 益子
若くして亡くなられたお母さんと思うので

▽いつ見ても夢で微笑む若い亡母

○よく見ると無駄がなすぎ角が立つ ぶりこ
言わんとすることは分るが、抽象的すぎる。
もう少し具体的に。句意は異なるが

▽無駄のない動きを見せている茶席

○カップルを見ぬふり車内の十五分 千都子
下五が冗長。十五分に特別な意味があれば

別だが――

▽カップルの甘さ見ぬふり車内席 一典
失敗も美人はなぜか見のがされ

なぜかは言わずすがなの表現。

▽失敗も美人大目に見てもらえ

○賑やかに年玉見当て孫曾孫 トシエ
見当てでなく目当て（見るにならない）

▽年玉を較べ合ってる孫曾孫

○人により見る物差しが誤差だらけ 郁代
下五の表現は違うですむ。上五は不要。

▽物差しの見方が違う保守進歩

○夢を見る駄句が秀句に化けて出る 敬之介
下五の表現がまずい。

▽こんどこそと秀句夢見て辞書を繰る

○三猿を心に誓う嫁姑 トヨ子
この場合は心とするより

▽三猿を互いに誓う嫁姑

○店頭の苺に春の息吹き見る 好勝
最近季節の先取りの傾向があるので

▽店頭には旬が見えないハウスの

○姿見て上辺悪いが働き手 和香

表現の差異、見付けはいい。

▽日焼けした顔はわるいが働き手 トキ

○トンボから見ればわたしはどんな人 トキ

この疑問をつきつめてみる

▽トンボから見れば人間恐ろしい 煩惱児

○阿鼻叫喚見るに耐えない原爆記

▽阿鼻叫喚見るに耐えない原爆図

○幼児の目星を指差し語りべに ふみ

下五が不適

▽星空を眺めて夢を語る子等

○子は親の裏側をよく見ています 春江

説明句。中七以後が冗句

▽親の裏見ている子供の目が怖い

○見るだけが能ではないと打って出る 泰雄

第三者の立場で表現した方が効果的

▽見るだけが能じゃないよとけしかける

○見るだけでいい買うことはまたにする 半覚

具体性が欲しかった。また見るだけの句は

非常に多かつた。着想が甘い。

▽目の保養させてもらった美術展 てるみ

○老斑だらうかつくづく鏡見る

冗句が多すぎる。こんな時は自分の感情を

盛り込めばいいと思う。

▽老斑を写す鏡が憎らしい

○聞いたのと見るとは違う好き嫌い 久子

下五が不適。少し表現を代えてみると

▽会ってみて噂と違う人となり

○姿見て判断つけぬことにする 輝夫

下八音字に難

▽見てくれば判断しないお客様

○ロボットを見に場違いの列にいる 仙雅子

ロボットの進歩についてゆけない姿を詠む

といいのでは

▽ロボット犬見て場違いの老いを知る

○見て選ぶミカン馬穴に山と積む 晩翠

下九音字がなおざりな感

▽選別機に目が回り出す初パート 無禄

○Eメールまだ見ぬ人と言う恐さ

着想はいい。少し夢を持たせると

▽Eメールまだ見ぬ女に夢を馳せ 智加恵

○他所様の子は見るたびに成長し

もう少しストーリーを展開させて

▽他所の子がみんな元氣に見える病窓 圭二

○見も知らぬ遍路たがいに交わす声

声を交わすだけでなく感情を入れて

▽一期一会遍路の声の温かさ つよし

○見え透いた嘘が言わせる美辞麗句

▽見え透いたお世辞にまたも引かかり

住句 古里の見る影もなしブルドーザー 純

動物園見たいパンダは昼寝中 喜子

かわいい娘あなた見こんで嫁がせる 文江

見たことあるが誰方かおじぎされ キミエ

手にとつて見て下さいと買わされる きらり

見ぬふりで谷間眺めて若返る 朋月

見てほしいセンスも妻は無関心 四三郎

成り行きを見てそれからが正念場 芳江

見逃すな十七歳の赤信号 方子

孫の顔重ねて子役見るテレビ 武

見たままを描くと自画像伏し目勝ち 裕峰

母の目にしあわせ芝居見抜かれる 美弥子

リハビリの一步に明日が見えてくる セツ子

生き甲斐を見つけた窓に陽があたる 悦子

本物を見るとやつぱり血が騒ぐ 深雪

職退いてやつと自分が見えてくる 賢

テレビ欄見て一日を組立てる 千代

反論の中に打算が見えかくれ 八重子

亡母の夢見ることもなく三回忌 菜月

一人旅あなたと同じ月を見る 栄翁

(一人旅の情緒が如実に)

三代の盛衰見ている鬼瓦 君江

(盛衰と鬼瓦は時々見かける句だが)

料理来てメニュー見直す異国旅 純子

(いい見付け。ユーモアがある)

私の中を見る目が違う親と子と

野麦峠越え

早川 盛夫

高山から野麦峠までおよそ二十三キロ、さ程遠い距離だとは思わないが何せ山人中、狭い道路とトンネルなどもある山岳道路である。対向車がくるとどちらかが待避線まで下って譲り合うという気の抜けない運転がつづく。幸い天気は時折薄日のさす良くも悪くもない日和。シーズン前ということもあってか対向車の少ないことも何よりの救いといえは言える。

標高一六七三メートルの野麦峠。凶作の年などにこの峠一帯を覆っているクマザサが稲穂のような「ササの実」をつける。飛驒の人達はこれを「野麦」と呼び、実を紛にしてダングをこさえ飢えをしのいだという。そんなところから誰いうとなく野麦峠という呼び名が生れたのではないかといわれている。

天気が良ければ乗鞍岳や御嶽山、さらには北アルプスの山々が一望に眺められるところ

であるが生憎の天気。

日本百名山の登山家深田久弥は、

—私は日本で最もすぐれた山岳風景の一つに数えている。まずその姿がいい。雄大で、しかも単調ではない。ゆつたりと三コの頭を並べたその左端が主峰である。その主峰の右肩の巨大な岩が、間延びを引締めるアクセサリーになっていて、それから前景の豊かな拡がりがある。胸の透くように伸びてコセコセしたところがない。—

これは位ヶ原から乗鞍を真正面に見て記したものであるが、乗鞍岳も御嶽山もともに巨大で雄大である。その間をぬって走る野麦街道もまた眺望の悪からう苦はない。

うるはしみ見し乗鞍は遠くして一目といへどながくほこらむ

長塚節もこんな歌を詠んでいる。

峠には当時の「お助け小屋」などは一切残っていない。売店のおばさんに声をかけると今あるのは観光客目当てに後から建てられたもので、指差しながらあの辺にあつたんですよと教えてくれる。行って見るとちよつとした草の台地になっていて面影はない。その横を通っている一本の細い山道だけがどうやら本物のようであるが、それもかなり手が加えられているようである。

時は明治に移り文明開化、富国強兵、そして外貨獲得などが叫ばれる中、第一にあげられたのが生糸の輸出であり、信州岡谷あたりで工場が操業を開始、製糸ブームが興ったのである。飛驒の貧しい十五歳にも満たない少女達が、家を扶けるために身売り同然のよう働きに出たのである。銭が貰える。米の飯が食べられる。そんな思いに駆られ険阻な山道を歩き、あるいは雪道を紺の股引きに草鞋ばきという姿で、この野麦峠を越えていったのである。

その労働はあまりにも苛酷なもので、朝四時から夜の十時まで働きに働かされ、一年の稼ぎが百円にも満たない低賃金だったという。何人かの女工が綿ぼこりの中で病いを得、衰弱して家族に引きとられる途中、野麦峠の雪の中で息を引きとっていったという身につまされる思いである。

女工哀史を語る時、私は鶴形を思い出さな
い訳にはいかない。

みな肺で死ぬる女工の募集札

凶作の村から村へ娘買ひ

ふる里は病いと一しよに帰るとこ

修身にない孝行で淫売婦

悲惨な紡績女工を川柳に詠んだ鶴形、貧農

の娘たちが紡績工場の綿ほこりの中で苛酷な労働に従事させられるのを、鶴彬は見過ごすことができなかった。反政府、反アルジョア、たかが十七文字の川柳の匕首を、国家権力に突きつけていったのである。

手と足をもいだ丸太にしてかえし

あまりにも有名なこの句に象徴されるように、彼の二十九年の生涯は衝動的であった。

反戦、反アルジョアの先鋒に立って自らの命をも顧みなかった若い情熱とは、いったい何だったのだらう。所詮戦争に駆り出されて死んでいく命。そうした思いが、戦争で死ぬのも川柳で死ぬのも同じと、彼の心を駆り立てていったのかも知れない。軍や特高警察から監視されるところとなっても、決してプロレタリアの精神を改めることはなかった。鶴彬の凄さ、やがて検挙され、拷問の末虐殺されるが、何とも凄惨な川柳作家がいたものである。しかし、十七文字のたった一句が鶴彬の名とともに永遠に光彩を放つのである。一句の怖ろしさ、十七文字の素晴らしさを今改めて思い知る思いである。

かれこれ一時間半もそこにいただらうか、野麦峠を後にして木曾路へと車を走らせる。

途中から左へ奈川村を経て梓川村へ出る野麦

街道であるが、私達は右へ道を取り木祖村へと向う。中山道である。江戸時代には幕府直轄の東海道に次ぐ主要道で、重要な街道として江戸から京都まで百三十五里三十二丁（約五百四十キロ）にもなり、その間に六十九次の宿場が設けられていた。そのほぼ最中に位置する木曾谷、三十三番宿場賢川から四十三番馬籠宿までを木曾十一宿と呼び大勢の旅人で賑わった街道である。

山が深く険しい谷合いをぬってつづく街道には、漆器は曲物、塗櫛などの工業が発達して今もその産業が営営としてつづいている。険阻な山中であったことがかえって古い家並や独自の文化を後世に遺す結果となり、自然で侘びた風景は今も木曾谷を訪れる旅人を飽きさせることはない。特に中山道最大の難所といわれる鳥居峠を目前にした三十四番宿場の奈良井は、当時奈良井千軒とまで言われる程栄え、現在でも古い家並がよく保存されており、住宅の六割に近い二百三十戸が江戸時代から明治にかけて建てられたもので、昭和五十三年に我が国十番目の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

島崎藤村や正岡子規、それに幸田露伴などが泊った宿、徳利屋も郷土館として現存しており、木曾十一宿のうちでも最も江戸時代の

宿場の面影を濃く留めているところである。また明治天皇が食事をした部屋が当時の儘保存されている上間屋資料館は、宿場人足や馬の手配などを扱っていた問屋で庄屋をも兼ねていた。寛政年間に創業という「越後屋」は木曾でも人気の宿で、一度は是非泊って見たい宿だが、運よく予約がとれたら話である。

かくして二日間、高山から野麦峠を経て中山道は奈良井宿まで、走り觀光のように回ってきたが、まだまだ多くの觀光スポットがあり見過してきたところも多い。

島崎藤村の大作「夜明け前」の書き出しにある、

木曾路はすべて山の中である……
の妻籠から馬籠峠にかけての素朴な宿場町の風情、文学的な散策は、藤村の生い立ちと作品を充分認識したうえで訪ねて見たいところである。

糸ひきへ十五で越えた野麦道
肺を病む少女に飛驒の山が見え

一年の稼ぎを胸に母が待ち

乗鞍はあつち野麦の雲を指し

（野麦峠の館にて 盛夫）



追悼 高杉鬼遊さん

平成十二年十二月七日没 81歳
法名 浄寛院亮善鬼遊居士

雪は刹那を

—高杉鬼遊さんを悼む—

橘 高 薫 風

昭和三十年代、それは麻生路郎先生の晩年であったが、川柳雑誌社の支部として病院川柳会が二つ存在し、後に川柳塔社の推進力となる若者が育てられていた。

右は、「谷垣史好句集」の序文の書き出しで、高杉鬼遊、香川酔々、谷垣史好らは川村好郎先生ご指導の羽曳野どんぐり川柳会、私は西尾葉先生指導の西宮明和病院青蛙会に所属していた。

西尾葉先生が川柳塔主幹になられてから、生真面目一本の鬼遊さんが川柳塔社の会計係を担当、不真面目に真面目が言い訳しているような私が編集の責任者を担当した。私にとって一番なつかしい時代だったが、鬼遊さん

にしても同じ思いであつたらう。

鬼遊さんは、昭和四十三年十月の二賞発表句会で、川柳塔賞を受賞、十二月から同人に推薦された。

消えるから雪は刹那を淨く舞い

川村好郎、若本多久志推薦の句だが、この頃はまだ不二田一三夫氏編集の時期で、消えるからの「ら」一字が脱字となり、校正ミスを恐縮されていたのを思い出す。

人類の太古もやはり石を投げ

創造の神に善い出来悪い出来

は最初の同人吟三句の中の二句である。

鬼遊さんの功績は会計係を全うしただけでなく、栗主幹の片腕として、地元八尾での句会「菜の花」の推進力であった。温和で親切なお人柄だから、句会のムードは、その後の飲み会をふくめ、いかにも楽しかった。

カラオケに関すること、ジュニア川柳にも触れたいが、はや紙数が尽きたので擱く。

今日ではささような風になる

手を打ってわが人生はこれくらい

前者は、昨年五月十七日の翠洋会での軸吟、後者は、翌六月七日の本社句会での作で、体調に変化をきたして入院される五日前の句だった。毎日文化センターの川柳教室を長年二人で担当した縁も、私の墓碑銘に残したい。

導きの星 鬼遊さん

田 中 正 坊

如月や江下北川作江たち

昭和生れには分りにくいかも知れないが、鬼遊さんと同年輩の大正人間の心の琴線に触れる句である。昭和七年二月二十二日、廟行鎮の敵陣へ、爆雷を抱えて突つ込んだ、肉弾三勇士を詠んだもの。田辺聖子著「川柳でんでん太鼓」にも収録されており、私はこの人の代表句と勝手に決めている。

連翹のいろあざやかに小糠雨

これも注釈があるが、昭和五十八年四月、私の妻の告別式に供えられた甲冑である。その前年から川柳を始められた夫婦は、西尾栗主幹らの推薦で同人に加えられ、橋高薫風氏の紹介で鬼遊さんにお見知りいただいた。

その少し前、手書きの家族句集「西雲」を差し上げたところ、感想をつづつた長文の便りを寄せられた。川柳塔とは何と心のあたたかい人たちの集まりなんだらうと感激し、六十の手習いで川柳に打ち込むこととなった。

この後、常任理事に推されて鬼遊さんと役員会などで同席するようになり、翠洋会その他の句会、あるいは各地の大会にも同行し、時に居酒屋で盃を傾けることもあった。今は亡き谷垣中好・小出智子さんとともに、私たちの目標であり、導きの星であった。

「私は引つ込み思案で、何事にも消極的でしたが、こうして皆さんの前でしゃべれるようになったのは川柳のお陰です」と言われ、決して雄弁とは言えないが、訥々と話される内容は、豊かな人生経験に裏打ちされた滋味あふれるものであった。また、目次下のエッセーや編集後記に書かれる寸言にも、飄逸な人柄がそのままにじみ出ている。

核のない夜明けを鳩が待っている

これは、昭和六十三年六月に開かれた第七回全日本川柳千葉大会で川柳大賞に輝いた句である。私もこの大会に参加していたが、これが発表された時、我がことのように誇りしかったのを思い出す。

もつともつと学びたいことが多かったのに二十一世紀の夜明けを待たずに旅立たれてしまった。この好作家が生前、句集を出されなかつたのが今となっては惜しまれる。合掌

ジョークの先生

米田 恭 昌

十二月七日なら句会の席に家から鬼遊先生の訃報が入り、驚かされた。

この朝、翠洋会員の寄書に、「こんな時鬼のジョークが待ち遠し」の一句を添えたお見舞状を投函するのを忘れ持たままだった。先生のジョークをまじえた温和な御指導は正に会の暖炉のようで会の魅力でもあり、そんな先生の復帰を会員一同待ち望んでいる矢先だった。

昭和六十一年秋、「今奈良駅なんやが正倉院展へ行かへんか」と突然薫風先生から電話があり、すつとんで行った。その時紹介されたのが鬼遊先生だった。名前とは裏腹に初対

面の川柳一年生の私に親しく話しかけて下さる温厚な方だった。私の調子の悪いカメラを目にして「バカチョンは頭叩いたら動くんちがうか」と言われ、川柳人なんだなあと妙に感心したのを覚えている。この後翠洋会に入り先生の御指導を受ける事になる。NHK川柳教室の吟行をお世話していた関係で、お誘いするといつも参加して下さった。そして誰にも親しく冗談を飛ばし気さくに話された。

苦勞人がかつ庶民的な先生だっただけに、私自身が滅入り落ち込んだ時には、きまつて会いたくなるそんな温味のある先生だった。天満、上六、鶴橋と何度か飲みに行きながら、アサヒピアホールだけはお誘いしても行かれなかった。御息がキリンビールの社員だった為だが、そんな一面もある先生だった。九日の告別式には、柩を薫風先生にかついでもらつてきつと喜んでおられた事と思う。珍しく朝十時からの式で、丁度昼から句会のあった私に「間に合うからちゃんと言きや」と言っておられる気がした。その夜妻と吟行のビデオを見て亡き先生を偲んだ。奈良町を古い女と雨に濡れ」とよまれ皆で大笑いしたと妻が涙ぐんでいた。北陸路吟行ではバスの中から唄っておられ、又雨の中を颯々と歩いておられる姿を画面で改めて見ると、

涙が止まらなかつた。あの透き通った「鬼遊
—」と言うお声をもう聞けないと思えば、今
又涙がこみあげてくる。

惜しまれて師は新世紀待たず逝き

合掌

忌の日よりつらい

仏の誕生日

八木 千代

「ずっと前々としたしか3度目にお会いした頃、出雲だったか松江だったのか。春爛漫とまで行かないけれど、凄く幸せな感じのする麗らかな日和に塔の一行と一緒にした日のこと。いつとはなしに鬼遊さんと歩いていました。今日はな。僕の誕生日やね」

やっと春を迎えて、肩からほぐれるような穏やかな山陰の空気が、鬼遊さんの柔らかい口調にびつたりで、それからの四月十二日は鬼遊さんの日だと思ふようになりました。初対面は、大万川柳に投句を始めた頃です。塔の同人になってすぐの瑞枝さんと私とを、川村好郎先生、宮西弥生さん、高杉鬼遊さんのお三方で米子に訪ねて下さったのでした。米子駅のホームに迎えた二人は打ち合せだとは見え、日の丸の小旗を振り続けたという

なんとも大時代の笑い話。

世紀末の今年からはざつと三十五年も前の思い出となります。

しかも鬼遊さんは乗り遅れてたつた一人で、ごつとんごつとん山陰線の長い旅、ようやく夕暮れどきに「電車が出てしまいいません」。飄々として鬼さんのご登場でした。

川柳塔で初めてのおとこ友達なのです。

幼馴染みの親しさでの三十五年間で、出会うたび大切な事を教えて下さるのです。

二度目からは「よう来たよう来た」と鶴の翼のように両腕を拡げて迎えて下さいました。「栞先生の会社に行きたくないか。栞先生に会いたくないか。よっしゃ」と自分で言つて自分で返事され幾度も八尾に行きました。

最近では玉島大会です。チボリの観覧車も数策も鬼さんご夫婦といっしょでした。回転木馬まで、童女になって遊びました。

計の知らせを頂いた日も葬の日も春の頃の陽気。親の命日さえあとでお詣りするような私。十二月七日をうつかりする事があつたとしても、川筋に春を魁けてあの連翹が咲き出せば、死なぬ限りは口ずさむでしょう。

連翹の黄につらなれる不孝者 鬼遊
四月十二日には泣くことでしょ。たぶん生きていく限りはずつと。合掌。



拝受した甲電からの抜萃

風花のこぼれる夜のさびしさよ 五葉庵
木枯らしに何を急いで峯の雲 きやらばく
木枯らしや鬼の嫉だなど憶う 諷人
もうお会いできぬ笑顔を大切に 正朗・芳子
先頭を歩いた鬼を忘れぬ 蘭幸
十二月鬼が遊びに逝き給い 青居
なんべんも泊つてくれた鬼遊さん 岳人
ええ披露さかせてくれた鬼遊さん 月子
眠り続ける人に真白な霜降りる 天笑
電文のみは番傘川柳本社他多数から拝受。 凧子

平成10年5月 倉敷チボリ公園にて

高杉鬼遊50句

水死体時計は防水自動捲き

人間の墓だ何やら書いてある

恋文へ拝啓と書き詮もなし

税務署で冗談を言う出前持

死ぬ時は願不同なり日向ほこ

かたつむり恋にしあらば急ぐべし

病人の手に叩かれる蚊のいのち

死んだ子の帽子が一つかけてある

美しくなる効用もあり恋をせん

酒屋への使いは孝行だと思ふ

サルトルが死に標的がゆれてくる

路郎忌を待つ一人なり師を識らず

妻とふたり今日あるいのち花の下

香奠を数える指が愉しそ

歴史から消える小さなおとむらい

桔梗一輪おとこは強いものならず

百点の妻に疲れるキリギリス

母の名は釈尼妙寂はるかなり

追うことも追われることもない夫婦

友だちのような友だちならいるが

神様が栄えるほどに世が乱れ

男対女エレベーターは昇る

アペノからどやどや乗った河内弁

罪人の如く音痴がひき出され
出世した男に顔を忘れられ

毒矢すでに撃ちつくして夫婦老い

職人がネクタイをするめでたい日

ぎょうざ食う逢わねばならぬ人もなし

地下街の出口で虫の貌となる

米を食いパンの思想がわからない

浮き雲は今どの辺りわがいのち

人間の親子を猿に見てもらい

紫の雲凡人の視野になし

妻と社長にあやまりながら生きている

生きてゆく台詞を今日もまたとちり

めしを食うただそれだけの日を恐れ

さて何をして遊ぼうか老夫婦

いやな顔したことがない地藏さん

ちぎれ雲ひとりになってから寂し

れんこんの穴からソクラテス笑う

終電車女はどこで降りるやら

ぐうたらな鬼極楽へ迷いこみ

あきもせず一夫一婦の遠い道

右を向けいから左向いてやる

不器用な男で花を買って来る

金婚へ賞味期限はとうに切れ

手袋の片方がある冬の駅

万灯会あの世もさぞや暑かるう

わが影を踏んで長生きしています
雨だれが刻むあの世はついそこに



追悼 大坂形水さん

平成十二年十二月十一日没 93歳
法名 興雲院形水日正居士

形水さん安らかに

藤村 メ 女

形水さんの訃報に若き日の思い出が彷彿と浮かんで来ても、川柳でこゝろしたハワイ、奥様と同伴でこゝろした椿温泉、新宮から那智の滝と海人丁ぐらいいしか思い出せません。

形水さんは川柳は藤村亜鈍よりも先輩で、樋口の店に文学青年がいると聞かされたのは、私達が結婚後でした。彼はその頃から川柳をされていた口数の少ない温厚な青年で、人の信用も厚いお方でした。

戦後、樋口亀商店（藤村の姉の店）を買取り、今の株式会社オーエスケーを成功させ、私達五人別家ただ一人の成功者です。

形水さんのお話は原稿用紙二枚と言われて

も、七十年近くの付き合ひにとっても書き切れません。形水さんと藤村は、藤村の姉の夫である樋口亀商店で藤村は経理、形水さんは二番番頭でした。藤村が学生時代下宿していた家が、奥さんの祖母にあたる方で、家族とおつきあいもあり、藤村の両親と姉である御りよんさんの仲人で結婚されました。ですから私とは義兄妹、樋口が本家で三人は別家と言う間柄で、それぞれ結婚して家を持たせていただいた仲です。

その頃の船場の仕来りでも、盆と暮れには五人揃って本家にご挨拶に上がりました。帰りにはごりよんさんから女性へのボナナスとして暮れには正月の着物、夏はうす物を頂戴して帰ったものです。それも戦前のお話で、戦中に皆ちりぢりになり、無事に残されたのは形水さんと私達だけでした。それから今日までお互いが老年になりました。

憂鬱する涙で極の扉閉め

メ 女

戦後、路郎先生が疎開先から帝塚山に帰られ、「川柳雑誌」復刊となり、次々と大会が開かれるようになり、地方の支部も名を上げ、句会が増えて行きました。

亡き路郎先生、中島生々庵先生の句碑が淡路島に建立されたのも、形水さんの出身地であることから、並々ならぬご尽力をされたと聞いております。「川柳塔」発刊以来、ころよく表紙の広告を続けて下さいました。形水さん、ありがとうございました。

人生の師

藤村 亜成

故形水氏と亡父亜鈍とは昭和六年頃からの友人で、私は昭和三十九年に氏の経営する紳

士服の会社に入れてもらった。爾來三十六年間、公私ともに指導いただいた。

入社後三年ほどしてから、仕事を終えたあと毎月句会を催すことになり清水白柳・伊藤入仙・川村好郎・宮西弥生の諸氏を指導者として迎え、昭和六十年まで続く。その間、本社句会や玉造川柳会、川柳文学の会等よく連れていつてもらった記憶がある。

昭和五十三年古稀を記念して川柳「谷町」を上梓され、その序文に当時の中島生々庵主幹が如実にその人柄と句風について書かれていた。――謙讓で控えめだが、反面強固な意志と温かな包容力、格調高い愛情の持ち主で特に私が畏敬する面は鋭い批判力を磨き澄まして常に頭の一隅に備えていることである。――今では数える程しかない路郎門下生のひとりで会社を創業する時、路郎師から贈られた横額「足踏みをすな」を座右の銘としてくれた。代表作に

谷町は丁稚車にきつゝい坂
車窓暖かこは明石のおふねがたんと
赤ちゃんの突如気持ちのよいおなら
がある。

氏の傍らにいて柳人や業界人との接し方を見てきたがいつも自然で繕うところがない。また我々からみてたいへんに思える事件や難

題にも動じることなく常に平静であった。社員にはよく分相応にと戒める一方、一流になれプロ意識を持って促していた。振り返れば氏を軸にさまざまな人との出会いがあり、有形無形の影響をうけてきた。数少ない人生の師の一人として氏から受けた恩恵は測り知れないものがある。通夜の前日、自宅に安置された遺体のお顔を拝したが、微笑を湛えた安らかな眠りに翳りはなく、享年九十三歳の大往生だった。

悔いのない証微笑湛えている眠り 亜成

『秀句鑑賞と

梅志句集』から

後 藤 梅 志 著

(1894年～1970年)

使うほど良くなる脳の話し聴く 形 水
淡々として、だじな話を聴かされたよう
な句である。

天界のどこを探っても、人間の脳の働きほど絶大なものはあるまい。但し使いようである。みんな、中途半端な使い方をして、疲れ果ててしまう。十人が十人。百人が百人。欲

望のとりことなったり、節度を欠いたりして、機能をそこねてしまうのである。

脳にも、こやしをやらねばいけない。「恩」とか「感謝」というのは、みな天与の肥料である。こんな見易い道理をわすれる人が、なんと多いことか。

北浜にくすぽつたまま老け 形 水

北浜には、「ゲン場師」と称する、立ん棒がいる。寄り付と、大引けだけで勝負をする。あじけない連中だ。運がよければ、米代はおろかダイヤの指輪も、買いかねないが、負けつづけると、スッテンテン、昼飯代もままにならぬ連中。場内の相場が荒れてくると、風吹きがらすのように、道はたを右往左往する。北浜は、なんとといっても、金がモノを言うのである。あまり大して目が出ないまま、利(と)つたり、とられたり、いつのまにか、四十、五十の年齢をつみ重ねる。

うまいものを食っただけが、得と観念する。こんなことを「くすぽつたまま」と表現したのであるが、環境をあますところなく詠み込んで秀句。

「老老け」も、最後を締めくくって、古句にみるような、いい句になっている。惻々として哀感が迫るではないか。

昭和45年(1970) 2月20日刊

大坂形水50句

谷町は丁稚車にきつい坂

子の病氣信心のない所為にされ

本能は手の届くとこみな破り

鳥打ちの○どんだった僕だった

戦時には戦時の色で儲けてる

大阪の路地は汚れた雨が降る

因縁をつけられそうな街歩く

夫への不満バタバタ掃除する

幼な友噫乎忠魂の碑となれり

車窓暖かチルチルミチル顔並べ

受付の機転 社長を留守にする

北浜へ既に流れていたニユース

ルンペンの服からヒント得たモード

抜け道がない筈がない知らぬだけ

糸への王様 食べもの屋を始め

妙なのが味方の中に動いてる

アパートのデザイン盗りに行くカメラ

船場からまた名門が一つ消え

電話では断られそう手紙書く

キャディから見た大臣の腕のほど

肩書は多いがどれも副ばかり

勝ちながら亀の人気はもう一つ

屋根よりも高く飛べない寺の鳩

エープリルフールだったかアツハツハ

海賊を先祖に持っている自慢

気の利いたのもたまにある記念品

どっちでもよいから古顔立てておく

堂々と表門から来た詐欺師

ダンヒルへ恐縮をするハイライト

何をする本部かいつも閉まってる

うどんから比べコーヒーマ鹿らしさ

土産物買うモーレッツさ日本人

寺巡りなどして涙もろくなり

大阪の穴場 博多で聞いてくる

職場でのきびしい顔を妻知らず

宴会の酒豪うちではすぐに酔い

この道を一筋に來た顔のしわ

美智子妃と同じデザイン仮縫し

スカートが縫える程度の洋裁出

よくも用あるもの老妻動きづめ

露の皮むいてる妻の手の無心

孫の顔見に東京行き用のつくる

ワンマンになれぬ血液型である

三人が亜鈍一人の酒に負け

正月も金利は休みなく稼ぐ

押し売りが来ても尾を振るうちの犬

磨いては見ても所詮ただの石

月給が右から左へ消えた頃

ロボットが人使う時きつと来る

商人の胸に勲章似合わない

川柳は人間である

21世紀記念ふあうすと川柳大会

日時 13年4月1日(日) 11時開場

場所 兵庫県民大会9Fホール

(JR・阪神元町駅下車7分)

TEL078-32112131

講演 「世界のユーモア」

音成日佐男先生

宿題と選者

「世」 田中節子選

「求める」 山本桜子選

「望」 久保内あつ子選

「抱く」 小林幸子選

「指」 西出楓楽選

「島」 石井冬魚選

「進む」 泉 比呂史謝選

席題なし 各題2句

出句締切 正午

会費 2,000円

(記念品・発表誌呈)

(昼食は各自お済ませ下さい)

懇親宴 大会終了後、同会会館で懇親宴

を予定

文学ルート川柳募集

文学ルート(松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市)

作品—文学ルート(5市)周辺の自然や衣食

住・信仰・年中行事等に関する習慣・民

俗行事などを題材とする川柳(未発表作)

宿題(各題2句以内)

松江市「茶」堀川 恒松 町紅選

尾道市「渡船」桜 定本 広文選

今治市「腕」「船」 月原 宵明選

松山市「温泉」「椿」 橋田呂久朗選

高知市「龍馬」「よさこい」 岡村 嵐舟選

第二次選者

(社)全日本川柳協会会長 仲川たけし

理事長 吉岡 龍城

常務理事 橘高 薫風

応募方法—専用の応募用紙または官製はが

き、封書に書かれた作品(FA X)による

応募可。応募作品には「宿題」及び氏名

(ふりがな)・住所・年齢・性別・職業・

郵便番号・電話番号など明記のこと。雅

号の場合は本名も書き添える。雅

出品料—無料

応募資格—年齢・職業・性別・国籍は不問

発表—平成13年8月、入賞者に通知。

賞—大賞1点・奨励賞5点・佳作賞若干

応募先—お問い合わせ

「茶・堀川」松江市経済部観光文化課

690-85440 松江市末次町86 Ⅸ(08

52)55-5293 FAX(0852)55-5553

「渡船・桜」尾道市教育委員会文化振興課

722-8501 尾道市久保1-15-1 Ⅸ(08

48)25-7367 FAX(0848)25-7293

「腕・船」今治市教育委員会文化振興課

794-8511 今治市別宮町1-4-1 Ⅸ(0

898)36-1608 FAX(0898)25-1700

「温泉・椿」松山市企画財務部国際文化振興課

790-8571 松山市一番町四-7-2 Ⅸ(0

89)9486634 FAX(089)943-9001

「龍馬・よさこい」高知市教育委員会社会教育課

780-8571 高知市本町5-6-13 Ⅸ(08

88)22-6394 FAX(0888)23-9361

◎「宿題」によって応募先が異なりますので

要注意。松江市民の方の高知市への応募な

ど、どの「宿題」を選ばれても構いません。

◎一人でも多くの応募をお待ちします。

主催 文学ルート形成推進協議会

TEL0848-25-7367

本社 一月句会

一月六日(土)午後五時半

アウイーナ大坂

小寒の六日、百八名の参加者を迎えて、初句会はにぎやかに定刻開催された。会場金剛の間では、直前まで結婚披露宴が行われていたという吉日である。

はじめに昨年度月間賞杯永久保持者の川上大輪さんにカップが贈られ、皆出席者には天笑主幹揮毫による色紙45枚が配られた。また特別に初出席者7名に記念の色紙が贈られた。続いて橘高薫風名譽主幹のお話に入る。あらかじめ麻生路郎師他川柳家による正月の句20句のプリントが配られている。

川柳生活45年を振り返り、路郎精神の片鱗を話し川柳の御先祖を徳びながら、名譽主幹の立場からひたすらに川柳塔の発展を願う。

路郎師語録の一つ「命ある句をつくれ」には、後の世まで残る句が命ある句であるという解釈もあるが、自分は、その時その時の命を燃焼させた句を命ある句と解釈したいと話し、今後の川柳塔誌の充実を願って話を結ぶ。

月間賞は細川稚代さん(和歌山市)に輝く。
(司会―遠野) (記名―朝子・月子)
(受付―寿美・義) (清記・義)

席題「一」 嵯峨根保子選

元旦から言いたい事が一つでき
悔いのない一生でした仏さま
静々と菊一輪を捧げおり
バツ一でひと皮むけて来た女
一本のビールを夫婦で持て余し
マイナスの一から始まる別世界
一日がこんなに早い菊薫る
孤独でもよいやっぱり私一が好き
けなげさを盲導犬に見る一途
一枚の名刺大きくものを言っ
生一本だからうだつが上がらない
一ツ橋出たが今ではラーメン屋
浄財は十円 鐘を一つ撞く
一番が総て良いとは限らない
あの人に逢う日一枚薄着する
先頭の椅子で孤独をあたためる
一番いい顔して見える赤ん坊
一ランク下げると道が広くなる
凝り性で一から十を知りつくす
一月一日遺言状を書きかえる
ふぐだけは一流店へ食べにいく
ええ女初心だんだん危のなり
つぶすのが一番うまい象の足
一が好き日本一に世界一

恵子 あやめ 瑠美子 萬的 尚士 比呂志 重人 達子 朝子 朝子 尚士 欣子 哲男 鹿太 真理子 澄子 一風 寿美 美代子 希久子 義子 天笑 度 弘風

一を見て二を見ないからすつこける
その中で一番紅いバラ贈る
いのに普段着のまま顔見せる
肉太で一の字書いて暮れている
一途さが好きだったのはむかし
一本で峠を分ける杉が立つ
一山に盛った鯛に僕が居る
正月の酒は一番うまいなり

住

一本の樹になりたくて山を出る
わたくしが一番大事だと思っ
一の糸響き道行き雪になる
ひと目見た時から赤い糸のひと
一枚の白紙とはなし長くなる

人

ライバルの一途さに負けたなと思っ
一冊の絵本少女を変えてゆく
鉛筆の長さよ人の一生よ

軸

はじまりにしたら馬齢のかるいこと

兼題「テーマ」

石原靖巳選

二十一世紀のテーマを絞る初日の出
斬新なテーマに社運賭けている
白熱の論議テーマが欠伸する
酒と言っテーマに何時も弱い僕
主題曲聴くと浮かんでくるシーン

鹿太 つづや 隆盛 ダン吉 賢子 紫香 勇太 笛生 かげお 深雪 楓楽 天笑 いわゑ 千里 雅文 大輪 螢 久峰 充子 五月坊 正坊

永遠のテーマ義理と言う絆
色褪せたテーマやっぱり捨てられぬ
テーマを絞れば見えてきた光

三年も同じテーマの受験生
ITがどうのとは僕は蚊帳の外

この国のテーマはいつも揺らいでる
現実のテーマを知っている背中
テーマの深追ひ迷路で沈黙し

大胆なテーマみんな無口になっている
テーマから外れた話がおもしろい
訳ありのテーマ余談で逃げをうつ

永遠のテーマを抱いている宇宙
先走るテーマにあつた落し穴
ひとつまみ塩を効かせておくテーマ

太公望のテーマは鮎にたどりつく
逆風にテーマ霞んでいませんか
テーマからずれて毒舌うろたえる

明日というテーマ温めている枕
テーマソングで顔みな揃う朝ドラマ
終章へテーマを持って生きていく

小説のテーマで分かお生人柄
究極のテーマは今や安楽死

テーマには合わぬ眼鏡を試している
迷路から抜けるで消えていたテーマ
しなやかかかテーマ信濃の国の知事

熱弁がいつかテーマをそれて行く
テーマ未だ抱えたままで古稀の初春
親と子のテーマが少しずつずれる

ホームページへばくのテーマを打っておく

雅文

稚代 大輪

比呂志 弘風

つづや 尚士

恵子 愛論

冬葉 重人

勇太 万の

朱夏 楓楽

ダン吉 恭昌

洋 一風

セツ子 三男

ふりこ 大輪

とし子 倫子

房子 吐来

鹿太

雅文

達人のテーマ孤独と対話する
ぬくもりの民話テーマに村おこし
新世紀政治のテーマ見える弾み

美しく老いるテーマにある弾み
ポケットの中でテーマを温める
何となく生きてテーマの外にいる

掘り下げたテーマに重くなる命
生きてゆくテーマへ明日の米を研ぐ

永遠のテーマと想う死の美学
テーマなどどうあれ僕はマイウエー

新聞を開いて幸せを探す
開かない傘風花が優しゆうて

素うどんを出されて固い口開く
新しい世紀の釜の蓋が開く

臘梅が咲きめぐりくる震災忌
梅一輪ひらいた枝に絵馬を掛け

決断は今だ遮断機開いている
秘仏開帳大したことは無いやんか

鼻薬効いて裏門開けられる
お開きの声に注ぎ合う残り酒

医学辞典開くと不安増すばかり
文明開化インターネットの不埒もの

兼題「開く」 木本朱夏選

軸

天

地

人

弥生 風云児

武庫坊 朝子

ふりこ 美代子

アキ 寿美

アキ 寿美

天 諷云児

剛治 満津子

久峰 章久

正坊 美代子

諷云児 風云児

金太 恭昌

遠野 希久子

とし子

とし子

とし子

ひとり旅ころ開いた国訛り
窓開く今日と仲良くなりたくて
てつちりて寒い心を開きあう

開運の兆し信号青つづく
開店休業前も後ろも道がなし

十時開店もう待っているパチンコ屋
開かれたドアはわななかも知れないぞ

歯医者のさんの武骨な指でせまられる
緊急事態非常扉が開かない

淋しさにふと開けてみる玉手箱
バンドラを開けたがるのはお人好し

箆袋開きこ当地ソング聴く
千本のバラで開かぬドアがある

古日記開くと風の音ばかり
見開いて目に新年の風入れる

花開くかすかな音を待っている
好きな本開く楽しみ恋に似て

のひらの紙風船とあとひと世
こちらから開くとはなし易くなり

深夜便へ開き直つた不眠症
泣くときは蛇口いっぱい開けておく

川の字に寝てやる心開くまで
降りる人無くても電車扉開く

新世紀なり第二幕なり開けゴマ
梅開くまでの冷気を自愛する

財布開けたら撒きたい癖があり
過去帳を開くと揺れるむしろ旗

キャラメルを蓋を開くと子供部屋

一風 真理子

泰子 義

二三 笛生

寿美子 千代

雅文 陸子

弘一 正雄

いわゑ 楓楽

真理子 ダン吉

深雪 保子

月子 西

千里 鹿太

笛生

薫風 西

天笑 楓楽

岳人

人に
にぎりこぶし開くと肩が軽くなり
星子

地
ドアチェーンかけて私の解放区
保子

天
親展の封を開くと春の音
泰子

軸
満開の花の淋しきなど知らず

兼題「仲間」 安藤 寿美子 選

公園に仲間が出来たべピーカー
充子

仲間の輪ころろ充電してくれる
剛治

別れ際仲間で次の旅プラン
庸佑

あけつびろげな仲間同士の河内弁
萬的

以下もなく以上もなく凡仲間
勇太

仲間から外れて象の孤独な死
寿美

風雪に血判状さえ仲間割れ
哲男

酒ぐせの悪い仲間も連れて旅
笛生

頼もしい仲間一人医者が居る
柳宏子

何時見ても仲間だ菜っ葉漬けている
篤子

解決のいとぐち仲間から貰う
岳人

仲間意識が強すぎ中に入れない
昭子

よく喋る男を仲間からははずす
星子

一人嫁き二人嫁きして仲間割れ
金太

スクラムを組める仲間とボランテア
修

携帯を一人も持っていない仲間
義
進歩せず猿の仲間で終りそう
武庫坊

蝙蝠の仲間意識は信じない
朝子

闘病の仲間と夢を語り合う
深雪

仲間から礫が飛んで来る不況
靖巳

飲み仲間恋をしたのが抜けてゆく
弘一

仲の良い仲間だらうか蟻の列
睦子

影踏み仲間ちりちりたそがれる
陸子

抜擢の日から仲間が遠ざかり
尚士

仲間四人ホームへ上げる車椅子
シマ子

狸までウチの仲間の顔で来る
章久

仲間には女嫌いがいて困る
正坊

ポケットの中まで知っている仲間
しげお

神様と仲間になったことがない
楓楽

返り血をいとわぬ仲間いてくれる
ダン吉

血を分けてくれる仲間が居て温い
朱夏

仲間同士と思っていたひよこ
哲夫

本当の仲間は疵をなめ合わぬ
楓楽

仲間だと勝手に信じてるピエロ
あやめ

落ちこぼれ仲間も乗せて縄電車
英子

甘言も苦言もくれる仲間です
稚代

兼題「ほめる」 板尾 岳人 選
裏方にも届くフィナーレの拍手
充子

思惑があるから嫁がほめている
照子

ほめられたことに溺れている未熟
剛治

ほめられた方へ個性が伸びてゆき
満州

女房がほめているから大丈夫
瑠美子

お隣をほめると機嫌悪い妻
正雄

ほめられてやっぱり負けたなと思つ
義

試着室の鏡はいつもおべんちゃら
正坊

ひたすらに自分をほめて聞かせる
楓楽

汗まみれ今日の私は褒めてやる
ダン吉

親友はめつたに僕をほめません
天笑

ほめ言葉さらさら嘘が見抜けない
希久子

ふるりの母は今でもほめてくれ
星子

逃げられぬように上手にほめてくれ
美代子

ほめ言葉乗せられ踊り抜くピエロ
比呂志

ほめと下さいじんとところに響くよう
比呂志

夫には定年までを誓め称え
保子

友達的主人ばかりは誉め称え
ふりこ

べたほめに乗ってはならぬ落し穴
伽羅

ほめられて少し背伸びをしてみよう
房子

ほめられて路傍の石も光り出す
懸命に生きる私をほめている
動くかも知れない脛を舐めさせる
ライバルをほめて戦いから降りる
正直と税務署からも褒められる
時々ほめてやらぬとすねる妻
長所まずほめて短所に釘を打つ
さりげなく誉めたことばに花が咲く

靖巳
ルイ子
大輪
笛生
尚士
弘風
諷云児
一步

よくほめる各だ買う気は無いらしい
ほめられて調子はすれになる音符
ほめられるとすぐに背伸びをする財布
ほめようが無いので酒をついでおく
ほめ言葉の中に一本針がある

仁清
朱夏
楓楽
武庫坊
希久子

寝め殺しの戦いつづく立ち話

陸子

地

天

軸

ほめられてくずれはじめた太い眉

ミレーの絵やさしい人にほめられる

夕焼けをほめたりしないにこり酒

兼題「続く」

河内天笑選

お叱りが裏まで続くアンケート

幾つもの不幸続くと強くなる

あこがれの世紀へ続く百八ツ

梅サクラはたとと続くありがたさ

狂い咲きが続く温暖化がつづく

続編も続々編も君が好き

平凡が続きますよう初詣で

リストラに重たいローンなお続く

授業中も親指動きメール中

賀状だけ往き来している老いの仲

よく続くねとジョギングをほめてくれ

陸子

扶美代

充子

照子

紫香

一二三

扶美代

希久子

泰山

清山

満州

吐来

月子

比呂志

春

青汁を飲んで夫婦を続けよう

続編のドラマ華麗な離婚歴

寒い日が続いてお神に足される

続投へ鍛えておこつての裏

新世紀へ引きずって行く恋一つ

強き愛ときにはもうく生き続け

続柄を根掘り葉掘りと聞く世間

世紀越え延々続く娘の電話

まだ続きあるのか妻が怒ってる

続けてさえおればなんとか道開け

珈琲は濃いに話まだ続く

退屈が続くと愚痴が多くなる

凡人のままに続編へと移る

不整脈つづくネクタイした羊

ふるりを捨てた日雪が降りやまぬ

朱夏



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

岬川柳会

八十田洞庵報

不機嫌をうすうす感じ逆らわぬ
 病状をうすうす感じだまり込み
 良心を写す鏡が眩しすぎ
 老いてなお時に眩しい我が師あり
 前兆はあったと後で大地震
 速くてもうすうす気づく子の暮し
 ライバルが眩しく光る日の落差
 重い足引き摺りながら果たす義理
 秋月に恋語り合うか影法師
 プランターの葱とひっそり生きている
 寶石の眩しさよりも心の美
 土俵入り横綱眩し晴姿
 リストラをうすうす感じ脱サラに
 うすうすは六月とわかるウエディング
 うすうすは気付いていたとあとで言い
 不仲説うすうす母は気づいてる
 連れ添うたいびきかすかに聞く安堵
 うすうすと育ちが見える身のこなし

年子
 とみ
 勇
 茂平
 昌夫
 令子
 幸子
 芳子
 勝
 蛙城
 ユミ子
 悦子
 孝子
 里子
 和子
 美子
 みつ子
 みやこ
 俣子

ライバルに手の内うすうす感づかれ 洞庵
 川柳塔おとり(前月分)原 みを報
 トンネルを抜けたら赤い靴買おう
 自分史は長いトンネルだと書こう
 わたし貫くトンネルを掘っている
 トンネルを抜けて同心円になる
 トンネルに入ると脈が早くなる
 トンネルが重くわたしの出納簿
 トンネルに長い荷物は置いてきた
 トンネルの出口で欲がまたひとつ
 トンネルを出ると故郷の風になり
 トンネルを抜ける思案の苦い酒
 トンネルを抜けたら落ちた目の鱗
 トンネルで窓に映った顔直す
 吉報を待つて眠れぬ多弁な灯
 不器用な灯で影をもっている
 バラは幻想愛の灯は消えた
 一杯のワイン希望の灯が揺れる
 漁り火が水平線に陣を張る
 漁り火が海を銀座にしてしまふ
 どん底でその一言が灯をともし
 外見で値踏みされたおともなし
 木犀があるなと思つべダル踏む
 踏み台の高さを借りて手が届き
 踏み出した新生活に梳ふたつ
 兄ちゃんが足踏んだよとまたけんか
 足踏みのオルガンの音母の声
 麦踏みで私の恋は横あるき

洞庵
 千秋
 登美
 羅奈
 愛恵
 風花
 艶子
 征子
 孝子
 由多香
 伝住
 黙光
 憧子
 正人
 邦昭
 雄々
 幸次郎
 義弘
 和子
 庸二
 せつ子
 舎人
 一弘
 雅通
 富貴子
 水楊
 道子

踏み出しは良いがその後続かない
 ホケふうじ地蔵のやさし顔なでる
 煩惱は捨ててきました仁王様
 小春日に摩尼のお山もい笑顔
 岸和田川柳会 長谷川呂万報
 気付いても気付かぬふりで好きな人
 気付くのが一秒遅いと命がけ
 好きやから気付かぬ振りをしていよう
 要領をおぼえて義理のなき気付く
 気付いたら飢餓が進んでいた地球
 口癖を孫にまねられ大笑い
 意地張った結果寂しい父の背
 日銀の口癖になる低金利
 最善を尽して神の裁き待つ
 結果見て値段がきまるプロ選手
 やり抜いた汗の結果に金メダル
 この結果先ず一番に故郷の親
 洋画見たあとは紅茶と決めてやる
 山小屋に啜る紅茶の夜明け前
 ミルクティー飲ませて悩み聞いてやる
 紅茶でも飲んで結果を待つゆとり
 紅茶だけ飲んで終った老いの恋
 ゆつくりとバツハ聴いてるレモンティー
 一杯の紅茶がうまい旅がえり
 損得の話になると目が覚める
 笑いの輪途切れたとこに覚めた人
 熱覚めてなんてことない只の人
 眠りから覚めずにはいたかった石器

仁子
 清子
 彰雄
 紀子
 鹿太郎
 穰一
 さよ子
 けい子
 ダン吉
 房枝
 武
 昭二
 仁緑
 東雲
 辰郎
 呂万
 洋
 笑司
 弘子
 盛之
 路子
 俣子
 狸村
 東吉
 蛙城
 みつ江
 苑子

師の一喝やとわたしの目が覚める
つまずいて目覚めましたとUターン
酔いざめの水のうまさには知らぬ祖母
目を覚まし命の重さ噛みしめる
酔い覚めの水うつつなり口移し

甚 一
萬 的
白 光 子
金 太
柳 宏 子

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

残り火を優しく包む夫婦愛

美 弥 子

さりげなくしつかり包む下心

重 人

包み直し包み直してまだ迷い

湖 風

路地に住み馴れて情けに包まれる

メ 女

つぶやきの静かに落ちる砂時計

欣 之

風紋や有情無情のくりかえし

元 紀

泣き砂の擬音は卑弥呼だと思ふ

一 風

玉砂利へ玉音と僕埋めてある

シ マ 子

ダンスに挑戦女の足を踏みながら

美 代 子

百歳へ挑戦をするスニーカー

太 郎

挑戦のころ履歴書知っている

晋 吾

国会も然り鳥合の衆である

雅 文

ポールベンの赤は然りを知っている

良 子

酒嫌いの男嫌いと酔っている

た つ お

懲戒免職ただほど高い酒はない

猪 太 郎

オアシスで安らぐ酒は我が命

ば っ は

秋祭り酒たっぷり父の墓

愛 論

銘柄にこだわりまへん酔える酒

は つ 絵

ローズ川柳会

山 崎

君 子 報

嫌いととは言えずするづいて行く

は つ 絵

嫌いかと聞けば好きよとあまのじゃく

ミ サ ラ

回り年巴さん嫌いと言うつとれず
生きて幾度壁にぶつかり裁かれる
壁の耳に聞かせる言葉さがして
前科一犯壁の落書まだ消えぬ
紙飛行機南の風で壁こえる
壁にもたれて遠い日おもう過去未来
父という壁がもろくて暴走す
宗教に壁あり子が戦生む

藍
い わ ゑ
雅 子
哲 子
義 子
み つ 子
貴 代 子
武 庫 坊

運動会の子の上も澄んだ空
近すぎて大事な物を見失う
秋の夜の月眺めてもながめても
足取りが軽い佳いことありそうだ
不整脈はたと命に向かい合う

澄 子
キ ク 子
ト ミ エ
年 代

三幸川柳教室

三 宅

保 州 報

記憶にも間違いのある戦前派
記憶装置外れた姑の手毬唄
森林の記憶に残る木挽唄
パッチワーク布それぞれにある記憶
薄れゆく記憶朱墨で描き変える
喪つた記憶を探す蠲雲
忘却へつなぐ記憶の句読点
金メダル逃がした人が様になる
人様のことなら言える何でも
パッチワーク人間模様見えてくる
神さまに切手も貼らず出す手紙
様々な絵を描き旅はまだ続く
好きだからちよつと様子をたたく
六根清浄閻魔様にも媚を売る

正 匄
三 千 子
伸 二
朱 夏
満 洲 子
美 智 子
昭 枝
か ず 子
み ね
章 子
和 子
当 代
千 秀

様々な顔で職安混んでいる
生き様を刻みつづける面一つ
今世紀最後さいごと乗せられる
時代にも乗れず神様横を向く
もう島へ戻れぬ不安乗せた船
終着駅に近いが景色変りだす
おだてられすぎ乗る癖のあるカード
親指を時流に乗せてiモード
重たいなあ妻が背中に乗っている
澄んだ瞳でみつけた僕の青い鳥
捨てた犬の黒い瞳に負けました
手術した瞳に埃目立ちすぎ
めはり寿し食べる瞳にほれなおす
瞳を閉じて描ける故郷の山や川
アイバンク優しい瞳だと思ふ

鉄 治
さ ち 子
栄 之 進
健 三 郎
嘉 平
正 一
登 美 代
公 子
秀 男
豊 太 郎
和 代
美 子
義 雄
町 子
保 州

佳句地十選 (1月号から)

北 野 哲 男

背がこும்曲つてたのか影法師
年金に依存している予定表
フンフンと聴いて下さりやもう名医

坊 太 郎
蛙

不況風 会うたび違う名刺くれ
ロボットにリストラされた作業服
シレンマが隅に居座る日記帳

悦 子
武 庫 坊
て る 坊

喝采はないが一筋道を行く
兄弟にエリートが居る不仕合わせ
何事もなかったように卵割る
笑つても泣いても同じ地に還る

青 湖
澄 子
婦 美 枝
芳 光
さ くら

捨てられた日からベットの瞳が濡れる 桂香

川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

投げつけた石は即座に跳ねかえる
出直しの一步はやはり骨がある
誰よりも母にあげたい勲一等
嫁が来て古い親戚切り捨てる
老いを見る優しい面をつけ通す
病院へ行くに気になる髪かたち
定年になって流れを変えてみる
河豚鍋を囲む運命共同体
サンタさん大きな袋負うてくる
スケジュール満杯妻は今日も留守
急ぎ立てて急ぎ立てられて妻師走
二十二世紀迎る赤子の恵比須顔
長電話猫が脅を持ってゆく
立ち直る女に風が風いでくる
落葉焚く鳴門金時句いだす

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

マフラーが似合っていると上手言い
マフラーはいらぬと老いの反抗期
なれそめは賭トランプのみかんから
第九の稽古一息みかんむく
みかんむく女の爪にある野心
慕情ひたひたみかんの花が咲いている
知らんものになんてかわてに目で合図
年のせい言訳にするわたしです
これ以上以下でも私駄目になる

文 仙 寿々女 放任 まさる 勝 ひかり いさむ 坊太郎 あきら かがり 貞月 輝夫 吟笑 マツエ 治延 十四郎 純 孝一 弘治 満寿蔵 和子 一笛 千恵 久子

私の喉にわたしが惚れている
赤裸々に命を刻む私小説
わたくしの秋を葬る大落暉
会えはずぐ私の意地が逃げてゆく
私も言い分がある遺伝子よ
テールを磨いて私の誕生日
余白まだ白いまま私のわたしです
ときめきも失せて他愛のないドラマ
雁の列見上げて並ぶ團児たち
屑籠を覗く葉は飲んでいた
年々歳々かまえるほどでない師走
能面の愛は無表情のまま傾ぐ
お陽さまが花よりでかいクレヨン画
水溜まりに揺れる自分を跳び越える
短日のおんなの瞳かなしけれ
ブランコがぎいぎいと鳴るぼくの心臓
高層の窓から見える渡り鳥
そらんじた口上げしとぶ門構え
迷路だと知らずに歩む生きる道
言い訳の上手なわたくしの帽子

竹原川柳会 時弘 一路報

あの人に会う早起きをしています
手紙書き終ると虹が出ていたよ
この思いピンクのメールで送りたい
五七五の短い文に惚れている
九州の妹の手紙箱の中
柳友の絵手紙とてもユーモラス
妻へ書く封書の様がてれくさい

夢之助 歌子 恵子 富江 郁子 紫香 しづ子 義芳 東園 昭三 年代 半蔵門 静 比ろ志 薫 光穂 節子 沙置子 武庫坊 芳子 太千 枝 蘭幸 敬子 正宏 喜久恵 蝸牛 不朽

絵手紙のカボチャに母の重量感
日本一短い手紙読んで泣く
同級生みんなスローになつて
学生に声かけられたいい朝よ
旅人の気分て歩く町並みよ
新世紀迷つてならぬ道がある
限りない道を限りなく歩く
慰めの言葉が出ない別れ道
すり減つた石段があり塩の道
黙もくと蟻は白旗など揚げぬ
一等の旗に無縁で来た私
ガングロになつて工事の旗を振る
千切れるほど振つた小旗の嬉しい日
この次は勝つ白旗の透かし文字
遅過ぎた白旗でしたきのご雲
日の丸が一番似合う日本晴れ

川柳後楽吟社 從野 健一報

いろいろあつて蟹も真つすぐ歩けない
猿は見ている人間の馬鹿笑い
父母を知らぬブランコ乗りである
風と雲読んで船出の仕度する
戦争と平和銅貨の裏表
夢だけで終れば罪のない話
虹掴む確かな手ごたえ二歩三歩
育つ芽のひとつにいのち賭けてみる
曲線が絡んで夫婦の和が崩れ
北からのたよりきびしい冬の彩
肩にがる昔の傷が目覚めたか

万年 静風 孝枝 栄恵 比呂子 夏喜 貞子 喜美子 笑子 房子 幸子 力 一枝 菁居 節夫 一路 哲郎 道博 草風 健一 邦季 忠成 美智子 桃風 青銅 柳五郎 照路

先頭で歩く歩幅は自己主張
厚底で超々ミニに眼を奪られ
退院日輝く朝日がまぶし過ぎ

高柳川柳サークル卯の花 川島風云児報

ひたむきに走ろう逆転の道だ
逆転の一大スタンド越えてゆく
寝耳に水逆転してた水面下

胸に巻く白い包帯赤の疵
胸の底あな白に告げていいですか
秋惜しむ胸の疼きと人の波
胸の中善と悪とが同居する
そつと手を握り返したのが返事
核捨てて手を握りたい新世紀

妻の味グルメに優る握り飯
握り返した力が嬉しい手術あと
ニギニギに幸せ願うちちとはは
自分史の起伏七色唐辛子
自分史に軍靴の音がするページ
自分史に小さな嘘をちりばめる
自分史は心の奥で暖める

自分史のところと一輪咲いた花
自分史の中に輪咲いてある私
あこがれたラストダンスは宙に舞う
あこがれた人の別れは美しい
あこがれのままで終った共白髪
どんぐりははずーっと真珠にあこがれる
思つたほど役に立たない天下り

博友
佐加恵
哲郎

吉之助
庸佑

満寿藏
あやめ
秀夫

治三郎
よ志子

五月
無祿

澄子
高栄

重人
尚士

泰雄
比ろ志

義一
正坊

稲子
芳子
メ女
活恵
波留吉

再会を果たしてからの笑顔です
ふり向けばご恩をうけた人ばかり
平成のマジック二千円札消えた
火を噴けば怖い噂の吹きだまり
ヒュルヒュル枯葉は女だと思つ
ラップしてそのまま返す売り言葉

大原川柳社

矢内寿恵子報

底辺に生きて悔いなき昨日今日
酔いつぶれ昨日のことは知らん顔
昨日より流れをかえる女文字
移り香が昨日の人をしのび寄せ
失つた昨日を今日は取り戻す
昨日の悔い胸におさめて朝の靴
昨日まで元氣だったと聞く訃報
昨日今日二度と来ない日空の青
無駄づかいたも諭吉に睨まれる
無駄のない亡母の手料理しのばれる
無駄骨でなかつた孫のあの笑顔
百円にひかれて無駄を買ひ集め
無骨な手無駄にはしない繁盛記
子供部屋覗くと無駄が泣いてる
年金が無駄をするなとにらんでる
昨日習つたことは忘れず胸に秘め
毎日を無駄には出来ぬ老い二人
躓いた昨日無駄にはせぬ覚悟
小半日睦にすわつて無駄話
無駄にめし食つてはいない鉤屑
無駄だとは思いつ母の返し針

節子
紫香
求芽
靖巳
晴美
しげお

あやこ
さちこ
玉恵
辰江
妻子
悦子
巴子
喜美子
みさえ
南花
たづ子
ひでの
はるみ
しず
昭子
静子
絹子
あすなろ
はじ芽
寿恵子

川柳ささやま
酒井
靖子報

餅搗きの気合いが合う丸い餅
血液さらさらきれいな正論を吐く
ありがとうごめんなさいで家族の輪
印鑑を押しした軽さをもめる日々
めだか二匹器用にこの世泳ぎおり
もう過去は許して軽い骨拾う
無器用に生きる男の背が淋し
核家族今度は夫の不平吐く
川向こうおーいと呼んでみたくなる
軽口が火種をまいて大ごとに
老化ですと若いドクター軽く言う
家族風呂仲間になれぬ独り者
独り身の軽さへ誘う悪戯魔
ちよつとでも軽いを選ぶ旅みやげ
苦しさを軽い笑顔で紛らわす
退屈へ軽いジョークで笑わせる
ロケットに僕の器用が通じない
世の中を器用に渡る火の女

純子
恵美
多美子
美智子
八重子
とみ子
つや子
かほる
君代
毬子
房江
泰子
美緒子
美紗子
かつ子
すず子
可住
靖子

川柳塔みぞくち 小西 雄々報

音たてて沢庵食べる歯が欲しい
大根の白さに心恥ずかしい
何よりも大根うまいおでん鍋
大根がおふくろの味呼んでいる
干し大根木枯し吹いて甘み増す
北海道で獲れた秋刀魚に下ろし添え
大根と思えぬ味へ人の知恵

智恵子
久子
豊枝
公美枝
和代
信敬
鈴枝

沢庵を持ち寄りお茶を汲みかわす
大根のおでん味には自信もつ
大根がぐつぐつ煮える平和な日
青首の大根が吐く辛味知る
大根畑の大根の中木偶もいる

川柳塔まつえ吟社 恒松

町紅報

価値観はどうあれ酒を酌み交わす
酒飲みの家系で酒は切らさない
労りをくれる酒ですほっとする
うちで飲む酒はうまいと妻に言っ
お酌する女が変えた酒の味
湯豆腐がゆれ出す燗のころもい
大安のドラマケーキが甘すぎる
かみついた猫にも猫のドラマあり
日常がドラマ恋する女です
一日のドラマ夕餉の膳囲む
笑顔にはドラマを刻み込んだ靴
短編のドラマが残る温泉地
夢追って再び空へ奴風
再始動明治の知恵も少し入れ
再発の心配無いと太鼓判
子の便り再び読んでありがとつ
切り替えて再び登る坂がある
震災に再度の闘志もつ湧かぬ
牛乳とパンで男を飼いならす
白鳥と絆をつなぐパンの耳
手づくりのパンに愛が詰めてある
パンが売れ米の文化がやせて行く

弘子 静江 康女 正光 雄々
日出子 博子 きみ子 茂美 義良 秀子 多賀子 哲雄 聡美 忍子 浜丘 与根一 紫晃 太泡 長吉 満江 知恵子 煩悩児 久枝 昭二 智恵子 桂子

料理せぬ嫁が上手にパンを焼く
パン食が嫌いな犬と暮らして
一粒の葉が恐い顔をする
病院の薬信じて飲んでる
親思い薬飲んだか声かかる
呑んだのに薬まだか母が言い
旅籠の場所は決めてある
百薬の長に今夜も機嫌いい

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

札束がしゃべって僕を眠らせぬ
はつきりとも言う枕はたたかれる
血の濃さが決めてはつきり俺の子だ
怒り声はつきり出せる年間近
脳天まで悲しみ走る計報受け
はつきりして内財産分けときな
親が子を親殺す大変だ
大変だ自然と遊べない子供
永田町いろいろあって大変だ

サークル檸檬

小林

一夫報

私でも地下にマグマを溜めている
大風呂敷上げ自分に鞭を打つ
残量も知らず油の灯をともす
地下街は答えてくれぬ現在地
知らなんだ過去巻き戻す通夜の席
いいことの無かった今年 死刑にす
デジタルに暮れると残り残されぬよう
無機質な季節が巡る地下の街

昌枝 すみこ 静恵 政子 幸子 注湖 叮紅
靖巳 遠野 あずき 哲夫 智恵子 義子 希久子 楓楽

地のマグマ激しい恋はしないでね
私の中に翔べない鳥がいる
たそがれて恋のレシビも忘れたり

川柳クラブわたの花

大内

朝子報

病んでから人の痛みへ目が開く
怖いけど開いて見たい内申書
一時の恥が未来を開く鍵
新聞を開くと見える地獄絵図
祈り通じてやっつと峠を越えました
益子焼笑顔が浮かぶ子の湯呑み
人権の壁に正当泣かされる
母からの手紙を開くこの鼓動
子も巢立ち靴もピンクでタンゴ踏む
農をつがぬ子に哲学の案山子佇て
この人と越えたと決めた山がある
花器だけがやたら目立つて花わびし
年金を首の据わらぬ孫が食い
三世代開けばなしの振舞いで
腰かがめ同じ目線を立ててみる
命さあめれば必ず開く道
秋開く落葉が庭を敷きつめた
閉ざしたころ開いてくれる国訛り
コスモスを眺める人の優しい目
川柳で心の窓を開け放す
エレベーター開き十年ぶりの顔
ストレスを大阪弁でまぎらわせ
お開きの挨拶見事盛り上がる
老い二人おすそわけする垣根越し

いわゑ 澄子 房子 明 八寿子 宏 剛治 ミツ子 道子 春江 幸枝 一風 隆盛 美千子 恭一 友甫 正純 朝子 一道 賢子 ますみ トシエ まさと 春江 知佐子 美代子

宵化粧濃くはないかと星に問う

川柳唐津支部

久保

正剣報

民子

紅葉が遅れていたと戻り客

カレンター一枚のこる二〇〇年

明日が来ることを信じた児の寝顔

その昔まぶしく見えた古女房

告白の句はどうしても字が余る

人形の心がわりのない瞳

潮騒の音も馴れると子守歌

おくんちが済んで唐津は北の風

秋麗ら殿めぐる賊の塩

緩慢な詩囊を揺するべ切り日

巧言を外すともろい高い椅子

うぶみ川柳会

上田

宣子報

牟寿と言う笑顔の花が美しい

菊作り汗が文化の日に実る

木枯しのパワ―に景色動きだす

景色などどうでもよろし二人には

ひと晩で変ってしまう冬を撮る

来し方の長い景色が浮く板目

七勝八敗の男の晩景

笑顔して忘れさせない糸切歯

とんかつヘタテコナイフ秋を切る

後ろから見られてしばし肩を張る

しばし待てウラン残土がほっとかれ

ロゼワインしばし現実から逃げる

飢えの匂いしばし獣になってゆく

タミ

晴翠

輝夫

勝視

水笑

高明

幸夫

虹汀

正剣

四郎

ユリ子

かつみ

良男

一枝

静生

登美枝

石花菜

也恵

雄人

健一

天雀

ひろこ

螢

捨て石もしばしかたずを呑んでいる

虫のいい返事あつげらんかと聞く

虫追いを兎らが継いでる里の声

腹の虫おさえて友の手を握る

スズ虫が孫と奏てる童歌

腕枕しばし逃走中である

城北川柳会

川久保睦子報

組板に乗せられCTに刻まれる

八起き目にだるまはどんな顔になる

つるべ落しひとり暮らしがちと淋し

そはの花実りの秋が楽しみに

ストレスが消え行く今日の金木犀

母親の背中の中の温み知らない児

かくれんぼ早く見つけて日が暮れる

二十歳の天狗の鼻は脆く折れ

捨て切れぬおんなを燃える葉けいとう

理屈言う子と向き合せて口つむぐ

蝶々さんまだまだまだ笑わせてはしかった

目に浮かぶ故郷の秋母の顔

約束を違わず咲きぬ曼珠沙華

里帰りに私待つてる祭り笛

雑炊に工夫をしてる妻の味

ざりざりで明暗分ける好勝負

ざりざりの歳であしたに延ばされぬ

女の手はまだまだ延びる生命線

譲られた席ほのほのと温かい

荒れ狂う怒濤も漕いだ母の船

芳江

あづま

くにお

華子

天人

黙光

宣子

政子

東雲

登美子

美代子

寿美子

ただし

求芽

藤子

朝子

修

達子

久留美

春蘭

トヨ子

はじめ

昭子

とし子

順三

一枝

志華子

イメージを噂が変えてゆく怖さ

うっかりとのつたたくみな口車

ひとり居に中途半端な思いやり

タイピンに老いもお洒落の猫目石

バツイチとバツイチだけと新婚さん

四捨五入すれば私が消えに行く

傷心を踊らす花と小人たち

棘のないバラです主張が通じない

三十年妻は時効を認めない

鴻毛のいのちと思う医療ミス

川柳会梨花

石上

悦子報

秋の雲夕日に照らす萩わたし

城下町萩本陣の客となる

萩の花こぼし枯野の風になる

深々と萩にお辞儀をされている

萩こぼれようと腕は解かない

座にははもつたないなくて萩のござ

萩焼の壺は一夜をどう過ごす

萩すすきさきさきように飽いてとりかぶと

白萩が同類項と頭撫で

ストレスで赤いしっしん鬼の顔

千羽目の鶴は楽ししくはねている

澄んだ目で親の矛盾をついてくる

また空を掴んで息をひとつ吐く

連れて行く頭の中の金庫番

涙こらえるすこしだけ背のびする

何もせぬばあさんの手は美しい

クロスワード脳が脱線してしまっ

道子

あいり

白峰

千鶴

倫子

高栄

典子

睦子

あやめ

公一

笑子

よしえ

美ツ千

芳光

孔美子

克枝

(勸) 石花菜

あき子

多哥由

美恵子

まさ子

幸代

久子

節子

クロスワードパズル酒の肴が出てこない
戒名入れてクロスワード完成す
ひこうきのつばさみたいなほくのうで
飛行機を降りて婆ちゃん強くなる
青空へ僕の飛行機ゴムで飛ぶ
放たれて小さい男を見ているよ
飲んでなら説明できる気がするよ
説明を酒の席まで持ってきて来る
説明がへたで手足を踊らせる
遣伝子の説明聞いた牛が啼く
神様の説明を聞く不公平

西宮北口川柳会 亀岡 哲子報

満員のバス見送っている孤独
ライバルの左遷へ送ることは選る
保険金かけて見送る鹿島立ち
反論は頭冷やしてからにする
引き算のともても下手な雪だるま
やじろべへ未練引き合っ赤い糸
暮引きは仏にまかせ今を生き
汐引いて僕の骸だけ残る
近すぎたばかりに油断した二の矢
健やかに家族が増える日が近い
近くまで来たから来たど父が来る
近い内妻の両親来ると言っ
われながら猿に近いと思っ日も
近すぎるスラブでいつも火傷する
理想などそんなに近くで見えますか
独り言手近な猫に話しかけ

やえ 完司 友真 重忠 行男 和歌子 修 一夫 蟹郎 忠良 伍悦子 哲子報 たず子 庸佑 無禄 能子 孝一 松煙 文 澄子 奮水 鹿太 一笛 求芽 美代子 武庫坊 江美

近いほど有難がらぬ神参り
ほろ酔って月を近くに呼びよせる
火の用心回り飛びつく熱い酒
久々のプレゼントあり古希となる
平成の浪士はいない自民党
風邪引いて薬十日もどうするの
釘を打つ音が違って十二月
空白の手帳が私を問い質す
年の暮れプロに顔刺りしてもらっ
大根だき今年の無事を感謝して
新札を選んで義理が一つ済み
カレー三日男我慢の限界だ
菊の香をはなれ夕餉の魚焼く
二人三脚いつも夫が先転ぶ

はまゆう川柳会 中後 清史報

味のある言葉に浸る帰り道
五十年僕を馴らした妻の味
味見して心にもないお世辞言
三世代同居で味に苦労する
年輪を重ねたしわに人間味
噛めば噛むほどに味出る人の良さ
人生の節目に厚い壁がある
空しさの心をかくす厚化粧
温もりの厚い情けで癒える胸
厚化粧落とした途端誰だっけ
前例がないと役所の厚い壁
無神論老いて信仰厚くなり
人情の厚さが滲む過疎の村

高栄 いわゑ 五月 富喜子 靖巳 哲嗣 千代 義子 トミエ 絹子 房子 春蘭 哲男 惠美子 利ほん サト美 光 国彰 公治 清史 修也 生米子 美佐子 平和 雅和 苗子

今日のミス生かして明日の糧とする
明日から会えない人の爪を剪る
明日起きて悩みが消えてたらいいな
下戸だから明日早いとそつと立つ
明日見えぬ農を追い打つ米余り
明日のため夕日が赤く燃えてるよ
美しい夕焼雲に明日をみる
まだまだと思っっていると明日

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

他愛なくさい話に蓋をする
あのゆれが誘っていると信じてた
夢誘うウインドーの中の赤い服
ささやかな倅せ三食昼寝付き
一瞬の光に消えた夾竹桃
ささやかな年金ぐらしへ税をと
線引きの中で生きているささやかに
光芒に心音確かに鳴っている
歓声を上げて生まれてプロイラー
川柳大阪 坊農 柳弘報

太一 泰作 佳子 さだ代 てる坊 登 雄造 悦子 聖子 惠美子 好栄 ちよえ はるみ かつ子 清利 博泉 白汀 劍山 民子 宏 喜楽 隆司 すがお

土俵際動かぬ証拠あきまへん
 古里に今も埋めてる片思い
 国なまり出てきて顔が赤くなり
 埋蔵金男のロマンかきたてる
 天国へ子約の切符発売中
 舵取りの上手下手から国揺れる
 花束にうずめる顔はいま笑顔
 国民が主役忘れてはいませんか
 指図して操っている憎いやつ
 夢の国バラ色ですかいい寝顔
 和やかな顔で外堀埋めにくる
 国産の味を忘れた舌になり
 国思う顔して私腹肥やして
 華咲かす王長鳴の世紀末
 五輪の空国旗嬉しい金メダル
 あしあとを月に刻んで病む地球
 九条を世界に誇るおらが国
 埋め立てた湾にも健気ムツゴロ
 母と子の隙間を埋めている会話
 折角のタクトに木偶が動かない
 てっぺんに登ると指図したくなる
 花たっぷり埋めて母の野辺送り

川柳塔なら 坊農 柳弘報

多香 信醉 芳童 川童 青道 章久 洛醉 美花 柳昌 希久志 鉄心 利武 本蔭棒 一風 まつお 一步 グン吉 金太 重人 笑風 柳弘

写経して済むほど甘い世ではない
 真ん中で飯面夫婦が写ってる
 舟宿の壁の魚拓がよくしゃべる
 古屏風古代を写す筆の跡
 主婦業に配当なくもよく動く
 大阪に五輪の夢を見る市民
 怖いもの見たさで真夜中を写す
 叱ってるように友呼ぶ国訛り
 国訛り交わせば風が立ち止まる
 生き写し遺伝子時代ヒトゲノム
 民法を読み直しての遺産分け
 農民の旗から土がこぼれ落つ
 自社株に妻は知るまい配当金
 南米の土に大樹となる移民
 胃カメラが写すわたしの古戦場
 傾いた社運無配の決算期
 放言に埋まりやわらか着地点
 魚拓から鯛は汚染の眼を向ける
 輪切りして写した脳にある不安
 民草と言われた頃の祖先たち
 歳なりに写してもらう二度目です
 演技などいらぬ解け合う国訛り
 戎さんに福の配当ねだる笹
 民事訴訟長い月日になるいのち
 人間の身勝手写すゴミの山

尼崎尾浜川柳会 田辺 鹿太報

あやめ 佳子 理恵 とし子 春蘭 春雄 美代子 惠美子 良一 むつみ 秋泉 茂雄 絹子 國治 隆盛 雅世 洋子 道子 和夫 美千子 卓

アメリカの風邪が気になる永田町
 掃いて散るまた掃けば散る並木道
 難聴ヘジングルベルが小うるさい
 宝くじ今度は暦見て並ぶ
 カレンダー我が家の四季を見て居たり
 財布まで風邪を引いたか小銭だけ
 雪しんしん雪ん子あそぶカレンダー
 カレンダーの花丸孫のデートの日
 わらべ歌さびしい時に口ずさむ
 嫌いやの音痴請われて黒田節
 ナツメロと言えは目の色かえる祖母
 傷心を包むコートが派手すぎて
 赤丸の曜日いぶかる妻の声
 青レモン気つぶの良さを信じよう
 恋風邪に浮かれ旅する冬帽子
 まだ欲があるから背伸びばかりする
 思い出を日記に残す歌ごよみ

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

幸子 江美 鹿太 尚利 哲嗣 龜与子 まさ 美智子 弘治 夢之助 正治 満寿藏 澄子 十四郎 諷云児 紫香 裕美 佐代子 寿子 英子 美子 桂香 富美子 正博

（夙）公子

有形無形モザイクしとこ受けた恩
モザイクの向こう美人ときめている
卵殻モザイク私の玉手箱

あの人が来なくて乗った終電車
ぎりぎり絞つて人間陶冶の詩
年金というぎりぎりの命綱

ぎりぎりやつと火のつく私です
投げ売りもぎりぎりの線心得る
ぎりぎりで尻尾を巻くと読まれてた

ぎりぎりの水平線はほくの位置
ぎりぎりの線で老後の旅をする
宿題が山積み二千年おわる

まだ未完喜怒哀楽を繰り返す
書く勇氣書かない勇氣まだ未完
十二色溶いて足りない未完の絵

完結篇読んで自分を取り戻す
完全に恋愛中とばれる顔
完全介護唱え福祉の灯が寒い

税金完納今年も年を越せそうだ
完売と書いて不況を刺激する
かわはら川柳会

客帰りと炬燵の心地よさ
吠える犬訪問客で声を変え
客を待つれん不況の風にゆれ

おいしかった旅の土産に風邪もらう
おいしさを一杯つめた母の便
おいしさにつられて出来ぬダイエツト

ここからは空氣がうまい無人駅
三男
稚代
信子
優子
射月芳

保州
岡公子
鉄治
あつむ
豊太
紀美女

紀久子
大輪
和香
和子
和重
よしこ

さち子
三喜夫
千寿子
上田
俊路報

一薫
聰
泰良
余史子
悦子
登生

俊路
三男
稚代
信子
優子
射月芳

保州
岡公子
鉄治
あつむ
豊太
紀美女

紀久子
大輪
和香
和子
和重
よしこ

さち子
三喜夫
千寿子
上田
俊路報

倉吉川柳会 松本よしえ報

我が胸の希望の星は千ホルト
水襲の底に括つた鬱がある
キヤスターが効いて政界よく回る

回診を知らずキヤスター軋む音
年の瀬を役員会でしめくくる
草屋根を珍しがって旅に出る

強敵と腹をくくって勝負する
腹を括つても閻魔の手の平よ
私だけ良ければよろし除草剤

三浪が腹を括つて家を出た
孫と言ふ星が一番よく光る
宇宙から星が光っているだけだ

望みは一つ星のかがやき子の嫁に
キヤスターがメツタ切りする他人事
億光年星のウインクやつと着く

月末に取支括ればいつも赤
星回りよくなるまでは未婚です
好感を抱くキヤスターも未だ独り

金星だやつたぜ強い琴光喜
現役の最後静かに締め括る
日和下駄紐でくくつてつけてある

女性キヤスター妻より少しいける顔
腹括り白票入れる事にする
草屋根で文化の匂い嗅いでいる

くたばらんぞ脛をなでなで草を引く
星の降るしかけ獅子座の方にある
さそり座のおんなが去ぬる夜明け前

雄々
智子
みち子
悠子
都子
日出子

ちよ子
克枝
完司
睦子
きみ子
螢

芳光
よしえ
久子
泰輔
康子
照彦

賀寿恵
季芳
かつみ
幸子
重忠
玲坊

石花菜
平和ボケしてもやつぱりいい平和
二千年普段通りに暮れて行く
思い出は胸に残つた弾の跡

シンドニーも女が強い二千年
老いながら介護に過ごす重い風
月世界歩いてみせた二千年

キニューちゃんの快挙ほてりがまだ続く
昭和史に原爆という染み残る
金婚へ苦勞忘れた宴に酔つ

こわかつた原爆大火大地震
賞もらい私の宝二千年
次の日を約して渡す靴すべり

ばら一本星は見ていた花盗つ人
泣いているのか瞬きの止まらぬ星
キヤスターも村の雀も大差ない

川柳塔おとり 原みさを報
ゆり子
和枝
次男

由多香
義弘
千秋
雅通
登美
道子

宏章
邦昭
野草
富貴子
仁子
舍人

和子
伝住
黙光
雄々
艶子
庸二

小生
清子
敦子
せつ子
風花
一弘

若者の青い主張に花もたせ
十七歳戦時の花は散り急ぐ
花作りそんなゆとりが出来ました

捨てて前給料袋そつとまで
やな事はさよならしよう新世紀
学び舎に涙こらえてさよなら

万感の思い友との別れの日
また明日逢える夕陽へさよなら
また明日逢える夕陽へさよなら

さよならへ一本植える記念の樹
さよならへ一本植える記念の樹
さよならへ一本植える記念の樹

空の旅故郷が点とよつと着く
両親を送り妻とも死に別れ
さよならへ一本植える記念の樹

さよならへ一本植える記念の樹
さよならへ一本植える記念の樹
さよならへ一本植える記念の樹

飽食のチケツト抱いて心病む
チケツト二枚再びのときを待ち

川柳ねやがわ

江口

来し方に結び直しがたんとある
結び目を解くのは妻に任せとく
何となく結ばれ何となく夫婦

母さんはいつも先頭パパはじり
先頭がこけたらみんな転びます

先頭の喉の渴きを読むゆとり
恋をした天狗が鼻を持てあまし

絶壁に立つて天狗の青い顔
逃がしたと両手広げて釣天狗

サイレンの闇へあちこち開く窓
語り部になろう防空壕の闇

大物を闇に葬るのは女
暗闇で手持ち無沙汰な影法師

回廊の闇み仏に導かれ
仲間の森には温い闇がある

わたくしの値打ちがわかる使者がくる
十円の値打ちをしかと知るパート

帰りたい帰りたいくない闇の部屋
私いま女盛りのいい値打ち

家宝です値打ちあろうとなかろうと
天下り評判程にない値打ち

贖物と知るまで値打ちものだった
五百羅漢どなたも値打ちあるお貌

十七歳の無理な望みにうろたえる

三津子
美恵子

度報

博泉
仁清
弘風

ルイ子
勇太朗

たもつ
シマ子

忠央
利昭

光子
かすみ

波留吉
弘一

報子
恵子

庸佑
冬葉

修
度

高栄
故文

洋秋
あやめ

無理言うてくれて嬉しい好きな人
無理もせず無理もさせずに看護する

無理を承知で来たらあつさり貸してくれ
無理するな父がやさしい言葉かけ

俯いて無理や無理やと言っている

富柳会

池

森子報

茶釜から笑いのネタがこぼれ出す
欠席はがきポストへの道迷つてる

日光浴したがる影が離れない
萎んだり開いたり懲りない自信

Eメールの世にゆつくりと来たはがき
愛さめてはがきになったバリ便り

妻の座で節目節目の背なを押す
葉書からはみ出している親ごころ

真実に詳しくなつてひとりぼち
五階まで女性六階だけ紳士

追い風になつてしまつた有頂天
今日生きている糧に炎の輪をくぐり

生きている証明を出す年賀状
梅一輪ほどに癒しの風を溶く

正体を覗いてみたい知恵袋
極楽ゆき詳しい鬼に袖の下

小雨は決行河原の芋煮会
うっかりとジョークに乗つてよく転ぶ

詳細なりズムが踊る五線紙よ
夫婦仲まで筒抜けになる隣

うしろにも前にも風の落し穴
旅仕度重いや葉を仕舞い込む

とし子
時弘

一風
三郎

磯

夕子
潤子

一夫
和一

ケイ子
巳代一

花梢
文子

勇

アキ
紅紫朗

昭水
年人

誠
信博

あかり
萩乃

信子
満秋

欣之
初太郎

潮の道胸弾ませる車椅子
これだけは切り落とせないへたである

ためらうが教えてくれた落し穴
体力も落ちてすべてが読みきれぬ

風の戯言噂なんかは無視しよう
ステップが乱れて秋が忍び寄る

はがき一葉夏にけじめをつけている
負け方も母の教えの本にある

豊中もくせい川柳会

田中正坊報

ひと休みしたいところにある仏
仏にも鬼にもなれず立ち枯れる

仏顔して四度目も母は聴く
かえりみてこんなに多い×印

笑うこと多くて孫たちの餅の数
回り道ばかりが多い僕の過去

十七歳ノートに答え書けぬまま
南北の民族解放急がれる

母の日も家事から解放ないままに
解放感ちょびり淋しいとも思ふ

泳がして見よっカナツちかも知れぬ
故郷の夕陽は心まで染まる

頭の中カラにしてから考える
活性化できない脳に悩んでる

差し向かい一年しむじみ鍋囲む
ポケットの拳が主張引つ込める

人生の迷路にほしい道しるべ
主婦の座を嫁に譲つて太りだす

年の瀬へわが家のニュース振り返る

高栄
かなこ

冬虹

夕花

森子
美代子

喜代子

紫香
正坊

博子

ただし
求芽

萬的
靖巳

英子
寿美子

しげお
女

吉太郎
祿骨

知香子
重人

柳云児
柳宏子

庸佑

川柳塔鹿野みか月 土橋

螢報

卒寿坂のばれば広い海になる

日が暮れて遊びに出たらそれつきり

悲しみの時に着たものみな洗う

震度六テレビ俄かに騒ぎだす

向日性信じた花がそっぽ向く

運命なら修羅坂道越えてみる

いただいて知る貢献のありがたさ

貢献の深さが見えぬ木の根っこ

感謝状あげたいよな区長さん

身を粉に捧げ尽くしている煮干魚

遠のいてワイングラスも静かなり

評判のワイン僕には渋かった

退院にワイングラスを二つ買う

私にもこれなら飲める赤ワイン

手の届く棚に控えているワイン

フランスのワインが届く誕生日

旅の宿朝食に出るワイン蒸し

甘口のロゼにすっかり酔いつぶれ

逢う人に逢えなばどうでもよい花火

太っ腹の大蛇にからむ下戸である

巳の年に貯めた貯金を旅に出る

ライバルの白玉ネクタイ蛇に見え

還暦を祝う巳年が酔いつぶれ

抜けがらを残して蛇よ何処にいる

弁天池を横切る蛇は敬おう

蛇毒春だ勝手にも赤くなる
冬眠の蛇の寝息が洩れる穴

喜与志

蟹郎

武子

幸枝

弘子

汲子

汲香

隆風

きみ子

諷人

茂

実満

孔美子

久枝

富久江

みさ子

睦子

和子

かつ乃

公子

野草

節子

よしえ

八重子

くに子

和枝

白蛇に出逢ってからの笛の音
千年の衣を脱いだ白い蛇
仏にも神にもならず蛇になる

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男報

世紀末残る味方の数を読む

政治家の狡さよっかり見届ける

リモコンのようには使われ生きている

破滅への歩幅変わらぬ世紀末

リモコンで繋ぐ愛は軽くなる

肩もんでくれる女房いっち好き

休耕田抱えて世紀末の底

不景気へしっかり爪の灯を守る

長男だしっかりせよと釘刺され

大いなるものにリモコンされ生きる

気まぐれな神のリモコンにも困る

リモコンの届かぬ位置で伸びをする

職安で呻く父さん垣間見る

リモコンへたまには反旗翻す

リモコンで借金取りを追い返す

しっかりと握ったお金離さない

呆けた姑リモコンもって楽しそう

目も耳も口も乾いて世紀末

しっかりもどほどにして世のひろさ

ボケそうであるしっかりネジを捲き直す

四捨五入されるいつも捨てられる

リモコンは押すが炊事はしない指

リモコンの場所見付からず時間切れ
世紀末うしろにストーカーがいる

宣子
石花菜
螢

洋々

鬼檜

鐘庵

金祥

忠良

蟹郎

芳光

美恵子

志げ緒

一京

一瑤

春名

益子

昌鼓

日の出

雅女

茂登子

敦子

健一

喬水

圭一郎

静香

一枝

螢

リモコンの電池やっぱりいれておく
世紀末まだ続編が僕にある
世紀末ロト六と言っ薬がある
しっかり貯めてポツクリ寺持って行く
ほどほどに耐えて乗り切る世紀末
世紀末には還りたかった北の島

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

頂いた臓器新世紀を迎え

二十世紀まるまる生きてきた白寿

みどり児の拳の中に新世紀

来年はどんな名前と梨が問う

戦争の絶えた日はなし今世紀

南北がひとつの国に新世紀

新世紀ひとつよろしゅう頼んます

ゆっくりと古い二人なり世紀末

幾世紀ねむり続けて来た遺跡

遠くても子のためならば親心

行き違い今日あなたが遠く見え

遠い道罪いくつ持つ遍路笠

水平線のかたに置いてある大志

遠いのは心と心つなぐ距離

リタイアで北の新地も遠くなり

ボランティア使い走りはまだ出来る

ブレインキのない十七歳の嘆き

完走の笑みは順位にこだわらず

走らない仕事っぷりで慕われる

待つバスへ走るポーズの老いの足

時が走る年々歳々速くなる

行男
康博
良雄
静生

孝男

喜美子

ただし

螢柳

祥風

まみ子

千里志

信男

春子

須美子

直次

昭子

よろろ

セツ子

黒兎

賢次

保子

久子

正三郎

見清

雪子

祿骨

援軍のラツバよ走れ西部劇

走り出す孫へ声だけ追いかける

鼻の差の得票数に世界揺れ

庭の檜枯れずも枝で新芽待つ

旅帰りに枯れずに待つてくれた花

冬枯れへ万年青の赤の心意気

枯れる年なのにまたまたダイエツト

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

叱られて叱った母も泣いている

子を諭す父の言葉にある矛盾

往復のハガキ逆刷して慌て

花道はなかつた亡父の無蓋貨車

おてんばな婆さんだった貨車だった

どのコケシ抱いても泣きたい青春譜

人生の矛盾を洗う除夜の鐘

矛盾など気にせず今日の曆剥ぐ

矛盾には馴れた世相に流される

自転車に落とされ娘の泣きわめき

一枚のハガキに全部語らせる

左遷地の夢は捨てない子のはがき

古々米の貨車は今年も売れ残り

折鶴が泣くな泣くなと泣いている

好景気煽る姿の貨車走る

絵も文も大人になって行く賀状

骨埋める転出ハガキに書いてある

致死量の水をよろうこぶ冬のバラ

飲み会のハガキ私を包み込む

上京の貨車はりんごの唄が好き

幹 実

柳 童

馬 洗

敵 子

桂 子

正 安

謙 一

きよし

凡 々子

一 閃

蛙 痴郎

紅 雨

彩 人

北 歩

順 風

龍 人

慕 情

銀 波

ふ さ 美

花 匠

雅 城

愁 女

ツ ね

花 峯

一 花

泣きことは言わぬ真冬の貨車である 五葉庵

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

ぐうたらな私を叩く冬の天

焼香の煙ふとわたくしのこと

天高し昨日の嘘はケセラセラ

霜おりに凍て雪のことそこに菊

七転び秋を探して物足りぬ

ちちははの別れを決めた無為無策

上層は煙つて正体現わさぬ

天命を終えやすらかに眠る顔

青天白日何故にリストラされたのか

火の気ない煙女の自己主張

いずも川柳会

佐藤 治代報

秋霖に妻を労る傘をもつ

秋霖に趣味一日を費やす

青い果実いまに輝き増すだろう

約束を走り書きした箸袋

万物の恵み豊かな陽を貰う

秋霖やせめて心に虹を描く

秋霖に心しつとり濡れてくる

地下足袋で歩いた俺の半世紀

十文半足袋の温みは忘れない

地下足袋で来て地下足袋で帰る父

正論を吐く末席の箸袋

盃の隣でがまん箸でいる

水 煙

サダエ

まこと

満 江

ちかし

治 代

文 子

芙 佐子

玲 子

すみこ

昭 二

叮 紅

きみえ

多 賀子

昌 枝

れいじ

蛙 報

石 舟

みつ子

蕉 子

照 子

宣 司

恭 昌

絹 子

久 峰

靖 巳

富 子

豊かさには昔の苦勞は通じない

豊かだから心の汚点見えてくる

豊作に出番がない在庫米

豊かさになれて流れがにこり出し

豊かさの中に気付かぬ落とし穴

年金に見合う豊かさ蠲焼く

豊かさに見合う豊かさを見失う

音もなく秋霖母の胸に降る

秋霖の中大切な人送る

秋霖や肝心要なものがない

秋霖にぬれた心が乾かない

秋霖やまた聞かされるスキヤンダル

ピアスして私輝く鳥になる

輝くと天敵の目になられる

新世紀輝く未来子約する

輝いていたたく墨を擦っている

地の中で輝いている自然書

翠 洋 会

児 玉

冬ざれや病床できく師の計報

鬼の遊びくつきり淨く目に残る

今頃は鬼となわとびかくれんば

温かいふところ叡智あふれそう

むなしがも一度師の名呼んでみる

ジョーク一言とび出しそうな師の柩

ほほえみのあの日この日も雲の峰

柳界の鬼才の逝去悼む月

傘寿はやさらばさらばと逝き給う

水 煙

サダエ

まこと

満 江

ちかし

治 代

文 子

芙 佐子

玲 子

すみこ

昭 二

叮 紅

きみえ

多 賀子

昌 枝

れいじ

蛙 報

石 舟

みつ子

蕉 子

照 子

宣 司

恭 昌

絹 子

久 峰

靖 巳

富 子

もう一度そうかそうかと聞いて欲し
今頃は三途の川で煙草吸い

伽羅 義

惜しまれて弥陀を訪ねる花あかり
ひょうひょうと語るお姿今は亡し

志華子 舞夢

恩返し出来ないままに訃報知り
白髪が目立つ葬儀の冬日和

日の出 真理子

終章を先生らしく世紀末
翠洋会ひょうこり来ぬか今日あたり

さと美 会美

川柳塔碑句会賑やか師を迎え
雲の峰八十路の旅へ詩のこし

春 千枝子

ありがとく鬼遊先生ありがとく
鬼遊さん西方浄土のあたり

千梢 千枝子

ユーモアが五七五にあふれてる
好きなたた広めに一人旅立ちぬ

東雲 正雄

お人柄惚ぶ山茶花散りに散る
温厚な人柄しのぶ八尾あたり

喜美子 澄子

ひとひらのかそけき雪になり給う
鬼遊節聞かれず冬が居すわりぬ

尚士 希久子

冬空に洒落たジョークは消えたまま
楓 楽

南大阪川柳会

吉川

寿美報

愛情に答えられない無精卵

幸子

三分が勝負で朝の目玉焼

ななきさ

卵割り黄味が二つで仲直り

日出子

弱肉強食弱者はたとえ卵生む

度吉

超安値鶏も言ひ分あるだろう

ゲン吉

院長回診ぞろぞろ卵連れてくる

三男

風向きへ死んだふりして利巧

朝子

お流れを頂戴うまく立ち回る
沈黙が利巧と読んで出さぬ口

雅文 庸佑

利巧ぶる隙から洩れたスキャンダル
お付き合い程度で済んだ流行風邪

章久 故文

流行のように離婚が軽すぎる
親指族けい帯メールビポバビ

ひさ乃 直子

流行を追って似合わぬ服を着る
お利巧なサルを教育しています

和歌子 宏

レッテルは人畜無害と貼っておく
レッテルもメツキもすべてはげた朝

たもつ 柳伸

レッテルの自負は妥協許さない
ブランドのラベルに弱い日本人

重人 重人

レッテルをはがして男強くなる
支えられやと生きてる臥龍松

のぼる 叡子

老木は言いたい事がたとある
縄を巻かれた老木芽まれる

萬的 東雲

最後に帳尻合わす利巧者
流行を追って頃が華だった

柳宏子 遠野

シヤケの卵いくつ魚になれるやら
妥協などしないつるとなま卵

千梢 千梢

純情なレッテル捨てるぬぎつぶり

久峰 正博

そばかりの婆ちゃん昔美人よね
歳を経て起伏ゆるめどまだ色気

重忠 セツ子

外食は服の匂いでわかります
熟年の胸の起伏が面映ゆい

玲泉 玲泉

戦中と戦後の起伏耐えて生き

和美子 和美子

和華 和華

手打そばかすも残さぬしなやかさ
古稀すきてシミソバカスは勲章だ

晴光 澄子

感情の起伏激しく四面楚歌
好きだから鼻のそばかすまで可愛

京子 小生

句いだけ残して消えたメスギツネ
天高く句い届かぬ鱗雲

勝見 佳女

母ちゃんの気分のような空模様
感情の起伏を捨てて仏様

善江 善江

起伏道我が人生の縮図かな
半生の起伏に捨てた夢もある

幸香 幸香

そばかすの事を言うたらすぐ帰る
この匂い妻の匂いとおんなじだ

季芳 季芳

句いづけしてまわってる酔っぱらい
感情の起伏抑えて墨をする

和歌子 和歌子

そばかすの枕がイッチよく寝れる
草藪の起伏に雉子が住んでいる

玲坊 玲坊

十両と幕下アップダウンする
鋸の刃の如き起伏を越えた皺

孝恵 孝恵

そばかすで双子の姉妹見分ける
魂を入れた起伏を撫でてやる

かつみ かつみ

生き抜いた起伏を語る深いしわ
少年の起伏は親を手古摺らす

雄々 雄々

横浜あおば川柳会

節子 節子

清水

潮華報

しなやかに生きよと竹のたわみ見せ
故里の空恋しがる竹トシボ

早智 早智

早智

真直ぐな竹の素直に脱帽だ

竹とんぼ昔遊んだ一ページ

烙印が冬まで残る超ビキニ

日当りを移動しながら立ち話

太陽が好き骨太に生きている

太陽の恵みの下でいがみあい

太陽が月だ星だと言ひ寄られ

星空を語る余裕のない暮し

星座から離れて独り光る星

オリオンの子青き目にしむ冬の空

眠らない街に星座が追いやられ

東京の空は嫌いという星座

妻連れて歩幅気にする病みあがり

妻に似た娘息子が連れて来る

連れ添って見えて来ました裏表

見合席引きさて役も連れて行く

児の夢を乗せ飛んでゆく竹とんぼ

太陽にされて張りきりだした嫁

連れてきた娘の客に冷たい目

連れあひの中に時々他人顔

ホームレス故郷と同じ星座見る

太陽の恵み知らないもやしっ子

温泉に連れて行くよは酒の上

星座からギリシャ神話が近くなる

太陽のリズムで暮すホームレス

過疎へ来て星座と長い話する

川柳藤井寺

高田美代子報

親父の血引いたかわしも遊び好き

恒雄

道子

笑子

句多留

雅子

ふみ

敏

かず枝

亜希子

あらた

鈴美

為佐子

良子

政勝

かづ子

和可

街湖

広和

純子

裕峰

八重子

三郎

絹子

二郎

十三子

潮華

満秋

人生を豊かに染める遊びごと

介護ベッドへロポットが来て遊ぶ

ジャンケンポン子供の声が聞こえない

るぶして秋の女は満ち足りる

カフェオーレ女ばかりの午後三時

風の子の姿が見えぬ寒いなあ

鉛筆の先に遊びがまだ少し

登り坂手前で捨てたサンングラス

坂の上港の船が小さく見え

秋雨に煙る山坂石仏

突然に坂を転げていった亡父

楢山へもうしばらくの登り坂

坂の途中でスッポン料理食うている

信心の坂で人間とりもどす

鐘の音が元気をくれた遍路坂

坂登る余力はちゃんと残してる

ふたりして登った道だふり向かぬ

坂にいて坂を忘れるもみぢ狩り

我が家にはわたしの居場所ちゃんとある

古ぼけた映画の中にいたわたし

順風のわたしを試す向い風

そそっかしいわたしを叱る向う脛

保護色に溶けて私の彩がない

振り向けばわたしの影が病んでいる

花一輪足せばわたしも蝶になる

うっかりといやなわたしが出てしまっ

びしよぬれになってわたしが見えてくる

怒鳴りたい時も淋しく笑う癖

こぼれ萩心配ごとがまた一つ

かつみ

一筒

昌子

美代子

アキ

重人

悦子

六点

利武

春蘭

淑子

敦子

大八

花梢

志洋

史郎

みよ子

瑠美子

喜代子

扶美代

鐘造

香代子

治子

千里

和樹

昭子

絹歌

トミ子

川柳会 梨花吟行

とき 4月21日(土) 10時開場

ところ 鳥取県民文化会館2F

兼題 2句 出句締切り 午前11時

「阿」 橘高薫風選

「道」 濱野奇童選

「鶴」 齋藤大雄選

「梨」 久保田半蔵門選

「悪」 奥山晴生選

「桜」 夕 凧子選

「夢」 松 彬選

「鳴る」 辻 葉選

「豊か」 小林由多香選

「筍」 白根ふみ選

「地」 牧野芳光選

「友」 大角幸代選

「湖」 上田宣子選

閉会 午後3時30分(予定)

会費 4,000円

(昼食・お土産)

宿泊 レーク大樹(10,000円)

(宿泊・懇親会費を含む)

連絡先 坂田 和歌子

0857-123-3248

柳界展望

猫になり犬にもなつて大
変だ 鈴木 公弘

★第二回吉本没句供養川柳
大会は12月22日、大阪ミナ
ミ道頓堀くいだおれで開か
れた。当日の本社同人の秀
句は次のとおり。

★川柳サークル卯の花は平
成12年度年間作家賞を發
表。最優秀作家賞は小池し
げお氏。
優秀賞①川島颯云②石原
靖巳③大野百合子④小池し
げお⑤笠嶋恵美子の各氏。

▼表 彰▲

★千葉県松戸市で12月3日
松戸川柳大会が、158名
の参加により松戸市民劇場
で開かれた。当日同人の播
本充子さんは次の二賞を獲
得した。

〈松戸市長賞〉

二番手に居る生臭いシル
エット

★西宮北口川柳会の平成12
年度年間賞が決定した。
カップ永久保持者は田辺
カツブ

乾杯のテンション下げる
ウーロン茶

★第19回鳥取県没句供養川
柳大会は、12月10日鳥取共
済大ホールで開かれた。出
席者は170人で、当日の
本社同人天位入賞者は次の
とおり。

鹿太氏。優秀賞は①田辺鹿
太②西口いわゑ③川島颯云
児④石原靖巳⑤長浜澄子の
各氏。

★京都塔の会は平成12年度
成績を発表、12月25日の句
会で表彰した。

最優秀句賞は山本礫氏。

大空に今日も抱かれてい
る命 倉益 一瑤

得点賞は①大野百合子②山
本礫③都倉求芽④田中正坊

★平成12年11月本社句会で
の鳥取県西部地震の募金は
常任理事会会費と合わせ、
被災者代表に贈られた。

新同人紹介

田賀 八千代
天笑・公弘・洋々・完司推薦

猪川 由美子
天笑・公弘・洋々・完司推薦

中宗 明
天笑・公弘・洋々・完司推薦

★薫風名譽主幹執筆の「大
空のころ」は、13年1月
号120回をもって終了。
ご愛読有難うございました。

▽出 版△

■柳ザイロから英訳川柳、

『万華鏡』（18×11のカ-

ド48枚で一枚に一句紹介、

箱入）が出版された。評訳

は岡田秀穂、エイドリアン・

ピニングトン、速川美竹。

本社関係者では次の句が英
訳、紹介された。
死線彷徨つてあの世の事
を聞き洩らす 黒川 紫香
今はもう人類愛という夫
婦 奥田みつ子
まな板の上でうとうとし
てしまふ 川上 大輪

螺旋階段 有頂天まであ
と少し 故川上 富湖
■故松川杜的・芳子川柳句

集『いのち』が、黒川紫香、正本水客、都倉求芽氏の発行により出版された。B6判214頁。印刷、装丁、製本は森下愛論氏。

▼計 報▲

■野呂右近氏（理事・守口市）平成12年7月病氣のため死去。
■和泉あかりさん（同人・川崎市）の夫君、良尚氏は12月5日肝不全のため死去（58歳）。

■森山盛桜氏（同人・鳥取県）母堂、ミツエさんは12月11日病氣のため死去（73歳）。
■松川芳子さん（同人・京都市）母堂、ハルさんは12月12日老衰のため死去（99歳）

★第72回京浜川柳大会
日時 13年4月29日 10時
会場 かながわ県民センター1階
第一部（出席者のみ・2句）
放し飼い 関水華選・背景
西潟賢一郎選・早合点

いしがみ鉄選・白紙 松岡
恵美子選・パトナー 竹
本瓢太郎選・運ぶ 金子美
知子選・羽ばたく 尾藤三
柳選・特別課題（1句）馬耳
東風 堀井勉選 締切12時
賞 横浜市長賞他 参加吟
（自由吟旧作可） 二千元

共選 締切り3月10日
各題葉書大の用紙で、千円。
出句先 〒223-0005
7 横浜市港北区新羽町1
7 4 7 荒井広和方、京浜川
柳大会第二部係 Ⅷ045
1542-3272

★日本のへんにちなむ川柳
募集 中央標準時を示す子
午線（東経135度）と、緯度
（北緯35度）が交差する西
脇市比也野里の、まちづく
り委員会にて川柳を募集。
テーマ①へそを織り込む
かへそを想起させる作品。
②自由作品 葉書2句以内
締切 13年3月31日
投句先 〒667-0005 4

兵庫県西脇郵便局私書箱40
比也野里まちづくり委員会
▼訂正とお詫び▲
■12月号 P56（川柳の群
像）下段8行目 漢字の↓
漢字の。P66（茴香の花）
上段4句目「花の名を一つ
覚えた今日の幸」を本人申

し出により削除。P103（私
の川柳）下段11行 人生や
↓人の世や。P126（柳界展
望）下段14行目北野哲夫氏
↓北野哲男氏。

■1月号 P56（自選集）
23行目金井文秋さんの句、
悪役と言ふ転業↓悪役と言
う職業。P169（年賀広告）

原稿募集

私の川柳

本文 20字×149行
エッセー（題材自由）
本文 20字×70行
ひとこと（題材自由）

以上には題をつける
この一句

思い出の句、心打たれ
た句など200字以内

締切なし。掲載の時期等
については編集部に一任
して下さい。

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	17日(土)午後1時から 曲線・のり・ポイント・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会 梨花	17日(土)午後1時から 如・浮き舟・椿・しんしん・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町40-3 宮木方 坂田和歌子
岸和田川柳会	17日(土)午後1時半から 素顔・正論・総なめ・大器	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	18日(日)正午から 欲目・予感・さっぱり・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半から 恥・立春・マイペース・自由吟	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	19日(月)午後1時から 午後・退く・流行・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
川柳クラブ わたの花	23日(金)午前10時から 島・コップ・土産	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	24日(土)午後6時から 猫・みかん・鉄・叩く	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市川柳会	25日(日)午後1時から スポット・ちゃんと・限界・「隠居」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	25日(日)午後1時から 右手・リコール・あれこれ	JR鳥取駅構内 シヤミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	26日(月)午後1時から 幅・……やすい・一応	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	26日(月)午後7時半から 寒い・肩こり・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	28日(水)午後6時から 閉口・問屋・ちぢむ・両用	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川柳塔 な	1日(木)午後1時から 機嫌・血・寝る	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	2日(金)午後1時から 針・黄・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	3日(土)午後1時から 節目・袋・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
川柳塔 みちのく	3日(土)午後4時から 嫉妬・重い・冷える	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 唐津支部	4日(日)午後1時半から 生まれる・影・移る	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
堺川柳会	8日(木)午後1時から 散る・女優・とくり	堺市総合福祉会館 3F ラウンジ 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打吹	10日(土)午後1時から わくわく・歩・足枷	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 凍る・滑らか・配る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
八尾市民 川柳会	10日(木)午後6時から 駅・風邪・同じ・可能	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	11日(日)午後1時から 駅長・大御所・乾燥・如何	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	12日(月)午後1時から 天・秘密・あふれる・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	13日(火)午後1時から 奮・疑う・一丁	豊中市立登池公民館 阪急・モノレール登池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	13日(火)午後1時半から ハンドル・似る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
高槻川柳 サークル 卵の花	15日(木)正午から いつか・踏む・ハプニング ためらう・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児

編集後記

事日程によつては、急ぎの原稿を依頼する場合があるかも知れないが、何卒ご協力下さい。

○一月は往ぬ、二月は逃げる、三月は去ると言う所だ。この一年は四月以降もこの調子で、活気ある忙しい年になりそうである。

○西尾栗先生の七回忌句会、路郎・葎乃比翼句碑建立が目前に迫り、行事計画も具体化しつつある。こうした

結社挙げての行事を成功に導くのはひとえに同人、誌友の皆様の支えあつてのことで、一人でも多くの参加

ご協力をお願いする次第である。

○各々の行事を特集する編集部は、原則として原稿は二カ月先の二十四日、つまりこの二月号は十二月二十

四日で締切り、準備に入るけれど、出来るだけイキのいいフレッシュな内容の記事をお届けしたいので、行

うお願いします。

(ふ)

○ある結社の編集に携つて

いる人との雑談——

私「こんなに忙しく編集や作句に追われていたら、あつと気がついたら棺桶の中に居るかも知れませぬね。」

某氏「まさにその通り。この調子やつたら、忙しさにまぎれて死んだのに気がつかず、棺の中で編集したり締切りに追われて句をヒネつてるよ。きつと」

初心

浅学な頭で五年近くも初歩教室をやっていると、マンネリ化しているのではないかと危惧している。言葉の乏しさ、発想の貧しさなどいつも川柳塔誌が送られてきた時、忸怩たる思いがさせられる。そんな時初歩教室の方々からの謝辞のお手紙が届くと、ああよかつたのかなと気を取り直す。

正直申せば、私自身、川柳とは

も家族の一員となつてきた。毛詰まり防止ネット、二十四時間換気システム等々。

★規約を改訂するか否かの問題が提起されたが、「ペット飼養は飼い主の責任とし、良識に委ねる事項」として、他に迷惑をかけないよう注意するに留まり、規約改訂には至っていない。

★最近、ペット同居型マンション発売のチラシを見た。うが、犬はノーツと叫ぶだろう。ニンゲンもイヌもコロコロ野原を駆け身も心も癒

泣き声低減、浴室・洗面に

される。

(よ)

何か「さつぱり分らない。だから最初この教室をお引き受けするに

はずい分躊躇したのだが、橋高薫風先生に強引に押し切られた経緯がある。

また会社勤めの身であるだけに、毎月重荷ではあるが「初心に帰つて」皆さん方と一緒勉強できる喜びを得たこともまた事実である。

(吐田 公一)

毎日朝晩お散歩できるだろうか。人間は癒されるだろう。

ひとこと

★昨今、癒しブームと言われている。私が住まうマンションも新築入居当初は、ペット(主に犬)禁止であった。以前から飼つていて引き取り手が無く、且つ小型犬なら一代限りとの申し合

わせがなされた。そして十五年なんとなく黙認の形で犬を飼う室が増えてきた。

★高齢化社会を迎え、また、核家族化、少子化など社会環境の変化に伴い、ペット

泣き声低減、浴室・洗面に

される。

(よ)

何か「さつぱり分らない。だから最初この教室をお引き受けするに

はずい分躊躇したのだが、橋高薫風先生に強引に押し切られた経緯がある。

また会社勤めの身であるだけに、毎月重荷ではあるが「初心に帰つて」皆さん方と一緒勉強できる喜びを得たこともまた事実である。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（4月号）

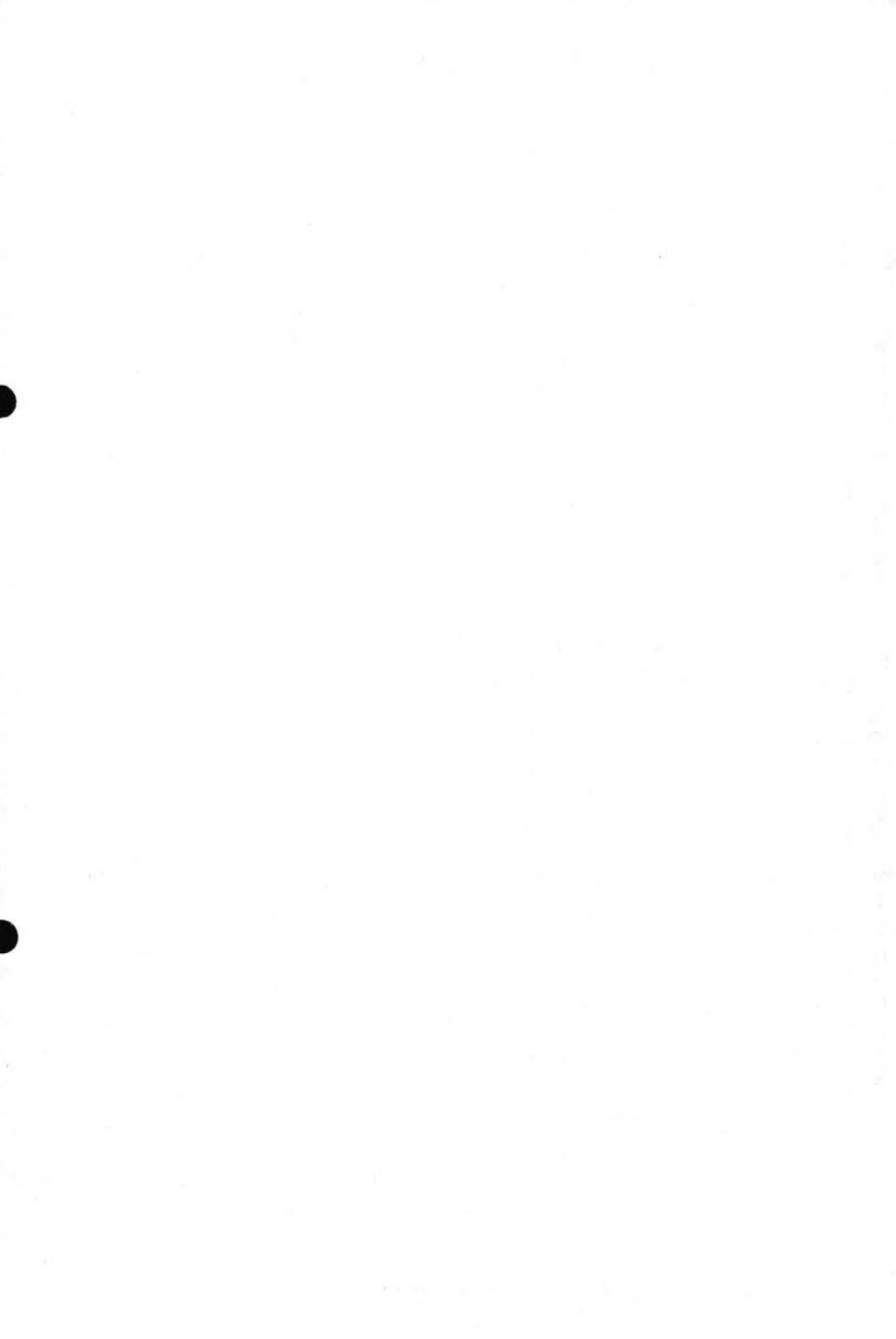
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

4月号発表 (2月15日締切)

川柳塔 (8句) 河内天笑選
 水煙抄 (8句) 板尾岳人選
 愛染帖 (3句) 波多野五楽庵選
 茴香の花 (3句) 西出楓楽選
 吟題 (3句) 「生まれる」 川本 畔選
 「影」 長谷川 淳選
 「移る」 山下省子選
 初歩教室 「甘い」(3句) 吐田公一担当

5月号
 課題吟 「ギャグ」「うかうか」
 「運ぶ」
 初歩教室 「確か」

本社2月句会

とき 2月7日(水) 午後5時半
 ところ アウィーナ大阪 4階
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「タクト」 松原寿子選
 「偶然」 吉村一風選
 「消す」 岩佐ダン吉選
 「渡る」 前 たもつ選
 「天」 河内天笑選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
 会費 1000円 投句料 500円

本社3月句会 7日(水) 予定

兼題 「ロマンス」「紅」「笛」
 「並ぶ」「達人」

夜市川柳募集

第9回「錯覚」 加茂如水選
 ハガキに3句 2月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

定価 六百元(送料84円)
 半年分 四千元(送料共)
 一年分 七千九百元(同)

二〇〇一年(平成十三年)二月一日発行
 編集兼 河内 権治
 発行人 美研アート
 印刷所 美研アート
 〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇-一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
 電話 ☎ ☎ ☎ 六九一四番
 振替 〇〇九八〇一五一一三三六八番

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページに投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

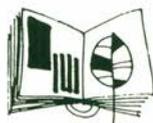
株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 6941-9631

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178